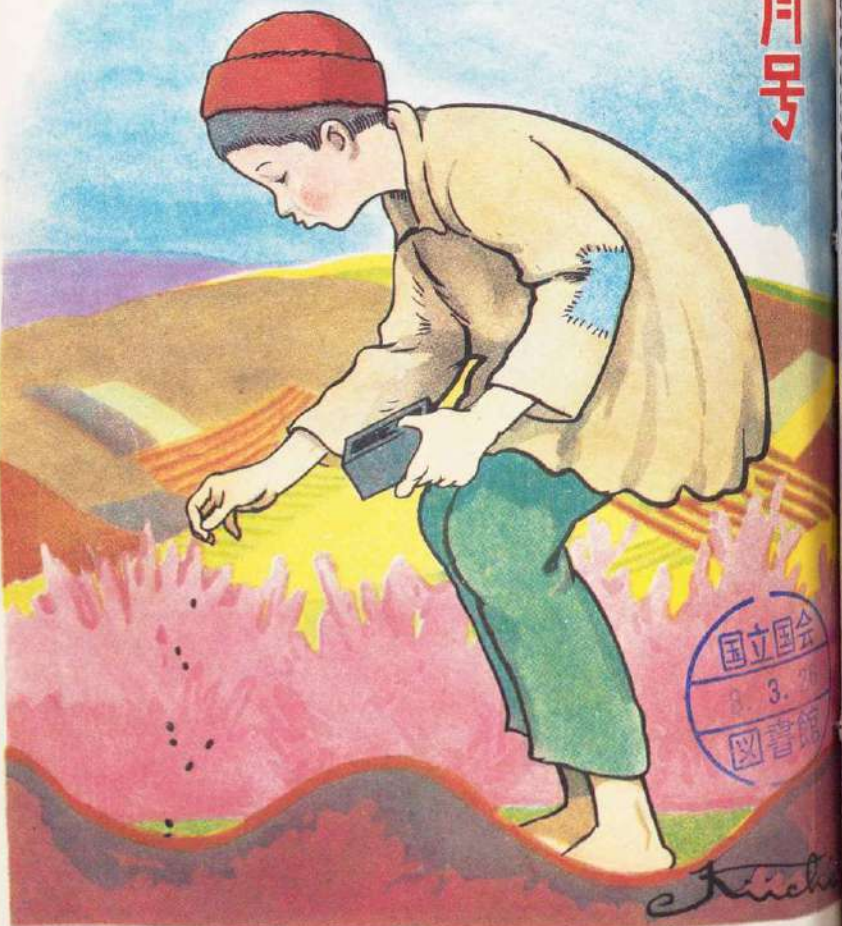


Z32-B88

金の星

第九卷 第三號

三月号



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

日本童話傑作

菊列 箱入 五四〇餘頁
さし糸(三色紙)三八葉
定價 三圓七十五錢
送料 廿七錢

童話作家協會編纂

(附録)

日本童話史・會員著作年表

執筆會員

岡本歸一 村山知義 武井武雄
川上四郎 初山滋

第一輯

童話作家協會を興し、
餘家の傑作を収めた年
刊童話集で内容に於て
も外側に於ても空前の
大盛況集であります。
現代日本童話の最高
水準を示すものとして
凡ての家庭と學校に本
書をお奨め致します。

秋田 雨雀・蔵谷 蔵村・安倍 幸雄・蔵谷 小波・岩井 信實	津島 豊・野島 龍天馬
宇野 浩二・小川 未明・小野 政方・小寺 融吉・尾関 岩二	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬
津島 豊・野島 龍天馬	津島 豊・野島 龍天馬



丸善株式會社

本社
東京
大阪
京都
名古屋
仙台
札幌
旭川
釧路
網走
青森
弘前
盛岡
秋田
山形
福島
茨城
栃木
群馬
埼玉
千葉
東京
神奈川
横浜
相模
武蔵
埼玉
千葉
東京

んさ鳩いい愛可



畫郎治萬内寺

世界少年少女名著大系 (34)

金の星社編・装幀・岩岡さも枝女史

フランダーズの少年

金の星誌上で大評判を受けた「フランダーズの少年」が一冊の美しい本になつて出ました。雑誌の上では全部を掲げることが出来ませんでした。本には始めから終りまで完全に紹介されてゐます。

雑誌でこの名作を読んだ方は、必ず美しく装幀された「フランダーズの少年」を愛読書の一として書棚に飾られるでせう。

この物語りは、藝術家の尊い魂を持つて生れながら、その日の暮しにも困るやうな哀れな家に育つた少年の物語りです。その優しい心と、藝術にあこがれる天才的熱情と、その奮闘心とは、實にあはれにして、嚴肅な氣持を與へます。

老犬バトラッシュが、少年に命を救はれた爲めに、一生を捧げて盡すそのまごころには、何人も涙を覚えます。かういふ偉大な作が、少年少女の爲めに書かれた事は實に喜ばしい事です。と同時に一人でも多く讀んでいただきたいと思ひます。

町坂動郷本京東
社星の金

番六九五九五京東替振

四六判箱入頗美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

☆☆☆ てしと物讀俗通の庭家御 ☆☆☆

神近市子譯

菊版美裝 定價三圓八十錢
四〇四頁 送料(書留) 十八錢

ヴァン・ルーン 著 聖書物語 (舊約の卷)

ヘンドリック・ウキレム・ヴァン・ルーンの世界的名著「ザ・ストーリー・オブ・ザ・バイブル」の譯述です。原著者は米國に於ける史學の權威者にして聖書を嚴密に有りのままの姿で残さうと努めてゐる人です。そして、本書にて聖書の史料のみによらないで、アッシリアやカルデア、マセドニア、ギリシヤ、ローマの史料を参照して眞實であると思はれることが傳へられてゐる。その装幀の美さと挿畫の見事さは原書と寸分劣らぬ品格を備へてゐます。學校の圖書館、教會寺院の圖書室、家庭の應接室の必備書として、又クリスマス、歳暮年始の贈答品として心から推稱いたします。

ヴァン・ルーン 著
神近市子 譯

聖書物語 (新約の卷)

今秋十月刊行
定價未定

發兌 東京市牛込區 山伏町一四 日本文學院 振替東京 一五六一 三六六

沖野岩三郎
著 生先

日本の児童と藝術教育

本當のいふ童話といふのはどういふものかをはつきり述べて、その作法までも明らかにし、日本の児童にはどういふ童話を與へなければならぬかといふ事まで懇切に説いてゐる。

錢十八圓一金
錢六金料送

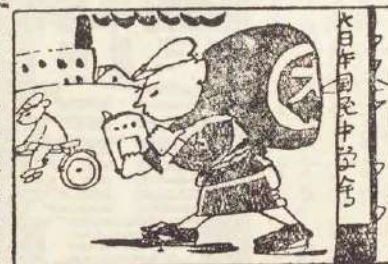
(二) 小學校ヲソツゲアシタ、
カサンノゴドモタチハ、イ
ヨヨノナカヘトビダシタ。
ヨノナカハ小學校ニエルトキ
オモツタ事ド、タノシクハ、ナ
カツタ。



小學校卒業後

小學校卒業後
いくつもの事情で上の學校へ
行くことが出来なかつた。諸君は今
スズメ本會へ入會して日本一の
中學講義録で勉強なさい。

僅が一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。



CD シンキチハ、ウチガビンボ
ウナダメ、テツチニダサレタ
ガ、ヒトニマケナイキデ、ダ
イニホシコクミンチュウガク
クアイニニフタワイシテ、コ
ーザロクデベンキヨウシタ。



(三) ヨサケモ、ウチノテツダイ
チシナガラ、ヨーギロクサベ
ンキヨウシタガ、トンキチト
ミタロウハ、トウキヨウノ、ナ
ユウガタヘハイシテモ、ナマ
ケテ、カツドウシヤシン、バカ
ヲミテアルイダ。



二十 十ホドタツテ、
キチハ、リツバナカイシヤノ
シヤチヨウニナリ、ヨサクハ
ソソカイギインニナツタガ、
トンキチトヨロウハ、オナ
サケテ、シンキチノカイシヤ
ニツカツテモウツチル。

◎入會するには今が一番好いときです
講義録見本規則書甲込無代乙込で送呈
東京 大日本國民中學會
駿河臺 電話神田區靈龜臺・靈龜臺
東京 靈龜臺 電話東京區二〇〇番

金 星 社 編 星 系大著名女少年少界世

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一第

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中船難に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程澤山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だといへばれてゐます。

編二第

ナポレオン物語

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生じた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘレナで淋しい死に達するまでの變化極まりない物語をわかり易く面白く書いたもので、一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

編三第

ドン・キホーテ

イスパニヤのある村にクイザノといふ男が、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到處で大失敗をして、遂にはあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

編四第

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心懺悔して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極まりない運と、大きな努力には、感嘆せすにはゐられません。その面白、物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

編五第

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

金 星 社 編 星 系大著名女少年少界世

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六第

ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に傳へられてゐる面白い物語りです。シャールウッドの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をなぞります。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後に厄のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

編七第

アラビヤナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊ばれてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつ、お姫を迎へては翌日は殺してしまふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤナイト』だといはれてゐます。

編八第

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤ神話ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『オデッセー物語』と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸る迄の物語りです。

編九第

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『かみ』『女訓』『真夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

編十第

グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金 星 編
世 界 少 年 女 著 名 大 系

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第
入 繪

イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づつの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

編二十第
神 話

古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

編三十第
子供キリスト傳

新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエスキリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この偉い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

編四十第

西遊記

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的名作です。この本を讀まない者は不幸です。

編五十第

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて来て、息もつけぬ面白く物語ります。

金 星 編
世 界 少 年 女 著 名 大 系

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第

聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム、イサクの縁をらび、羅の柱になつたロトの妻、鹿の肉の好きなイサク、ヨセフの夢、例證など、實に面白い物語です。

編七十第

奴隷トム物語

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は美國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

編八十第

ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまでに世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土著にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることに出来るのです。

編九十第

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど、驚く世界の寶です。本書に收めた作はアンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編十二第

小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを一讀下さい。

金 星 界 少 年 少 女 著 名 大 系 編 星 金 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編五十二第 編四十二第 編三十二第 編二十二第 編一十二第

母を尋ねて三千里

本書は伊太利文豪アミチスの世界的名作『タオレ』の中から、最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはる／＼と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又蘇破船に乗り込んで自分の身を棄て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語ばかりです。少年少女必讀の書。

不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がいました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちに、つひつと眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な／＼夢を見たのです。覺めてからのち、アリスはお姉様にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

青い鳥

メーテルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありません。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、束來の國と移り歩くチルナル、ミナル二人の姿は、ちやうど活動寫眞でも見るかのように、皆様の眼の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

爲朝一代記

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありませう。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバシイ魅力をもつ事であらう。本書の表紙の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀まして本書の内容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピアの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したか、又可憐な花の如きオファエリヤ姫のほかならぬ最後など、一讀、再讀、い／＼熱涙を覚える名篇であります。

金 星 界 少 年 少 女 著 名 大 系 編 星 金 社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六廿第 編七廿第 編八廿第 編九廿第 編十三第

新ロビンソン漂流記

スキヤを船出した汽船が大暴風に遭遇し、南洋の無人島で難破して、再び、一家族六人の者が助けられました。その内四人は少年で、この六人の者が救ひの船の來るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生の植物を食物にしたり、狼や蛇鳥をお友達にしたりして、實に面白いお話です。

ボムペイ最後の日

伊太利のベスピアス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたボムペイの町のお話です。妖術使や魔女のやうな悪い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、空の星のやうな美女や、義侠に富む勇士などが現れて、歴史にながく傳へられる『ボムペイ最後の日』のあらはにして、悲しい物語となつてゐます。

少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪なだれにあひました。その時なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血なとど、涙ながれるものばかりです。

ロミオとジュリエット

有名なシェークスピアの作つたロミオとジュリエット二人の物語は、最初から終りまで泣かすには讀めない程あはれにして、はかないものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、あはれな話、悲しい話の好きな方々には、さつと大歡迎を受けます。是非讀んでいただきたい世界の悲劇です。

竹取物語

『竹取物語』は世界にほゝることの出来る日本の大文庫です。日本中で一番美しいかぐや姫を、自分のお孫さんにしよつととして、大勢の皇子やかくげ様たちが競争をします。しかし、かぐや姫は月の世界の女であつて、かりに此の世に生れたのですから、五色の雲に乗つて月の世界へと歸つてしまふのです。

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編一第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編五第
ジャンヌダルク	ローマ 英雄 シーザー	ネルソン	リンコルン	太閤秀吉
大木雄三先生著。有名なオルレアン の少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を 滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁 とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語 である。	霜田史光先生著。シーザーは古代の大英 雄である。世界歴史を通じてシーザー程 の英雄は幾人と數へる程しかない。その シーザーの變化極まりない運命を書いたの が本書である。	三井信衛先生著。トラファルガアの海戦 に名譽の死を遂げたネルソンの傳記で す。その國を愛する赤心と、己の責任を 重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與 へます。何人も一讀すべき名著です。	久米敏一先生著。最も優れた立派傳とし て、この『リンコルン傳』をおすすめす。 紙一枚、ペン先一ツ貫への鋭いリンコ ルンが、如何にして大統領の榮位をもち 得たか。本書を讀まぬ者は一生の不幸で ある。	三島精川先生著。日本の英雄として世界 に誇り得るものは、太閤秀吉である。本 書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參 考にして研究し、それは三島先生の名筆 によつて面白く書現したものである。
錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編十第
ナイチンゲール	ワシントン	大楠公	ロシア 英雄 ピーター大帝	お釋迦様
入交眞一郎先生著。女神様のやうに氣高 い心を持つたナイチンゲールの一生を 書いた本です。この人の傳記を讀んだも のは誰でも、本當に清い心の人になりま す。少年少女の爲に書けたはじめての本 です。	三井信衛先生著。アメリカを獨立させて 最初の大統領になつた大偉人ワシントンの 傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人とな つたワシントンのお話は、誰が讀んでも 勇氣をつけられます。	三島精川先生著。楠正成の傳記を正しく 書いた本として、これ以上の本はありません。 せん。この本を讀んだ人は成程と正成の 偉かつた事に感じるでせう。面白くてそ して本當の正成のお話がある本です。	大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロ シアを盛んにする爲めに、帝王の身であ り乍ら造船職工にまでなり、また自分の 子や妻までも殺さなければならなくなつ た變化極まりないピーター大帝の物語です。	齋藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な 方は恐らくこの世の中に生れなかつたで せう。そのお釋迦様の一生なわたりやす く、面白く、そして正しく傳へたのが此 の本です。得がたい本です。
錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送	錢十九金 錢六金料送

金蘭社の新刊書

世界童話叢書第九編
永橋卓介編 高坂元三裝幀
イギリス童話集

四六判箱入美本
本文三〇六頁
原色版四枚
凸版刷挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

世界名篇物語叢書第十四編
小島政二郎著 高坂元三裝幀
愛犬物語

四六判箱入美本
本文一七二頁
挿畫三色版外十葉
定價金九十錢
送料十二錢

少年少女文藝講談叢書第四編
最上哲夫編 池上浩裝幀
水戸黄門

四六判總クロス
原色版カラダ附
挿畫三色版外十頁
本文一九七頁
定價金一圓
送料十二錢

少年少女科學大系第一編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒童天文學

四六判總クロス
ドイツ式裝幀
本文一八〇頁
定價金一圓
送料十二錢

少年少女科學大系第二編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒童地文學
(地球の歴史)

四六判總クロス
ドイツ式裝幀
本文約一八〇頁
定價金一圓
送料十二錢

一口にイギリスの童話といつても、その中には陰森な趣
を持つスコットランドの童話、諸神と典雅な情趣のあふ
れてゐるイングランドの童話等と云ふやうに各々の環
境に依つて生れた種々な童話を持てなります。

會つて一ヶ年を費して金の星誌上に連載し、讀者から
湧くやうな喝采を博したものです。従順な飼犬パックが大
買ひの爲にさらはれてから、深山の森に入つて半狼半犬
と化してゆくまでの性格の變化は、現代文壇の重鎮、小
島先生の筆に依つて美事に描寫されてあります。

身は、徳川御三家の一人として在りながらも、わざと平民
を装つた黄門徳川光圀が助さん格さんの二人を連れ、
日本國中を旅行し、悪大名悪代官をとつめた話は
皆さんも御承知でせう。本書は従来の水戸黄門記をよ
り以上に痛快に面白く書き改めたものです。

數萬年前の歴史を語るかのやうに、また、いてゐる無數
の星、彗が住んでゐると傳説に残る月の世界、無限の光を
サンノと投げかけてゐるあの太陽、はては、風雪雨にい
たるまで宇宙の秘密は残す處なく説かれてあります。

吾々が住んでゐる地球は、どんな風に出来たのか、又あの
恐ろしい地震は如何して起るのか、噴火、海嘯等凡そ地球
の上に起るすべての現象の疑問は本書に依つてたちまち
解かれます。

(通巻第八拾八號)

金の星

三 月 號



東京市外 金蘭社 振替東京一七〇番 電話小石川五六五番

關^せ所^し遊^{あそ}び

作曲 本居長世

作謠 野口雨情

Andante

mf

もどらんせ もどらんせ ちやうちんないこは
とほしんせ とほしんせ つきよになるから

もどらんせ
とほしんせ

f

ここは おせきし まだよは あけぬ
ここは おせきし まだよは あけぬ

f

ちやうちんないこは とほしんせ ぬ
つきよに なったら とほしんせ

關所遊び

野口雨情

戻りやんせ
戻りやんせ
提灯ない子は
戻りやんせ
ここは お關所
まだ夜は明けぬ
提灯ない子は
通されぬ。



通しやんせ
通しやんせ
月夜になるから
通しやんせ
ここは お關所
まだ夜は明けぬ
月夜になったら
通りやんせ。

説明——手をつないで通せまいとするのを、
潜つて通り抜ける遊戯があります。この「關所
遊び」は、その遊戯に合わせて、歌ふやうに作つ
た童謡です。

寺内萬治郎 畫





和蘭燈籠

六

沖野岩三郎

川上四郎 畫

臺灣がオランダ領になつた時でした。今の臺南の沿岸から日本に輸出する毛皮類に、オランダ政府が課税するといふ規則を設けました。

それまで長崎の商人たちは、臺南の沿岸に船を着けて、生蕃が山の奥で射殺して剝いだ鹿の皮を、鹽や雜貨と物々交換してゐたのでした。それは日本の商人に取つて、非常に、利益の多い貿易だつたのです。ところが、オランダ政府は、ヒイタア・スイツト (Hijzen) といふ人を、『キャンベル、フォルモサ、アンド、ダッチ』といふ役につけました。それはオ

ランダ、臺灣民政長官といふやうに高い位で、責任の重い役人です。

このヒイタア・スイツトが、民政長官になつて臺灣へ赴任すると間もなく、日本の商人が今まで無税でやつてゐた貿易に、税金がかかるやうになつたので、これはけしからんといふので、長崎の商人たちは、臺灣の民政長官に談判をもち込まうといふ相談をいたしました。

その談判の役目を引受けたのが、濱田彌兵衛といふ男でした。彌兵衛は柔道も出来、擊劍も出来る俠氣の強い人でした。

彌兵衛は長崎の代官末次平藏の命令を受けて、弟九郎右衛門と一緒に、手下の者をつれて、二艘の船に乗つて臺灣へ出かけました。

彌兵衛は第九郎右衛門と一緒に、民政廳へ行つて長官ヒイタア・スイツトに面會を求めました。

ヒイタア・スイツトは、日本の代官、末次平藏の

名前を知つてゐましたから、其の命令で来たといふ濱田彌兵衛に、何の考へもなく直ぐ面會いたしました。ところが、彌兵衛も九郎兵衛もオランダ語が出来ません。ヒイタア・スイツトは日本語がわかりません。そこで、フランソワといふ長崎に長くゐて、日本語の話せる男を通辯にして、双方の話を進めることになりました。

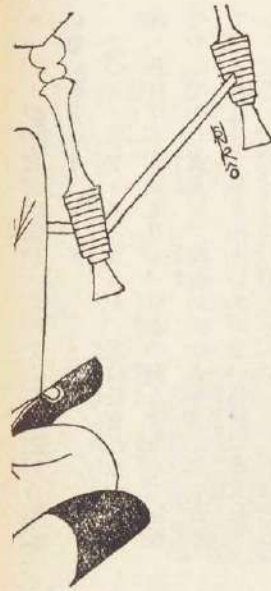
彌兵衛は、臺南の沿岸から日本へ輸出する毛革類は、すつと昔から無税だつたのだから、其の習慣を守つて、これから後も無税にしてほしいと主張しました。けれどもヒイタア・スイツトは、それを拒みました。と云ふのは、本國のオランダが、其頃世界で一番強いと云はれてゐるスペインと戦争をして、大へん國が疲れてゐるので、少しでも税金を多くして國を富まなければならなかつたからです。

兩方で、めい／＼自分の意見を言ひ張つてゐますうちに、言葉はわからず、意志は通じず、一々フラ

ンソワの通辯を経て談判するのが面倒になつて来た彌兵衛は、日本人の癖である短氣をむら／＼と起して、

「えエ、面倒臭い、ぐず／＼言ふなら、やつつけてしまふぞ！」と言ふが早いか、いきなりビイター・スイットの胸倉を取つて、床の上にねぢふせてしまひました。そして、懷から匕首を出して、ビイター・スイットの胸に突きつけて、

「さア、どうぢや無税にするか、どうか！」と言ひました。弟の九郎右衛門も同じく匕首を抜いて、萬一



の場合には兄を助ける用意をしました。其頃オランダは、スペインの大敵と戦つて勝つたあとでしたから、兵隊も強く、武器も立派なものが澤山ありました。だから民政廳には多勢の兵卒もゐ鐵砲も大砲も澤山あつたのです。だから此の有様を見た士官や兵卒は、みんな彌兵衛兄弟の方へ鐵砲をさしむけました。けれどもビイター・スイットは言ひました。

「鐵砲をうつてはいけない。決して發砲してはならない。日本人は短氣だといふことをきいてゐる。待て、一日まで。きつと双方の心は解けるから！」

長官がさう云ふので、兵卒も士官も鐵砲をうちま

せんでした。通辯のフランソワが、彌兵衛に、長官の言葉話して、とにかく一日だけ待つて、明日ゆつくり談判しようといふことにきめました。

そこで彌兵衛も手をゆるめて、ビイ



ター・スイットを起しました。そして船に歸つて、翌日行つていろ／＼談判しました結果、ビイター・スイットからオランダ本國へ問合せるといふことになりました。

彌兵衛はこの談判が片づくまで、ビイター・スイットの息子ローレンスを人質にして、長崎へつれて行かうといふ談判をしました。するとビイター・スイットは其事を承知して息子のローレンスを彌兵衛と一緒に長崎へよこす事にしました。

長官の息子が人質になつて来るのですから、オランダ人が五六人、お伴としてついて來ました。で、彌兵衛は、ローレンスを自分の乗つてゐる船に乗せ弟の九郎右衛門をオランダ人の乗つ

てゐる船に乗せました。それはもし航海中オランダ人が、ローレンスを伴れて逃げ出さないやうに用心したので、又た自分もローレンスを虐待しないといふことを、オランダ人に示したものです。だから弟をオランダ人と一緒に居らせたのでした。

民政長官のバイタア・スイットは其事を本國のオランダへ報告しますと、本國政府の役人たちは非常に憤慨して、そんな侮辱を受けて、黙つてゐるやうな男は、民政長官の價値は無いと云つて、直ぐ免職にした上、オランダ領であるジャバ島のバタバアへ伴れて行つて、その監獄に入れてしまひました。

バイタア・スイットは、バタバアの監獄で毎日息子子のローレンスの事を心配してゐましたが、自分分はもう、民政長官の位を奪はれた罪人ですから、どうする事もできませんでした。

可愛さうにバイタア・スイットは、バタバアの監獄に四ヶ年間入れて置かれました。そして四ヶ年の

一〇
年期がすんで、監獄を出た彼は、一たん本國へ歸つて、すつかり用意をして、はる／＼日本の長崎へ、息子のローレンスを尋ねてまゐりました。

ところが、長崎へ来てみますと、ローレンスは、長崎へ着いた後、間もなく病氣のために死んだといふことをききました。

バイタア・スイットは非常に悲嘆に暮れながら、代官の末次平藏に面會を求めますと、代官はかう申しました。

「あなたの息子は、病氣でなくなりました。けれども、あなたからお預りいたした、大事の息子ですから、こちらで毒殺したとか、又は斬殺したとかいふお疑ひを懐かしてはならないと思ひまして、其の屍體は今に大切に保管してありますから、今日お渡しいたします。」

バイタア・スイットは驚きました。四年前に亡くなつた息子の屍體が、今まで、あう答はありませ

のでした。

バイタア・スイットは、此の訴訟を起して置いて一生懸命に日本語の勉強に取りかかりました。それは彌兵衛と自分との談判の行違ひも、言葉のわからない結果であつたと思つたからです。

外國人から、そんな損害賠償の訴訟が出たのは、開闢以來始めて云つてもいい位でしたから、長崎奉行水野河内守は、どうしていいか、わからないので、其事を江戸の將軍家へ申し上げました。すると將軍家の方でも、いろいろ取調べた上、とにかく其のバイタア・スイットを長崎から江戸へ呼びよせることになりました。

バイタア・スイットは、江戸へ上る時、非常な決心をしてゐました。それは、江戸へ行けば、きつと殺されるだらうと思つてゐたからです。

長崎から江戸まで、それは随分長い道中でした。その長い道中を、長崎奉行所の役人に護られて、遙

ん。けれども、やがて引渡されたのは形こそ變つて居るが、たしかに息子の屍體に相違ありませんでした。それは代官所で、注意に注意を重ねて、腐敗しないやうに藥をぬつて保護してあつたのでした。

バイタア・スイットは悲みの中にも、代官の注意

深さに感心しました。で、四年前に亡くなつた息子の屍體を調べてみましたが、たしかに病死に相違ない

いと知つて、町亭にお葬式をいたしました。

けれども、バイタア・スイットは、そのまゝオランダへ歸りませんでした。彼はすぐ、長崎奉行の水野河内守に面會して、徳川幕府を相手取つて、損害賠償の詔をいたしました。それは日本の代官の命令を受けて來た、濱田彌兵衛が、臺灣民政長官である自分に、無禮を加へたこと、それが爲に自分がバタバアの監獄に四年も入れられてゐたこと、その間に可愛い息子が人質になつてゐて日本で死んでしまつたこと、此の三つに對する損害賠償をしろといふ

通江戸まで上つて来たビイター・スイットは、江戸奉行所で、島田彈正といふ役人の取調べを受けました。將軍家では、ビイター・スイットの申立をすつかり聞いて、それは非常に氣の毒であつたと云つて、銀五百兩をビイター・スイットに與へて、いろ／＼と慰めました。殺されると覺悟してゐたビイター・スイットは、將軍家の、この取扱ひをきいて、非常に感激しました。泣いて喜びました。

「私が濱田彌兵衛に組敷かれた時、兵卒に發砲を禁じたのは、私の卑怯からではなかつたのです。日本の役所から命令を受けて来た人を殺せば、日本とオランダとの國際問題になつて、騒動がどんなに大きなか知れないと思つたからです。私は日本とオランダと兩國の爲を思つて、濱田彌兵衛を殺さなかつたのです。斯うして將軍家が、私に對して、氣の毒であつたと一言云つて下されば、もうそれで私は何にも要求いたしません。」と云つて、ビイター・スイットは、その銀五百兩を將軍家へお返ししようと思ひました。けれども島田彈正から折角だから、頂戴して置くがよいと申し聞かせたので、ビイター・スイットはそれを戴いて奉行所を出ました。しかし、彼は遙々オランダから、銀五百兩貰ひに来たのではなかつたので、そのお金を、どうしたならば、いかと考へました。

丁度其時、徳川家では、第一代將軍家康公を祭つてある東照權現が、天子様から宮號を宣下され、東照宮といふことをおゆるしになつたので、其のお祝ひの大祭がございました。それをきいたビイター・スイットは、將軍家から戴いた銀五百兩で、立派な燈籠を造つて、東照宮へ献納して置いて、心残りなく、本國オランダへ歸つて行きました。

東照宮の前に、伊達政宗の献納した大きな南蠻鐵の燈籠が建つてゐます。其のすぐ左にあるのが、ビイター・スイットの献納した燈籠です。(をほり)



ちんば行列

立石 美和

水島 爾保 布 盛

紀州の、和歌山市から、少し離れたところに、藤代といふ所があつて、其處に、いまでも鈴木三郎といふ、人が住んで居ます。

歴史や、昔の、いろ／＼な書物で、讀んで知つて居る方もありませうが、この、藤代の鈴木三郎といへば、謡曲なんかにも出て来る程、有名です。

源義經の家來で、龜井三郎といへば、辨慶なんかと一緒に、大さう働いた人ですが、その龜井三郎が、紀州の藤代へ住んでから、只今まで、すうつと

鈴木三郎といふ、同じ名で、親から子に、子から孫に續いて居るのです。そして、この家が、日本の、鈴木といふ名の家の元祖です。

すゝ分、多い名ですから、きつと、讀者方の中にも、鈴木さんが、多勢居るでせうし、お友達の中にも、一人二人はきつとあるでせうが、みんな、この家——元の龜井三郎とは、血統でなくとも、なんかしら關係があつて分れて來たのです。

この鈴木家には、いまでも、辨慶の書いたもの等が、たくさん残つて居ます。今の鈴木さんは、作者のお友達で、親類に當る人ですが、大變面白い畫家さんです。しかし、そんな事は、いくら聞いても、讀者達はつまらないでせうから、此の家と、紀州の殿様との風變りな競争の御話をして見ませう。

二

ある日、紀州の殿様が、大勢のお供をつれて、狩

來を、先に立て、森かげの民家へ、嵐をさける事になりました。

森蔭の民家といふのは、いつか、民間へ下つて、すうつと、豪族としての、威勢を張つて來た、龜井以來の、鈴木家だつたのです。

で、下男の注進で、早くも殿様達がやつて來るのを知つて、その時の主人の三郎さんが、大急ぎで歓迎の準備をととのへて、まぢかまへて居ました。

殿様が、お着きになると、出迎えた主人は、すぐ殿様を、奥の間へ案内して、すぶぬれになつた、着物を、新らしいのと、着かえさせ、わき立ての、お湯殿へ、案内し、それから、別の廣間へ御つれしました。

その部屋へ御通りになつて、殿様が、
「あつ！」と、聲を立て、驚いたといふのは、自分がお供につれて來た、五十人ばかりの、お氣に入りの家來達が、いつの間にか、すつかり、同じ柄の、

に出かけました。

大變よく晴れた、美しい日だつたのに、忽ち、黒雲が捲き起つて、もの凄いいな光りがしたと思ふと、もう、しぶきを飛して、大夕立が、降り出して來ました。

殿様も、大變閉口して、早速木蔭へ逃げて行きました。が、とても、そんな事ではしのげさうもない、烈しい土砂降り、すぶ濡れになつて、寒さに、震えあがつて終ひました。殿様よりも、お供の家來達が、それこそ、恐れ入つて、なんとか、安全な所へ殿様を御移し仕様と、あせりましたが、仲々いゝ所がありません。その中、一人の士が、呼吸せききつて、馳けつけて來て、

「向ふの森かげに、大變立派な民家が御座います。

どうか、あすこまで、御出でを願ひます。」

と、注進をして來ました。

で、殿様の一行は、大よろこびで、早速、その家

新らしい着物に着代えて、すうつと、並んだ、五十人前のお膳の前に坐つて、殿様の、お出でを待つて居たからでした。

殿様のつもりでは、ほんの暫らくの間、雨やみでも、させて貰へば、充分だと思つて居ましたのに、こんな、山の中の一軒屋で、着代えの着物や、沸き立てのお湯や、御飯のご馳走になれるのも、少し意外だつたのです。

それなのに、いつの間に造つたか、寸分異はない五十人前の着物と、五十人前のお馳走、——この主人は、魔法使ひかな？ と殿様は思ひました。

それに、この殿様は、大へん負け嫌ひな、短氣な人だつたので、初めのうれしさは、今では、腹立ちに變つて、

「……………怪しからん！ 私が、嵐にあつて、弱つて居るので、馬鹿にして、わざと、こんな、見せびらかしをやるのに異ひない。山の中の民家に、常か

ら、こんな支度のある筈がない。」
さう、口の中で、獨り言を云つた位でした。

三

主人の、三郎さんが、ずつと下から、
「こういふ、山の中の事で御座いますから、殿様に
も、なにも、おもてなしをする事が、出来ませんで
申譯が御座いせん。どうか、御許しを願ひ度い。」
と、丁寧に、挨拶をするので、殿様も、しぶく御
禮を云つて、歸る事になりました。

すると、主人は、
「今日は、この様なお天気で御座いますから、定め
し、狩もお取止めで、ずつと、御城へ御歸りの事と
存じます。御召物が、よごれると、御氣味が悪いで
せうから。」
と云つて、五十人分の、高下駄と、五十本の雨傘
を、ずつと、其處へ並べて、御見送りをしました。

「いや怪しからん！ 自分の領地に住んで居ながら
何も彼も、私より充分な事をして居るのを、自慢に
するのだらう！ 六十萬石の紀州家が、たかゞ山の
中の、土百姓同然の男に、こう面あてがましい威勢
を見せつけられては、大名の名に係る！」

殿様は、また、變な競争心を出して、むか／＼腹
を立てましたが、まさか、それをこわつて、濡れ
ねすみになつて歸るわけにも行きません。それこそ
耻の上塗りだと考へたので、溢々、有難う！ と御
禮を云つて、城下へ、逃げるやうに、引きあげて來
ました。

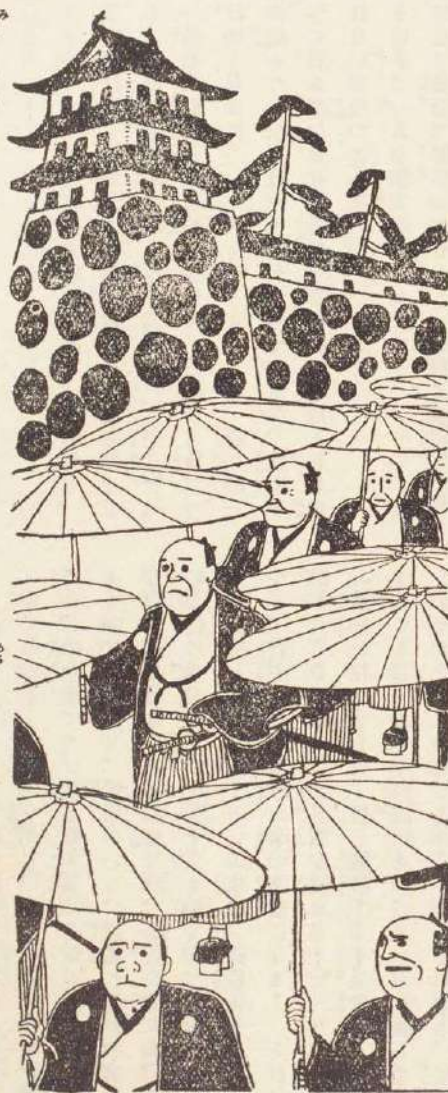
和歌山の城下へ入ると、

「下に居れ！ 下に居れ！」

と、下知をしなから、堂々と、行列をねつて、お
城へ入つたのですが、何しろ、鈴木家の、定紋を、
大きく書き出した、五十本の雨傘が、殿様や、家老
様や、素晴らしい五十人のよりぬきの士達にさゝ

れて歩いて居るのですから、これ程、よくきく廣告
屋さんの行列はありません。

町人達は、眼をそば立て、この、不思議な行列



負けず嫌ひな殿様には、町人の私語が、皆自分を
嘲笑つて居る様にしか思へません。

腹が立つのと、耻しいのとで、殿様は、眞赤にな

を見ました。

眼引き、袖ひきして、いろ／＼な事をさ／＼やき合
ひました。

つて、歩きました。

「残念だ！ お城へ歸ると、殿様は、さう云つて、
考へ込んで終ひました。

「この仕返しには、何とかして、當家の威勢を示さねばならん！」

さう云つて、殿様は家老達を集めて、毎日毎日、相談を續けましたが、何うも名案がありません。

ある人は、五十本の傘を返す爲に、若い腰元達に、眼の覺める程美しい着物をさせて、一本づゝ持たせて行かうなんて、いふ人もありましたが、徳川御三家の随一だと云はれた大名が、五十人位の、女中を使つて居る事を見せた所で、當り前の事だと思はれないに決つてます。

その中、一人の家老が、

「では、如何で御座いませう！ 當家は、何分にも、大藩で御座いますから、中には、随分、可笑しい土もある事と思ひます。思ひ切つて、不具の土、五十人を撰り抜いて、この御用をつとめさせては、何

んなもので御座いませう？」

と、風異りな事を云ひ初めました。

殿様は、ボン！と、膝を叩いて、喜びました。

「妙である！ 大體、土といふものは、まさかの時に、命を棄てゝ、敵と戦ふ爲に、かゝえられて居るものだ。だから、體格のいゝ、武術に勝れた者でなければならぬ。不具者では、お役に立たぬ。その、役に立たぬ土を五十人もかゝえて、云はゞ、すて扶持を與へて置くといふ事は、餘程の大藩であつて、君主が、慈悲深い事の證據になる！ それに決めた。さつそく、不具者を集めろ！」

「承知いたしました。併し殿様！ 不具者と、申しまして、いろ／＼御座います。ツンボに致しませうか、オツチにいたしませうか？ それとも、盲目か、ちんばか？」

「いや、盲目は陰氣でいかん！ 第一、行列を造つて、歩く事が出来ん！ オツチや、ツンボでは、口

上の應侍が出来ん！ ちんばを集めろ！」

「心得ました！」

「何うした？ ちんばは集つたか？」

殿様は、待ち兼ねて、家老に聞きました。

「老人でもよい。子供でもよい。二男三男の若侍でもよろしい。ちんばの土は申出ろ！」

「はい。集つたには相違御座いせんが、誠に残念な事で、えゝ、四十九人で御座います！」

つて、急使が、藩中をかけ廻つて居ます。

「何に、四十九人？ 一人たらんではないか？ 何故もう一人つれて来ない？」

その日の中に、ちんばの侍達は何事であらうと思つて、びつこを引き／＼、城中さして、馳せ参じて来ました。

「はい。どうも、最早一人も居ないので御座います」

「これだけだな？ 後はないな？ よしよし！ 一人二人、三人四人——」

「残念である。では、残りの一本は誰か返す？ また私の負か！ 忠義な者は、誰か一人、びつこになつて呉れ！」

家老が、集つた人達の勘定をして見ると、四十九人でした。

殿様は、とう／＼無理を云ひ初めました。

「これはいかん！ 一人二人 三、四、五、六、い

この、亂暴な、殿様の頼みには、さすがの家來達も、閉口して終つて、こそ／＼と、内證で、相談をした上、一人だけ、偽のちんばを、急造らへに、造らへる事にしました。

かん！ 一人足りない！ えゝと一人二人、三人四人——

何度數へて見ても、四十九人は四十九人でした。

で、大變、びつこの眞似の上手な若侍が、撰ばれて、その役に當りました。

こうして、ともかくも、五十人の、氣の毒な御使ひ役が出来上りました。

殿様は、大よろこびで、徳川家の、葵の定紋を、大きくそめ出した、派出な、美々しい袴を着せて、手に一本づゝ傘を持つて、堂々として藤代へ繰り出しました。

さあ、その行列の可笑しい事！

腰の曲つた老武士も、未だやつと、歩ける程の、子侍も、みんな、揃つて、ひよつくり、ひよつくり、びつこを引いて居る。綺麗な定紋づきの袴が、右に左に、波を打ち乍ら、續いて行く！

物見高い、城下の町人が、十重二十重、黒山の様に群つて、どつ！と聲をあげて、この行列を歓迎しました。

「さすがは、紀州様だ！ 隣りの岸和田や堺の様な

主人は、敷臺へ手をついて、

「遠い山路の事で、おはき物が、大分いたんで見えました。萬一、途中で、緒でもきれる様な事があつては、なりません。そまつな下駄で、恐れ入りますが、何うか御はき捨てを願ひます！」

と、それは／＼丁寧に挨拶をするので、侍達は、仕方なしに、

「それは／＼、では、戴きませう！」

と、返事をして終ひました。

が、それが、只の下駄ではないのです。五十足が、五十足とも、みな、二三寸つゞ、高低の、びつこの下駄なんです。

「よくまあ、こんな、面あてな事を、大がかりで出来たものだ。殿様が、腹を立てるのも、無理ではない。」

そんな事を思ふ人もありました。

「失敗つた！ 紀州様に、五十人のびつこの侍が居

二〇
小大名では、十年かゝつても、出来ない思ひつきだよ。」

「全くだ！ さすがの鈴木も、これには、膽を抜かして驚くだらう！」

「いや、今度は殿様の勝ちだて！」
素晴らしい評判でした。

六

ところが、鈴木の三郎さんは、少しも驚きません。早くも、注進によつて、萬端の用意をととのへて、一行の來るのを待ち受けて居ました。そして、一行を、充分にもてなしました。

一行が、いとまを告げて、玄關へ出ると、また、

「あつ。」と、聲を出す程、驚きました。

見ると、いつの間にか、自分達のはいて來た、草履は、すっかり片づけられて、代りに、五十足、高下駄が、ズラリと並んで居ます。

るのが自慢だらうが、家には、五十人分位の、貸下駄だつて、ちやんと、用意してあるといふ、謎だらう！ これはまた殿様に耻をかゝせて終つた！」

さう思つて居る、年寄の侍もありました。

が、さてびつこの人が、びつこの高下駄を、はくとすると、何うしても、短かい方の足へ、高い方の下駄をはかねばならない。でないと、高い方を、長い方の足へはいたら、二重のびつこになつて、とても、歩けるものではありません！

仕方なしに、皆、云ひ合した様に、高低、長短を逆にして、歸途につきました。が、この風異りな、威勢争ひの、勝負に、夢中になつて、面白がつた町人達は、わざ／＼町はすれまで出て、この一行を迎へました。

そして、町人達が最初に、一行の行列を見た時、
「おや／＼、あのお土達の、びつこが、いつの間にか、直つて終つたのか？」



と、思つた程、静かに歩いて來たのでした。が、それが、大變高低のある下駄をはいて居る爲だと判つた時、町人達は、思はず、どつと笑ひくづれて、「鈴木君の勝ちだ！」と、云ひ合ひました。

併し、それよりも、町人達の注意を引いたのは、五十人の中で、一番後ろに居る、若侍でした。この侍は、行きがけにも、一番後ろに居て、一番派手やかに、びつこを引いて、人氣を博した人ですが、今度も、相變らずといふよりか、たつた一人だけ、とても、みにくいびつこの引き方をして、歩いて居るのでした。

……成程、皆様はもう、この人の事を思ひ出したでせう。この侍は、急造らへのにせびつこだつたのです。なる程、いくら上手に、びつこの眞似が出来ても、三寸も異ふびつこの高下駄をはいて、平らに歩けるものではない。

五十人の中に、一人、にせのびつこが居た事が、忽ち分つて終つて、殿様は、大負け所か、二重の耻



をかゝねばなりませんでした。

七

殿様の腹立ちは絶頂に達しました。申譯がないから、と云つて、家老が切腹を仕儀としたりする程、事件が、大げさになつて來ました。殿様は、その中に、ふと、つまらなくなつて終ひ

ました。こんな、馬鹿氣た事に、毎日夢中になつて腹を立て、大事な家來に、切腹なぞされては、それこそ詰らんと思ひ出したのです。

で、この競争は、自分の負として、一體、あの、魔法使ひみたいな男は、何者か、よく調べて見ようといふ事になりました。

鈴木家の事が、すつかり判ると、殿様は、大變およろこびになつて、その後、鈴木家からは、一切の税金を取らない事、毎年、年の暮れには、紀州家の費用で、すゝ掃きや、疊替えをしてあげる事等をお約束になりました。

そして、つまらないでせうが、これでこのお話はお終ひです。

——が、龜井以來、忘れかけられて居た、名家の末が、すつと、紀州の片田舎に續いて居て、日本の鈴木姓を名のる家々の、總本家だといふ事が、知れ渡つたのは、この事があつてからの事ださうです。

(をばり)



二人善右衛門

横田貴美衛

岩岡とも枝畫

浪花の都に近い阿部野村に鴻池といふ大きな古池がありました。池はいちめん藻に青く澄んで、ところどころに茂った葎や菱などの浮葉に水鳥が夕暮になると寝に來

たりしました。さてこの池へ毎日二人の若い男が網を投げに來ました。若者達は池の鯉や鯔などを漁つて、それを堀の町や、大阪へ賣りに出て暮し

てゐたのです。そのうち二人はいつか話をするやうになりました。「今日は、いとお天氣ですね。」「ほんとに結構なお天氣ですね。」「毎日こうしておなじ場所でお目

にかゝるので一度お話をしたいと思つてゐました。」

「私もづつと前からさう思つてゐました。」

「私は、東村の善右衛門といひます。」

「これは不思議だ、私も善右衛門と申します。西村に居るのです。」

「おやおや、あなたも善右衛門さん、——まあさうですか。」

「これも何かの御縁でせう。以後お心やすく願ひませう。」

それから二人は漁をする時も力を合せ、とれたお魚も山分けにしお辨當も並んでいっしょに食べるといふふうで、すつかり仲善しになつてしまひました。

ある日、年とつた方の善右衛門

がこんなことを申しました。

「どうだい、二人はこれから兄弟分にならうぢやないか。そしてお前は、妹さんを連れて私の家へ來ないかい。」

すると年下の善右衛門も手をうつて申しました。

「それはいゝ思ひつきだ。しかしお前さんは一人だが、私の方は妹と二人で、何だか氣の毒だよ。」

「なにが氣の毒なことあるものか私もこれまで獨暮しで寂しかったが、家族が三人になれば賑で嬉しいよ。」

「さうかい、ぢやあ早速西村をひきはらつて、妹と二人お前さんの家へお世話にならう。ところで、お前さんは私より年が上だから兄

さんだ。で兄善右衛門、私は弟だから弟善右衛門だ。ね、これからさういふやう。」

「よからう、よからう。」

兄弟になつた二人は嬉しさうに大きな聲で笑ひました。そして、弟善右衛門はもうその日の暮れがたすつかり西村を引きはらつて東村の兄善右衛門の家へ妹をつれてやつて來ました。妹は、みゆきといつて、その名のやうに色のくつきり白い、清らかな瞳をもつた可愛い少女でありました。兄善右衛門は急に二人の弟妹をもつて大喜び、弟善右衛門の兄妹も大きな兄さんが出來て大喜び、三人はほんとうに楽しく幸福な暮しをするやうになりました。兄弟の善右



のか。それよりお前は何か暖いものでもたべてゆつくり寝てゐるが、今日のやうな日は一入冷えるから喃。まあ氣長に養生するにとだ。」

といひながら、

「みゆきちゃん、兄さんに藥を温めてあげとくれよ。それから私も今日は鯉でも持つて早く歸つてくるから熱かいお汁でもこさえておいとくれ——」

と、はや網を肩にして立ち上りました。すると、みゆきも、

「兄さん、ほんとに今日だけは休んで下さい。この大雪ではあの池まで行くだけでも容易ではありません。」

といつて止めましたが、その時



衛門は毎朝いつしよに起きます。するとみゆきが前にちやんと起きてゐて二人のお辨當を用意してゐます。二人は同じやうにその辨當を腰につけて出て行きます。歸つて来る時もいつしよです。夜になると三人が仲よく晝の漁のことや町の市場の話などをして、三つの枕をならべて寝ます。こんな楽しい日が三年あまりも續きました。

二

ところが弟善右衛門の方がフットしたことから病氣になつてどつと床につくやうになりました。で兄善右衛門だけが、漁に出なければなりません。しかし、兄善右衛門は少しも厭な顔をせず毎

日毎日例の鴻池へ漁に出ては市場へ廻り、歸りに弟の藥や、おいしいものや珍しいものを買つて歸ります。弟善右衛門とみゆきはそれをどんなに喜び、有難く思つてゐたかしれません。

それはある大雪の朝でした。いつものとほり兄善右衛門が漁に行くため網を用意してゐますと、弟善右衛門が病の床から、

「兄さん、今日だけは漁に出るのを休んで下さい。兄さんだけがこの冷いの漁に出て、私だけが吞氣にぬくぬく寝ては居れませんから。」

といひました。すると兄善右衛門はにつこり笑つて、

「何をそんな氣兼ね遠慮がいるも

はもう兄善右衛門は外に出てしまつて、いつもの元氣のいゝ歌聲が雪の中に聞えてゐました。兄善右衛門の優しい愛情に感じた、弟善右衛門は、思はず寢床から門口まで這ひ出して、吹雪のなかにだんだん小さくなつてゆく兄善右衛門の後姿に、掌を合して拜みました。そしてその傍にはみゆきも泪ぐんだ瞳でおつと見送つてゐたのであります。

三

さて兄善右衛門は降りしきる雪の中をやつと鴻池までやつて來ました。いつも見なれたあたりも今日はいちめん清淨な白妙の装ひをこらしてその美しいこと。池の枯

草なども雪をのせて白鷺が一本足で立つてゐるやうな形に見えたりその清楚で高雅な風景はまるで一幅の墨繪を見てゐるやうです。兄善右衛門はかちかんだ両手にハッハッと息を吹きかけながら、網を調べて、暫く池の面を視つめてゐましたが、やがて手際よく網を投げました。鮮に擴がつた網は水面に落ちて幽かな音をたてました。しやぶり……静寂なその音は身に泌みいるやうに、ひそやかに寂しく、やがて、前よりも一層沈んだ静寂さがひしひしとこめて、その中にしよんぼりゐんだ姿の兄善右衛門も畫中の小さな人となつてしまひました。ところがその日はどうしたのか、投げる網もなげる

網も、みな空しく失敗に終つて、鯉魚一尾はいつて來ません。『いつたい、どうしたといふのだ。長いこと漁をしてきたが、こんなことは一度だつてありやあしな。この大雪で、魚の奴もみな底の方にへつぱりついてしまつたのかなあ。』こんな獨言を零しながら兄善右衛門はなほも根氣よく網を投げました。しかし、やはり駄目でした。兄の胸には、家で自分の歸りを待ち侘びてゐる弟や、みゆきの姿がはつきり映つて來ました。熱い鯉の味噌汁でも食べさせてやりた——さう思つて折角この大雪の中を冒してわざ／＼やつて來たのに——こう思ふと兄善右衛門はま

す／＼氣が苦だつて網を持つ手先きまでが震へて來ました。そのうちにあたりはだんだん暮れかけてぼうと侘しい銀ねづみの一色にたそがれてまゐりました。兄善右衛門は、がっかりしてしまひましたが、『よし、もう一度ためしに網を投げてみよう。今度はひとつ場所を變へてみよう。』さう思つて、平常は行つたことのない場所を選びました。そこは松の大きな老樹の蔭になつて、あたりは一際暗くしんとして、水面は凄いいほど青黒く静まりかへつてゐます。『今度はさうまく獲物がありますやうに。』

兄善右衛門は祈るやうな緊張した心になつて、一層自重して心を押静め、やがてひらりとばかり網をなげました。幽かな音が水に落ちて、波紋がふるへながらあははは擴がつてゆきました。兄善右衛門のふみしめた足さきの雪がさしきしときしみしました。彼は手先に全身の注意力を集中して除々に手元へ網をたぐらうとしました。ところが、ぐつと何かに支へたやうな重々しい手答へがありました。しかし、それが確かに生物ではなないことは、經驗深い兄善右衛門にはすぐわかりました。『はて、何だらう。』不安と好奇心に兄は胸をどきどきさせながら糸を破らぬやう注意

してひつぱりました。やがて網は千切れてしまひさうにひきしぼられたまゝ、やつと地上へ投げ出されました。『泥龜でも上つたかな。』こわく覗いてみると、網の中には一個の長方形の箱らしいものがあつて、いちめんに青い水苔がぬらぬらまつはりついてゐました。そしてさらによく調べて見ると、箱は頑丈な鐵紙でうちつけられた上、太い麻繩のやうなもので、しつかりと止めかためられてゐました。雪明りにちつと箱を凝視した彼は、箱の上に何か臚に書きのこされてゐる字のやうなものを見出しました。彼は思はず、

『あつ！千兩箱だ。』と叫んで、自分ながらあまりの大膽に忙て、自分の口を蓋ひました。千兩箱、千兩箱、彼はボーとしてしまひました。まだ十兩とまとまつた金を持つたことのない彼。自分の一生食はず飲まず眠らずに働いて働いて働きの出来ぬ大金を今眼のあたりに見た兄善右衛門は思はずその水垢と泥藻に掩はれた冷たい千兩箱をしつかり抱きしめました。その時です。悪魔は物凄しい笑を浮かべて、こつそり兄善右衛門に乗りうつりしました。兄善右衛門の胸には怪しげな畫みがむらむらと起つて來たのであります。この千兩を資本に大阪の町へ出て商賣すればキツト長者になれる。さうだ。さうすれば私

はいつまでもこんな汚い襦袢を着て、こんな寂しい所で働かなくていいのだ。暖いやはらかなものを着て、美味しいものばかり食べて、大きな舗先で多勢の番頭や丁稚小僧を顎の先で指圖して居ればよいのだ。さうだ、私は大阪に出よう。そして商人にならう——

兄善右衛門は、その千兩箱の詮索などはそつちのけにして、只その金をうまく殖してゆく使路のこ

の心は、朝、家を出た時とはすっかり變つてゐました。

「お、兄さん。お歸りで御座いましたか。この大雪にさぞお寒かつたでせうに。」

「お湯も熱く沸しておきました。お召物も行火にかけてあります。さあお濯ぎをいたしませう。」

兄善右衛門の歸りを待ちかねてゐた弟善右衛門とみゆきは左右からいそいそと出迎へました。しかし兄善右衛門はすっかり別人のやうに難しい顔をして、蔑んだ眼でじろりと兄妹を流みながら、だし

でもない、また、妹でもない。もとのあかの他人だよ。お前達はどこへなりともとつと出ていつてもらひたい。」

といひました。弟善右衛門とみゆきは夢にも思はぬ意外な兄善右衛門の言葉に呆然として、あいた口も塞がりません。しばらくして弟善右衛門はこくりと一つ唾を飲んで、

「兄さん、それはあなた本氣でおつしやるのですか。私等をおからかひになるにしても、そんな悲しい冗談は止して下さい。ほんとに泣きたくなりますから。」

と申しました。すると兄善右衛門はゆるいほど眞顔になつて、



のか。私はもう貧乏人との交際は厭になつた。私は今日から長者の仲間入りをするのだ。」

「兄さん、あなたはいつたにどうせられたのです。もし私達に氣に入らないところがありましたらどしどし明らさまにいつて叱つて下さい。」

「悪いところは幾重にも謝ります。」

弟善右衛門とみゆきは膝をふるはせておろおろ頼み

ました。すると兄善右衛門は、ますます威高氣になつて、

「譯を聞きたけりやあ聞かしてやらう。」

といつて、鴻池から網で千兩箱をすくひあげたことを話し、

「私はこれからこの金を資本にして大阪に出て、大金持ちになるんだ。だからお前達のやうな貧乏人の足手まといを連れてゐると第一私の信用や顔に關はるからさつさと何處へでも出て行つてくれ。」

といひました。弟善右衛門は目にいつばい涙をためて

「兄さん、それはあんまりではありませんか。私とあなたとはたゞの間柄ではありません。お互ひの心と心が結びあつて兄弟になつた

ので、ほんとうの兄弟よりも縁が深いのです。そして三年といふ長い年月口争ひ一つせず楽しく睦みあつて暮してきたのに、今急にこんなことを言ひ出して私達を困らせやうとなさるのは平素の兄さんとも思はれません。」

と恨めしさうに兄善右衛門を見つめて、

「しかし、兄さんが御自分の出世の妨げだと思はれるなら致方ありません。私達は何處迄も兄さんについて行きたく思ひますが——諦めます。兄さん、その代り、弟の最後のたつた一つのお願ひを聞いてやつて下さい。それは、兄さんのそのお金の十分の一でも私達に頂かせてほしいことです。今、

兄さんに捨てられてしまへば私達兄妹はどうして暮してゆけませう。私の病氣はいつ快くなるかわからない位ですのに。」

と泣きながら頼みました。みゆきも掌を合して、

「どうぞ兄のいふことを聞いてやつて下さい。そして私達を助けて下さい。」

と申しました。しかしもうすっかり悪魔に囚はれてしまつてゐる兄善右衛門はいつかな聞き入れてくれません。果は荒々しく立上つて弟善右衛門の寝てゐた布団を引き削ぐり、

「この夜具もみな私のものだ。今ではお前達のものは何も無くなつてゐるぢやあないか。さあ早く出

て行け。たつた今何處へでもとつと、出て行け。」

といひ乍ら、足もとにすがりよる二人を邪険に足で蹴倒して表の方へつき出してしまひました。そして中からがらんと鍵をかけてしまひました。雪の上に折り重つて轉んだ兄妹は思はず、

「兄さん。」

「お、みゆき。」

と叫んで互ひにしつかり抱きあひました。二人の顔には熱い涙が止度なく流れました。しかしすなはな弟善右衛門は、

「みゆき、兄さんを恨んではいけないよ。兄さんが悪いのではない。金が兄さんのお心を一時曇らせたのだ。今に兄さんの夢は醒めるだ

らう——しかしそれ迄私達はどうすればいいのだ。私はそれまで生きてゐることが出来るだらうか。あゝ情けないことになつてしまつた……」

と雪の中に伏して聲をあげて男泣きに泣きました。みゆきは自分の上着をぬいで兄の上に着せかけながら

「でもあまりといへば情ないおしうちです。私達に死ねと仰しやるやうな……」

といひながら肩をふるはせて泣き倒れました。

「ほんとにさうだ。兄さんは死ねと仰るのだ。どうせ生きて居れぬ私達だ。生甲斐のないこの世に蟲のやうな暮しをつゞけてゆくよ

りいつそ死んだ方がましだ。私達が死ねば、兄さんも可哀さうだと思つて下さるだらう。さうすれば兄さんのお心を迷はせてゐる曇りが霽れるだらう。」

「ほんとにさうです。私も死になくなりました。兄さんといつしよに死にます。」

「いつしよに死んでくれるか。お前はそんなに若くて美しいのに、私はお前が不惑でならない。不甲斐ない兄をもつたのがお前の不幸だ。どうぞ恨んでおくれ。」

弟善右衛門は、ひとと妹を抱きよせて、みゆきの小さな頭に又熱い涙をばら／＼零しました。その時、不意に二人の頭の上の小さい窓があいて、兄善右衛門が

「何をいつまで恩圖——いつてなんだ。そんなに金に未練があるなら千兩箱をくれてやる。」

と怒鳴りながら、二つに割つた千兩箱の箱だけをどさりと投げつけました。そして雪の上に泣いてゐる二人の姿を嘲るやうにじろりと笑ひながら又窓を荒々しくしめてしまひました。弟善右衛門は、その割れた千兩箱を合せて恨めしさうに見入りながら、

「この千兩箱が池から上つたばかりにこんなことになつてしまつたのだ。さうだ、この箱といつしよに私達もあの鴻池へ身を投げて死なう。」

といひました。みゆきは兄の手を肩へかけて、

ものはありません。生命を捨て、
かゝつて廣い池の中を探し廻つた
兄妹は、とうとうその夜の引明け
時まで六個の千兩箱を美事引上
げることが出来ました。里の方か
ら幽に朗な鶏の聲が聞え出し
ました。兄妹は裸のまゝ雪の上に
うづくまつて折から東の空を真紅
に染めて圓々とお昇りになつたお
日様に合掌して拜みました。いち
めんの雪の世界が燦爛と金と紅に
輝き渡りました。その時、弟善
右衛門は不思議にすつかり病氣を
忘れて、冬木が春の光に甦つた
如く限らない力が五體からぐんぐ
ん湧き上つて来るやうに覺えまし
た。弟善右衛門は、みゆきの手を
ぐつと握りしめて、

「みゆき、私達も大阪へ出て商賣
をしよう。今日のことを忘れなかつ
たら、どんなことでも出来ない
ことはない。」
といひました。みゆきも微笑み
ながら頷きました。
× × ×
それから間もなく浪花の町に鴻
池善右衛門といふ大きな炭問屋が
できました。ところが不思議にも
又一軒、名も同じ鴻池善右衛門と
いふ屋號で、しかも商賣も同じ炭
問屋が開かれました。後からでき
た鴻池善右衛門は店の構へもつづ
と大きく、新荷も山のやうに積み
上げ、品物もよくて、値も安いと
いふのでお客はどんどんその方に
集りましたので、とうとう先の鴻

池善右衛門は店をたゝんで夜逃げ
同様どこへ行つたのか行衛さへ知
れずになつてしまひました。それ
に引替へ、後の鴻池善右衛門はま
すまゝ繁盛して、忽ち浪花の百萬
長者鴻池善右衛門とうたはれるや
うになりました。
みなさんはもうよくお察しでせ
う。後から出来た鴻池善右衛門が
弟善右衛門で、前に出来て行方知
れずになつたのが兄善右衛門であ
ることを。
しかし、今大阪の百萬長者、い
や日本の大富豪として誰れ知らぬ
ものもない鴻池善右衛門氏が、そ
の弟善右衛門の跡であるかどうか
それは私も知りません。
(をばり)

童心句募集

(選者は野口雨情先生)

野口先生が、童心句を創唱されて、愛國心の涵養は空虚なる心を充實するにあり、童心句は、少年少女の空虚心を充實する唯一の詩であるといふ説から、教育者間にも、一般文藝の愛好者間にも、童心句が驚異的歡迎を受けてをります。

童心句とは、童謡を俳句の形式(五七五調の十七文字)で表現した短い詩で、童心より發した俳句と云ふことにもなります。

牡丹餅をくはへて鳥霞みけり

この俳句は俳人一茶翁の作ですが、これが今言ふ童心句であります。童心句は見たまま感じたまを童謡を作ると同じ心持で十七文字の俳句の形式で言ひあらはせばよいのです。

本誌は、次號より「童心句欄」を設けて、廣く童心句の募集をいたします。童謡に親む諸君、俳句に親む諸君、その他文藝に親む諸君は、この新しき企てに奮つて御投稿を願ひます。

投稿規定は、一般投稿の規定に準じますが、原稿の整理上、用紙はハガキ又はハガキ大の紙に認め、一人三句以下、金の星編輯部宛てに願ひます。

金の星編輯部



(前編での経緯) 軍馬を輸送するためにジェラル中尉は、たゞ一騎通んで行くと、途中でデユロツクといふ若い士官に出遇つた。この士官は父の敵であるストローベンタル男爵の行方を探れてゐたが、遂に探してゐた事を喜んでゐた。しかし、彼

暗闇城

四〇

小島政二郎

寺内萬治郎畫

はたゞ一人で敵を討ちに行くのは危険なので、ジェラル中尉と一緒に一騎で行つてくれと切りに頼んだ。中尉は例の快氣から一しよに行く事になり、敵の男爵の住んでゐる暗闇城へと向つた。

三

入口の、大きな鐵の扉を打ち付けた扉には、鈴も叩金も懸つてゐなかつたので、僕等は、仕機事なしにサーベルの石突でガチャ／＼叩いて、人の來てゐることを知らせるより外に方法がなかつた。暫く経つと、魔のやうな顔付の、頼頼まで顔で埋

つた男が、門を明けてくれた。その男は、片手に角燈をさげ、片手に、大きな黒い獵犬を繋いだ鎖を握つてゐた。その様子によると、最初は僕達を嚇して追ッ拂ふつもりだつたらしいが、僕等の軍服姿と凛凛しい顔付を見ると、澁々ながら頭を下げた。さうして

「ストローベンタル男爵は、こんなに夜遅くは御面會なさいません。」と、見事な佛蘭西語で云つた。

すると、デユロツクは

「そんなことはどうでもいゝ。君は急いで主人のところへ行つて、僕等二人がわざわざ八百里の路をやつて來たと云ふことを傳へりやいゝんだ。我々は、面會の出来るまではここを動かんから。」と、キツパリと云ひ放つた。それを聞いて、僕は驚いた。僕にもこの場合、それほど堂々たる態度でもつてかうは云ひ得なかつたであらう。

相手は、僕等をシロリ／＼と横目で見ながら、當

惑さうに頻りに眞黒な鬚を抜いてゐたが、

「實を申し上げると、男爵は、いつも今頃少々葡萄酒を飲んで入らつしやるので、明日の朝早く改めて入らした方が、御機嫌が宜しからうと思ふのですが」かう云ひながら、彼は稍廣く扉を開いた。見ると、彼のうしろに、玄關のランプに照らされて、三人の荒くれ男が突ツ立つてゐた。しかも、中の一人は、同じやうな獐狂な獵犬を二三匹繋いだのを傍に引き据ゑてゐた。恐く、デユロツクもその光景を見たことと思ふ。しかも、彼の決心は依然として曲げられなかつた。

「ぐづ／＼云ふな。」彼はいきなり相手を押し除けた。「僕はお前と話をしに來たのぢやない。」

デユロツクがズイと玄關へはひつて行くと、中にゐた男達は、彼の勢に恐れをなして路を開いた。諸君、自信のない者が何人ゐたつて、たつた一人の自信のある者に叶はないこと此の如くである――

デロツクは、すつかり相手を呑んでしまつたと云ふ風に、いきなりその中の一人の肩を叩くと、

『おい、男爵のところへ案内してくれ。』と云つた。

すると、その男は肩を疎めながら、何か二言三言ボーランド語で答へた。入口の扉を閉ちて、門を御して来た、あの最初の、鬚の生えた男が、この中では一人きりフランス語が話せるのらしかつた。

『では、御案内ませう。』と、彼は皮肉な笑みを浮かべながら云つた。『あなた方は、男爵とお逢ひになつて一目見るが否や、きつと私の忠告に従つた方がよかつたと思ひになるに違ひありませんよ。』

僕等は彼のうしろに従つて、廣い石疊の部屋を通つて行つた。床の上には、獸の皮が處々に敷かれてゐるばかりか、壁の上には、野獸の首が物々しく吊してあつた。やがて、彼は突當りの扉を明けてくれたので、僕等はそこへはひつた。

小さな部屋だ。至つて家具の少い、永い間打ち捨

な居が、化物のやうな鬚の中から突き出てゐた。頭は、肩の上で微かにユラ／＼と揺れてゐたが、酒に酔つた人特有の、あの朦朧とした目付で僕等を眺めた。しかし、彼は僕等の軍服の見分けが附かぬ程まで酔つてはゐなかつた。

『やあ、なか／＼勇ましいいね。』と云ひながら、彼は吃逆をした。『どうだね、近頃の巴里の様子は？』

え？ 君達はボーランドをロシアから獨立させようと云ふんださうだね。しかし、うか／＼してゐると、やがては今度は君達の奴隷にされてしまふんだ。あの、三角帽をかぶつて灰色の外套を着た小さな貴族の奴隷にな。聞くとところによれば、近頃は、町人とか職人とか云ふものはちつともゐないで、みんな旦那様に奥様ばかりだね。だがねえ君、遠からずまた誰か二人の生首が、踞屑だらけのバスケットの中へ轉り込ますにはゐないからね。云はないことぢやないよ。』



てられたまま手入れのしてない様子で、どちらを向いても目に附いた。壁には、色の褪せた壁掛が、一ヶ所はづれてゐるために後の粗い石壁が現れたりしたまま、ダラリと垂れさがつてゐた。突當りに、もう一つの入口が、カーテンの蔭に見えた。扉と扉との間に、四角な食卓が据ゑ附けられて、その上に、よごれた皿や食べ荒らした残り物がそのまま載つてゐた。その外にも、二三本の蠟が轉つてゐた。

見ると、テーブルの向う側に、こつちを向いて、ライオンのやうな頭をした大きな骨組の男が、橙色の髪の毛を亂して坐つてゐた。鬚も同じ赤赭けた色をして、もしや／＼に縫れて、よごれて、まるで馬の鬚のやうに剛々と見えた。僕も今までに随分いろんな不思議な顔に出逢つたが、いまだ曾つてこんな野獸のやうな顔を見たことはない。目は小さく、見るから狡猾さうな青い瞳を持つてゐた。頬はいやに白く、皺んでゐた。厚い、ふらさがつたやう

その時、デュロツクは黙つてツカ／＼と進んで行つたが、つとその惡漢の横に突つ立つと、

「おい、ジャン、カラバン。」と叫んだ。

すると、男爵は驚いて跳び上つた。見る／＼うちに、酒の酔ひが瞳の底から消え失せて行くやうに思はれた。

「おい、ジャン、カラバン。」デュロツクは、もう一度呼んだ。

聲に應じて立ち上つた相手は、力一杯椅子の肘架を掴んだ。

「そんな名前を二度も呼んで、どうしようと云ふんだ。」

「ジャン、カラバン。僕は永い間、お前に逢ひたいと思つてゐたんだ。」

「わしが、よしそんな名前を持つてゐたとしたところで、それが君にどうしたと云ふんだ。わしがその名を名告つてゐた頃には、君はまだホンの子供だつ

たに相違ない。」

「僕の名は、デュロツクと云ふのだ。」

「え？　ぢやあの……。」

「さうだ。お前に殺された男の息子だ。」

男爵は笑はうとしたが、それにも拘はらず、目の中には明かに恐れの色が浮んでゐた。

「君、過ぎ去つたことは云はないことにしようぢやないか。あの時には、わし等が生きてゐるか、奴等が生きてゐるか——人民勝つか貴族勝つかの時代だつたのだ。君の父はデロンド黨だつた。さうして死んだ。

わしはその反對の過激な山嶽黨だつた。わしの友達も大方は死んだよ。それが戦ひの常ぢやないか。お互にそんなことはすつかり水に流してしまつて、君とわしと、これからもつと近附きにならうぢやないか。」

彼はかう云ひながら、ブル／＼顔へる赤い手を差出した。

「澤山だ。」デュロツクは云ひ放つた。「僕の當然すべきことは、貴様が椅子に腰掛けてゐるところを、このサーベルで、ブツツリ刺し殺してやればいいのだ。貴様なんかの劍と、刃を合はすのも穢らはしい。しかし、それでも貴様はフランス人だ。僕と同じ國旗の下に生存してゐる人間だ。仕方がない、立ち上つて防げ。」

「チエツ、チエツ。」男爵は舌打ちをしたが、「そりや若い君達としては……。」

もうデュロツクには我慢がならなかつた。彼はいきなり飛んで行つて、手を開いたかと思ふと、いやと云ふほど鬚の真中を殴りつけた。次の瞬間、男爵の上唇に血が滲み出た。と同時に、青い目が急に爛々と輝き出した。

「殴つたな。覺えてゐる、殺してやるから。」

「いゝとも。」

「おい、わしのサーベルをよこせ。——君造、待つ



てをれよ。」

彼はかう云ふが早いか、急いで部屋を出て行つた。

四

諸君、僕はさつき、部屋の突當りに、第二の扉がカーテンの蔭にあることを云つた。——男爵がそこから出て行つたかと思ふと、入れちがひに、そのカーテンの蔭から、ふいに一人の若い美しい女が飛び出して來た。カーテンがユラリと揺れたと思つたら、もう彼女の姿は僕等の間に來て立つてゐたのである。

「妾すつかり見てゐましたわ。——ああ、あなたは全く旨くやつて下さいましたのね。」

彼女はかう云つたかと思ふと、デユロツクの手を取つて、幾度も——接吻するのだつた。

「奥さん、どうしてそんなに僕の手に接吻なんかなさるのです。」

て貰ひたい。」

と、野獸が云つた。

勿論、こんな、部屋の真中に大きなテーブルの置いてある部屋なんかで、決闘は出来なし。それ故、僕達は、彼等二人のうしろから、薄暗い燈火の附いてゐる廣間へ出て行つた。暫く行くと、突當りの明け放たれた戸口から、明るい光が燦き出てゐるのが目に留つた。

「あそこなら、適當でせう。」例の黒い鬚もじやの男が云つた。

そこは、大きな、ガランとした部屋で、周囲の壁際に、箱や樽が並べてあつた。隅の方の棚の上には、ランプが非常に明るい光線を放つてゐた。床は平で、見るから丈夫さうであつた。剣闘の場として、これ以上の場所はまづ求められまい。

デユロツクは、ギラリとサーベルを引き抜くと、部屋の中へ飛び込んだ。

「だつて、この手で、あの卑しい嘔吐きの口を殴つて下さつたんですもの。この手で、きつと妾のお母さんの讐を討つて下さるに違ひありませんもの——妾は、あの人の繼子です。あの人は、妾のお母様をいぢめ殺してしまひました。だから、妾はあの人を憎んでゐます。その上に、あの人を恐れてゐます。」

——あ、足音がします。」

云ひさしたかと思ふと、彼女は現れた時と同じやうに、素早く姿を隠してしまつた。

五

すぐそのあとへ、男爵が、抜身の長劔を提げて現れた。僕達をこへ案内した例の男が、うしろから附いて來た。

「これは、わしの秘書役だ。立會人になつて貰ふつもりだ。——ところで、こんな狭い處では駄目だらう。よかつたら、わしと一緒にと廣い部屋へ來

男爵は一足すさつて頭をさげて、僕に先きにはひるやうにと云ふ身振をした。僕は相手の禮儀を受けて、鬨を跨いだ。と、その瞬間、うしろで、ドシンと扉の重く締まる音がしたと思ふと、續いてビーンと錠の降りる音が聞えた。

僕等は、畏に掛けられたのだ。

しかし、ちよつとの間は、迂濶にも、二人ともまださうとは氣が附かなかつた。こんな思ひもかけぬ卑怯な目に逢はされたことのない僕等としては、無理もあるまい。

それにしても、ああ云ふ過去の歴史を持つた男を、たとひ一瞬間でも信用したのかと思ふと、我々の胸には、一時に憤怒の炎が燃え上つた。思へば、彼奴の卑怯なことは勿論、僕等二人のお目出度さ加減が、堪らなく腹立たしかつた。

(つづく)



實相寺のお化墓（推薦）

稻垣宗一

岩岡とも枝畫

實相寺の裏に無縁佛の墓がある。墓場のまはりには大きな松や樅や椎の木がぎっしり生えてゐて、下は落葉でいつもじめじめしてゐる。

椎の木の下の暗い所に、土饅頭の墓がある。その上には腐つた黒い木の葉や、雨水が入つた氣持の悪い茶漬茶碗の様なものがのせてある。このお墓は誰も手入をする人がない。花や線香の立つてゐることなど一度もない。一年にたつた一度、お盆の時に實相寺のお坊さんが墓のまはりの草を刈り取る位な

のである。それでゐて不思議なことには、土饅頭の上だけは草が生えない。このお墓のまはりを手をたぎながら、呼吸を止めて三度廻ると、お化が頭を出すといふことだ。村の惡戯子が五六人で来て、戯談半分で廻ることがあるが、三べん廻るものは一人もない。歸りには『わあーつ』と聲を揚げて、我先に逃げて行くのが普通である。

茂吉は今年五年生であるが、小心で其のくせ口やかましい子だ。

或る時、學校の歸り道で五六人の子供が自慢の仕合ひを始めた。茂吉は、とうとう『あのお化墓を廻つて見せると云ひ出した。外の子供は『茂吉の臆病者が廻れるかい』といつてひやかした。

『廻るとも、廻つて見せる。お化やなんか晝中出るものか。』

『廻つて見よ。お前が廻つたら今度から組馬の大將にしてやらあ。たゞ廻るだけぢやないぞ。手をたいて呼吸をせんでだぞ。』

『お、廻るとも、そのかはりお前等もそばで見てもれ。』

『見てゐるとも。』

と言ひながら、皆は墓場へ入つて行つた。

外の子供は、墓から二三間隔つた所で止つてしまつた。茂吉がもつと傍まで来いといつたら、外の子供に『やあ、もうおつかなくなつたのか。』といはれたので、茂吉一人墓の所へ行き、成るべく墓を見な

いやうにして、齒を喰ひしばつて廻りだした。

茂吉の顔はサツと青くなつた。外の子供はもう逃げ腰になり、中には他人の肩につかまつてゐるものもあつた。茂吉の顔は二廻り目には死人のやうであつた。三廻り目には、齒をがちがちやつて、ろくに手もたたかずに走るやうにして廻り、廻つてしまふと夢中になつて、一目散に墓場から逃げて行つた。

外の子供も『わあアー』といつて、我先にと逃げ出した。中には下駄を片方落しても拾はずに行つたものもあつた。佐市だけは、一寸墓の方を見てゐて一番後から逃げて行つた。

茂吉は、それでも實相寺の門の所で待つて居た。皆は、はあ／＼と息を切つてゐた。周太郎は、『お化が出たか。』と聞いた。茂吉は『茶碗が、茶碗が、茶碗がなあ、動いた。』といひながら、まだおどおどしてゐた。

佐市は『嘘だ、嘘だ、何も出やあしない。茂吉

は三べん目に呼吸をしたんだ。」と、いった。

「茂吉、手前嘘をついてはいかんぞ。茂吉はきつと怨霊にとりつかれるぞ。」

「怨霊、怨霊！」

「お、そうさ。あれはな首つり女の墓だぞ。廻りながら呼吸すると、怨霊が呼吸と一緒に入って行くのだ。茂吉、怨霊につかれるぞ。」

茂吉は二廻目の時にわざと呼吸をした。呼吸をすれば、お化も出ないだらうと思つたので。が茂吉は、「呼吸なんぞせやあせん。呼吸なんぞせやあせん。」と家へ着くまで、いや家へ着いてからも、云ひつづけてゐた。

その日は、夕飯も食べずに寝てしまつた。

翌日はいつも通りに學校へ来たが、何となくぼんやりしてゐた。それから一週間目頃から、茂吉は教室の中でヒョイ／＼と物におびえたやうに後を向くやうになつた。そして、口やかましい茂吉が全く静

になつてしまつた。

運動場に居る時は、いつも隅の方でばかんと立つてゐた。佐市が傍に来ると、まるで追はれるやうにして逃げて行く。

茂吉の掃除當番の日が来た。佐市と一しよである茂吉は、授業がすむと掃除當番を逃げやうとした。外の子供が見つけて呼んだので仕方なしにのこつてゐた。掃除のすんだ後で、皆が茂吉が逃げやうとした事をせめた。しまひには、佐市が、「茂吉の怨霊つき。茂吉の腹の中には怨霊がをる。」と、いった。

茂吉は物も言はずに急ぎ出した。後から佐市が、「茂吉の後には、怨霊がをる。後に白いものが見える。」と云つたので、走る様にして、佐市等が見えない様になつてからは全く走つて家へ歸つた。

茂吉は時々變な笑ひ方をする様になつて来た。夏になつてからは、茂吉は全く、どうかなつてしまつ



た。學校へも行かないで、西瓜や生茄子を食つては寝てゐる。夜になると起きて、電燈をつけて雨戸を開けつ放して、獨つきり座つてゐる。眞青な柿を十も二十も取つて来て食つてしまふ。橋本の二錢餅でも十位一度に食つてしまふ。

秋に入りかけてからは、一層悪くなつて、「おれの腹の中には何か入つてゐる。」と言ひ出した。そして、夏頃とちがつてあまり食べないやうになつた。顔は青くなつて、目ばかり光つて、頬は尖つて、一目見ても氣味悪いやうになつてしまつた。

茂吉には一人の母がある。兄弟四人であるが、茂吉の外は皆外へ出てゐて、家には母と茂吉と二人だけである。

茂吉の父は、大酒飲みで、田も畑も皆のんではまつて、借金の大山を造つて、茂吉が七才の時死んでしまつた。茂吉の母は、其の時から苦勞の仕續けで、悪い事ばかり續いてゐる。長男は道樂をして母

を苦しめる。一番上の姉が眼をわづらつて散々病院通ひをやつた揚句片目潰してしまつた。次男は、小學校を卒業するとすぐ奉公に行つたが、間もなく主人の金を持出した。其の時も、母親は随分泣かされた。

それに今度は、茂吉がこの有様だ。母親は此頃では、人さへ見れば話して泣いてゐる。

茂吉は母親が叱言を言ふと、猶更暴れて納まりがつかない。それ故母親は、此の頃では少しも逆らはないで傍で見ている。それも茂吉の見える所では怒るので、茂吉に見えないやうにかくれながら見張つてゐる。或時は茂吉が家の中へ入らせないので、母親は一晚中雨戸の外で泣明したこともある。村の人は、此のことを聞いて泣かないものはなかつた。

母親が何と言つてすかしても、茂吉が醫者へ行かぬので、母親を頼んで無理矢理に自動車に乗せてつれて行つたら、病院で暴れて藥瓶等を打ち碎いてし

まつた。

其の後は一層悪く、母親を少しも近付けない。母親は野良へ仕事に行くことも出来ないやうになつてしまつた。茂吉は一日家の中で火を焚いたり、家の中と外をかまわずに石灰をまき散したり、着物をビリ／＼引き裂いたり、もうとても母親も我慢が出来なくなつて、新家の源さんを頼んで柱に縛りつけてもらつた。其の時も、母親の眼は泣きはれてゐた。

其の後は死ぬと言つたり、お父つあんが迎に來たとか、佛様のお花が一本だけ先に枯れるとか、時には東京の伯母さんの所へ佛様を持つて行くと云つたりする。

或る時は、一里もある停車場までテク／＼と歩いて行つて錢も出さずに、東京行の切符を呉れと云つた。驛員が驚いて色々話して見ると、氣がふれてゐることがわかつたので追ひ返した。茂吉はぶつ／＼怒りながら半日方々を歩いて、二時頃千福の親類へ

何の效目もなかつた。

秋の終り頃から、茂吉は又飯を食ひ出した。一日に七回位食ふ。

冬に入つてからは、だん／＼普通になつて落着いて來た。母親は疲れ切つてしまつて、痛々しい程やせた。

茂吉は潮が引くやうに氣が納まつて來た。しかし時々大聲で笑ふこともある。

この頃は、日當りへ机を出して、手習ひを始めた。そして無暗に母を戀しがり、少しもはなさないやうになつた。

母親は『いよく淨土へ行く時が來たのか。』と言つた。

佐市は茂吉のうわさを聞く度に、いやな心持がした。此頃は、佐市が氣味の悪い笑聲を出すやうになつた。

(をばり)

(作者住所 愛知縣西尾町上町)

行つた。親類の人は皆野良へ出てゐて誰も居なかつた。茂吉は一人で座敷に入つて寝てしまつた。夕方伯母が野良から歸つて見ると、家の戸が開いてゐる。びつくりして恐る／＼中をのぞいて見ると、茂吉がぐう／＼眠つてゐる。すぐに自轉車で母親のところへ言つて來た。母親はそれ迄に、散々方々を尋ね廻つて居たのである。母親の一番困る事は、體を休める時がないことだ。茂吉は朝でも晝でも、好きな時に寝て、夜は起きてゐることが多いので、母親は全く疲れ切つてしまふ。

母親は人に聞いては、御利益のある御札を受けて來て家によつたが、何の効目もなく、茂吉が皆破つてしまつた。

親類を頼んで五日かゝつて受けて來た大狼神様の御札を、茂吉が破つた時には、さすがに母親も怒つて、茂吉を縛り上げてしまつた。

弘法様や種々のお寺で御經を上げてもらつたが、



大石主税

三島 霜川

羽鳥 古山 畫

三、大石内藏之助

(前巻までの梗概は一三五頁にあります)

「晝行燈」と、あだ名のついた城代家老大石内藏助は、今、早見と資野との二人が持つて来た書面を眼前にひろげて、うんと「ふんべつ」を、搾って居りました。傍には、誰も居りません。

「いづれにしても、重いお咎があらう。赤穂一家ちふの昔が、血の涙を流す時が来たのだ」

内藏助は、どツしりと落ちついて、よしんば、と

んな事があつても、『主君、内匠頭の名を汚さぬこと。赤穂一家ちふの面目を保つこと』について、いろ／＼に考へて居りました。時々、倦いては、じつと眼を据えながら……

その書面には、かういふやうなことが書いてありました。

御勅使(東山天皇の)柳原大納言、高野中納言、清閑寺中納言は、東海道五十次の道中を無事に、三月十一日に、江戸についた。そして、あくる十二日に、江戸城に登城することになった。

徳川の五代將軍綱吉は、大そう、朝廷を大切に思つた人でした。それで、御勅使のお饗應に、非常に氣をつけて、出来るだけ、いいにいしようとしました。

浅野内匠頭は、そのお饗應の係りの一人に選ばれました。けれども、武家ですから、さういふ「作法」やなどを、よく心得てゐませんでし

た。そこで、吉良上野介に、いろ／＼、指圖を受けて、大切な「役」をつとめることになつてゐました。ところが、上野介は、内匠頭のお禮の仕方が少ないと云ふので、むか／＼してゐました。それで、碌に、何も教えてもやらなければ、また、わざと、間違つた指圖をして、内匠頭を、まごつかせました。さうして、大きな恥を掻かせるやうにしました。

十三日には、お饗應のお能狂言がありました。この日も、どうにか、無事に済みました。さて、あくる十四日。この日は、江戸城の白書院で、綱吉が、「勅」におこたへを奉る「式」のある大切な日でした。大名も小名も、皆な、烏帽子大紋(素相)姿で、登城しました。

内匠頭は、上野介の言葉信じて、とにかく、長上下で登城して見ると、いづれもはれの太紋です。「上野め、また／＼、恥辱を興へようとしたな」

と、内匠頭は、くわツとなりましたが、幸に、烏帽子大紋の用意もして行ッて居りました。それで、それは、やツと、恥を掻かずに済みました。すると、今度は、その日、御勅使をお迎に立つ場所が、ハッキリと解ッてゐない。で、その事を、



上野介に、たづねますと、上野介は、「待ッてゐた」と、云はぬばかりに、大きな聲で罵りました。「それ位のことば、ふだんから、心得てゐなければならぬいやないか。今になツて、たづねるとは、何んといふ間拔なことだ」

さうして、クルリと背を向けて、ズン、松の廊下の方へ行きました。

内匠頭は、體ぢふの血が、頭に上ツたやうになツて、もう、夢中でした。

そこへ、梶川與三兵衛といふ人が来て、内匠頭に、ある事をたづねてゐますと、上野介が、後を振向いて、立停まりました。

「そんな人に、何をお聞きになツても、解るものですか」と、セ、ラ笑ひました。

内匠頭は、バタ／＼と駆出して、「上野、覺悟」と、叫びながら、小さき刀を引き抜いて、上野介の後から、真ツ二ツにと斬りつけました。しかし



腕が伸びすぎてゐたので、よく、斬れませんでした。た。

「えッ……」

と、上野介は、びっくりして、振りかへる……その頭を目がけて、二の太刀が閃めきましたが、

刀のさが、烏帽子の鐵骨に當ツて、刎かへされて了ひました。

上野介は、「うわツ」と、腰を抜かして、ベタ／＼となツて了ひました。

内匠頭は、もう、一太刀と躍りかゝりました。が、後から、梶川與三兵衛の大力に、しツかと抱止められて、いくら腕いても、もう、駄目でした。

上野介の肩先から、血が、タラ／＼、タラ／＼流れました。額からも、血が、ボタリ／＼、滴りました。しかし、どちらも、深痕といふほどではありませんでした。で、上野介は、龜の子のやうになツて、這ツて逃げました。

はれの「儀式」の目を、血に穢されたといふので、將軍綱吉は、カン／＼に憤りました。そして、「内匠頭に、きツと、申しつけい」

と、云ひました。これは、「厳しく處分をしろ」と、いふ意味でした。

内匠頭は、一應、取調べられると、すぐに「網乗物」に乗せられて、田村右京太夫の邸へ送られました。「網乗物」といふのは、落し駕籠とも云つて、外から錠をかけ、網を張つて、駕籠のなかから、勝手に外へ出ることの出来ないやうにした駕籠です。普通の罪人を乗せるのは「胴丸駕籠」といふのですが……

内匠頭は、罪人の「取りあつかひ」を受けたのでした。しかし、上野介の方は、當前の駕籠で、大友近江守の邸へ送られました。そして、そこで、癪の手當をしました。

それが、今で云ふと、恰ど、午前十時前のことでした。

片岡源五右衛門は、その日、内匠頭のお供をして、江戸城、大手の下馬先きまで行つて居りました。けんいゝの相手は内匠頭、いよゝゝ、上野介を斬つたのだと解ると、大急で、内匠頭の曳馬を

曳出し、ヒラリと跨がり、一鞭當ると、馬を煽つて、一ツさんに、鐵砲洲の屋敷に歸りました。さうして、そこに居合はせた早見藤左衛門と、荳野三平とに、赤穂へ注進するやうに頼みました。早見も、荳野も、宅へは歸らず、それから間もなく早駕籠に乗つて、江戸を出發しました。と、かう、江戸城の御殿の、その日の騒動の様子、その書面で、ざつと解りました。それが、五日前のことでした。

『出来たことは仕方ないが、まことに困つたことだ』

と、内蔵助は、いく度となく、書面を繰りかへして見ました。そして、夜が明けたら、早見、荳野も正氣づくであらうと、疾く委しい様子を知らたいのを忖えて、夜の明けるのを待つて居りました。

夜の明けかゝるのを待つて、内蔵助は、若徒、仲間、指圖をして、家中残らずに、「早朝、登城」の

觸れを廻しました。その頃、早見、荳野も、やつと、正氣に回りました。

内蔵助は、まづ、二人に、支度をして置かせた、柔な粥をたべさせて、それから、ふだんと、少しも變らない様子で、内匠頭と上野介との關係などを、いろゝゝ、委しく聞きました。そして、内匠頭が、上野介を斬つたのは、よくゝゝ、がまんが出来なかつたからだと思ひました。

間もなく、内蔵助は、お城へ出て參りました。やがて、お城の大廣間に、三百何十人といふ、赤穂の家中の人々が、残らず集まつて來ました。そのなかには、芝居などでは斧九太夫、眞んとは、二番家老の大野九郎兵衛も、まじつてゐました。

内蔵助は、「一大事」が起つたことを、人々に傳へました。内匠頭が、田村右京太夫のところへ「お預けの」身となつたことも話しました。それきりで、その後のことは、まだ、解つてゐませんでしたか

ら、その日は、格別、かうといふ相談もありませんでした。

その日も、暮れました。お城の櫓の上には、いつものやうに春の星が、「何事もない」と、いふやうに、美しく光り出しました。

すると、また、「えゝゝ、はい。えゝゝ、はい」と、物々しい掛聲で、二挺の早駕籠が、赤穂の城下へ入つて來ました。そして、大石の邸へ着きました。

内蔵助は、後の様子が知りたかつたので、その早駕籠を待ちに待つてゐたところでした。大石の邸は、俄に物騒がしくなりました。主税も、胸を躍らせ躍らせ、若徒や仲間たちと一緒に、いろゝゝな用事をしました。半ふんは、夢中でした。

今度やつて來たのは、内蔵助の従弟の大石瀨左衛門と、もう一人は、「ふんべつ者」として評判のある原惣右衛門でした。二人は、内匠頭の弟の大學

と、それから、親類の戸田采女正と淺野美濃守と、この三人の連名の書面を持つて來たのでした。

原も、大石も、やはり、早見、資野と同様に、ぐたぐたになつて居りました。で、内藏助は、書面を受取ると、二人を其のまゝ、寝かせて了ひました。

——内匠頭は切腹、お家は斷絶（その家を無くして）すふこと、敵、上野介は、無事。疾が痊ると、以前の通り役につく——

書面には、さういふ意味のことがかいてありました。内匠頭は、騒動のあつた日の暮方、櫻の花がチラ／＼散る下で、切腹させられて了つたのでした。

「たぶん、さうであらうと覺悟はしてゐたが……」

内藏助は、ハラ／＼と、涙を落しました。そして、

「上野介の無事でゐること」を無念に思ひました。

主税は、その晩にいふ、遅くなつてから、父の居間に呼ばれました。内藏助の傍には、誰も居りませんでした。

床の間には、經机がすえられて、その上に、「冷光院殿、前少府、朝散大夫、吹毛玄利大居士」と、内匠頭の法名が、小さな位牌にして、祀つてありました。そして、その前に、香の煙が、絲よりも細く、すーと、立ちのぼつてゐました。

主税は、それを見て、今更のやうに、ハツとしました。

内藏助は、眼を位牌の方に向けて、「禮拜をせい」と、いふ「心もち」を見せました。

主税は、涙を、そつと、袖で拭ひました。そして、床の間の方に、居ざりよつて、まづ、香をつまむで手向けました。それから、いく度となく、「禮拜」をして、やゝしばらく、そこに突つ伏して泣いてゐました。

内藏助も、うつむいたまゝ、じつとして居りました。夢のやうに立ちのぼり、夢のやうに消える香の煙、

主税のかすかに嗚咽をする聲。室は、しめやかに、しんとしてゐました。

「主税」

と、内藏助は、靜に、呼びかけました。

「はッ」

主税は、位牌の前をさがつて、父の傍近くによつて、兩手をつきました。そして、父の顔を見上げました。その臉は腫れて、眞ッ紅になつてゐました。

「殿内匠頭は、あんなお姿になられて了ふたぞ」

と、さういふ内藏助の眼も、うるむでゐました。

「はッ」

と、主税は、位牌の方を見て、また、涙を拭ひました。

「そちが生まれた時、殿は、この家へおいでになつて、そちを御覽あそばした。そして、お脇差（小刀）を下された……」

と、内藏助は、遠い／＼、昔の夢を思出してゐる

やうに、靜に／＼さう云ひました。

主税は、「よく、知つて居ります」と、いふやうに、うなづきました。そして、軽く、す／＼上げました。

「それから、あれは、たしか、そちが五ツの年の春であつたと思ふ。殿は、そちをお召しになつたので、父は、そちをつれて、御前に出た。その時、殿は、そちに、何んでも、欲しい物があれば云へ、遣るぞ、と、仰せになつた。すると、そちは、遠慮なく、馬が欲しいと申上げた……」

主税は、涙の顔に、かすかな笑を浮めて、うつむきました。

「殿は、すぐに、お傍の者に申しつけて、お腕から、七頭といふ馬を庭先へ曳出させて、そちにお見せあそばした。そして、どの馬でも、好きな馬を遣ると仰せになつた。すると、そちは手をたゝいて、悦んで、あの馬をと申上げたのが、あの「青柳」ぢや。そち

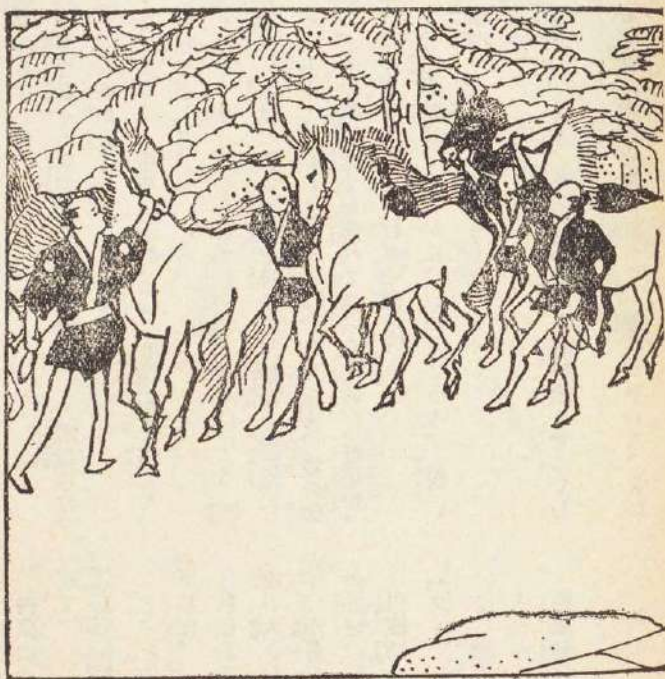


は、七歳の乗初から、ブツと、あの黒馬で、馬の稽古をしたのちやぞ」

と、云ッて来て、内藏助は、じつと、主税の様子を見ました。

主税は、両手を、ビタリと畳の上に突いて、肩をふるはして泣いてゐました。その肩さが、大人のやうに、いかつく、その時ももう、五尺四五寸もあらうといふ圖體の主税。しかも、この十年あまり、泣顔なぞ見せたことのない主税が、年だけの少年になつて、ただ、ボロ／＼、ボロ／＼、涙を落して、たわいもなく泣いてゐるのです。

内藏助は、それを、いじらしく思はしました。そして、傍を向いて、やゝしばらく黙ッてゐて、『殿は、格別、そちをお愛、みあそばした。そちは、こ



の御恩を忘れてはならんぞ、可いか」と、ぎゅツと、「急所」を押へつけるやうに、重々しく云渡しました。

主税は、黙ッて、頭を下げました。

言葉は、しばらく途断れました。

「お父上、お殿様の敵は、上野介殿でございましょう」

主税は、ふいと、かすれた聲で、たづねかけました。

内藏助は、チラと、主税の顔を見たまゝ、何んとも云はずに、軽く、うなづきました。

「その上野介殿は、御無事なんですツて。さうでございますか」

主税は、胸をのして、おツかぶせて、たづねました。

『ム』

と、内蔵助は、わざと、軽く、閑流すやうにして、傍を向きました。

「上野介殿をお討損ねあそばしたのが、お殿様には、どんなに御無念でございましょう」

と、云ッて、主税はまた、ハテ／＼と涙を落して、うつむきました。

「それを、今、いくら云ッたとて、何んになる。赤穂家中の者は、殿の御恩を思ふに、誰彼と甲乙はないが、しかし、われ／＼父子は、わけても、殿の御恩と、その御無念とを忘れてはならんのだ。可いか。父には、用事もある。行ッて寝め」

と、内蔵助は、どこかに、いつもよりも、暖い「愛情」をこめて云ひました。

「はッ」

主税は、もう、そこに居ることが出来ませんで、た。で、内匠頭之位牌に向ッて「禮拜」をして、それ

から、父にも禮をして、静に出て行きました。

内蔵助は、はッ／＼に高い、主税の後姿を見上げて、

「よくも大きくなりおツた」

と、その眼が、ツクト／＼と、さう思ッてゐるやうでした。

そして、その時、その心が、何も彼も忘れて、主税の大きな姿に通ッてゐるやうでした——まッたく、小男の内蔵助と「たけくらべ」をする、主税の方が、三寸はども、長が高かったです。

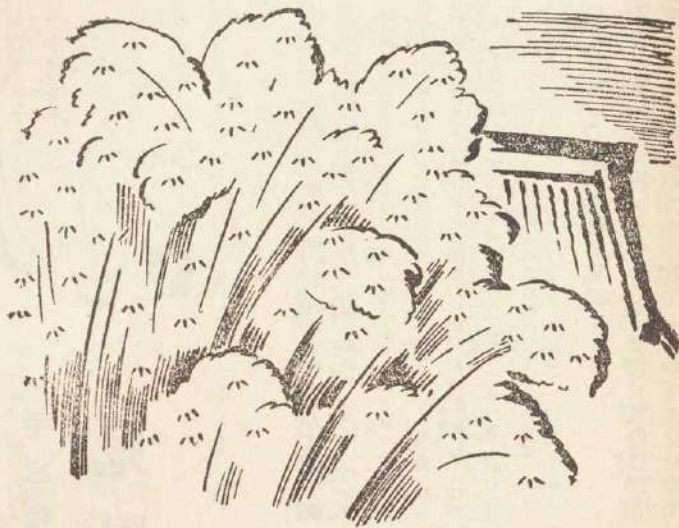
内蔵助は、今、ふと、それが、おかしくなッて、「フ、」

と、微笑ひかけました。

とたんに、主税は、ビタリと、襖を閉めました。

内蔵助は、眼をつぶッて、じツとなりました。

(つとく)



ちやつちや (推薦)

鈴木伊三緒

ちやつちや鶯
もう出たな

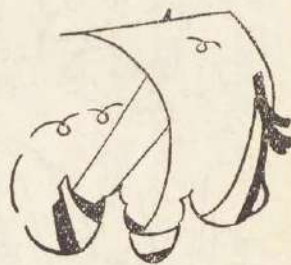
お寺の小藪に
啼いゐるな

ちやつちや鶯
啼いてるな

藪で葉つばが
揺れてるな

(千葉縣安房郡保田町六六)

六五



(平家物語)

鬼界ヶ島

(俊寛と有王の物語)

大木 雄三

松政徳次郎畫

六六

俊寛僧都、丹波の少將成經、平判官康頼の三人は、平清盛のために鬼界ヶ島に流されました。康頼と成經の二人は、熊野權現に祈願をこめて、一日も早く都へ歸れるやうにと祈りました。その甲斐あつてか、やがて清盛から、二人を赦すといふ赦免狀を持つた使者がはる／＼島をおとつれましたが、その赦免狀にはただ一人俊寛の名だけがありません。三人で暮してさへ淋しいのを、俊寛は丁つた一人この島に残されなければならぬのです。

「お氣の毒だ、お氣の毒です。」

使者の基康は、僅か一言いひました。氣の毒だとは思つても、自分の力では赦すことのできないのを

「私たちは約束したではないか、いつまでも一緒にやう、死ぬのも赦されるのも三人揃つてと、約束した。」悲しい聲が續きました。

「私一人になつて、どうしてこの寂しい島に生きられませう、お願ひです、連れて行つて下さい。」

基康の胸にとりすがつた俊寛の頬は、涙の雨で汚れてをりました。

「お氣の毒です。」

基康はかう繰り返すばかりでした。

やがて、赦されて歸る二人を乗せた舟は、櫓の音を立て、岸を離れるのです。

「待つて下さい。」俊寛は舷へとりつきました。

「あんまりだ、あんまりだ。」

恨みに燃える目が、舟の人々を睨みつけました。みんなはそつと射すくめられたやうに、襟元に冷いものを感じました。

舟はするするとすべりまゐる。それに引かれて俊寛

悲しく思ふばかりでした。

成經もそれをきいて、いままでの嬉しさを忘れたやうに悲しい氣持ちになつてしまひました。まして心の優しい康頼は、どんなにか俊寛を哀れに思つたでせう。

「何かの間違ひです。私たちが都へ歸つたならば、何とかしてきつと迎ひの者をよこします。赦されるやうにいたします。」かう慰めたのでした。

「駄目だ、それは嫌です。」俊寛は喚きました。怖ろしい目つきをしてゐます。身震中が震へてゐます。

の膝は波に打たれました。膝ばかりではありません。舟が進めば進むほど海は深くなるのです。膝から胸へ、胸から肩へ、水はいよいよ深くなり、しまひには絶えまなく喚きつゞける口の中まで、辛い水が届いてまゐりました。その苦しさ、俊寛はたうとう手を離さなければなりませんでした。

舟はだんだん遠く小さくなり、どれが誰かわからなくなりました。やうやく岸に這ひ上つた俊寛は、手を振り上げて、

「おい、おい。」と、呼んでみました。

舟からも誰か答へたやうです。きつと心の優しい康頼だつたでせうが、その聲も波の音に掻き消されて、やがて夕闇が海を暗くしてしまひました。

「おい、おい。」舟は見えなくなりました。

それでも俊寛は呼び續けてゐたのです。

かなしい人のあることを知らない鷗は、夜の波に戯れ、白い翅をひるがへしました。

六七



張しげに星の瞬く夜です。二人の友だちに別れた俊寛は、その日からたゞ一人で暮さなければならなかつたのです。三人で作り、三人で住んだ、思ひ出の小屋もいまはなくなりました。隙間からは風が吹き込み、亂れた髪の毛を弄びます。秋雨は屋根から滴り落ちて、枯木のやうに瘦せた手足を濡らしました。そしてすつかり元氣を

失くした俊寛はミイラのやうにさもしい姿をして島をうろつきました。時々岩の間を歩いて、硫黄を拾ひました。それは九州から来る商人の手に渡つて、いくらのお金に換えることができたのです。それも永くはありませんでした。身体は日増しに弱り、岩の間を歩く力も抜けてしまつたのです。髪や髯は伸び色は黒く、まるで乞食のやうに變つた俊寛は、島の人の漁をしてゐる側へ行つて、物欲しげに眺めるのでした。

「うるさい奴だ、これを持つて行け。」かう怒鳴つて、投げつけてくれる小魚でも、俊寛には何より有難く思はれました。その魚を食べ、濱に打ち寄せた藻を食べ、やうやく生命をつないで行けたからです。「いつになつたなら迎ひの者が来るだらう。」俊寛はそればかりを待つてをりました。康頼の言葉が忘れられなかつたのです。ある日も、濱へ出て、島の人から投げて貰つた二



三尾の魚を手の下げて、砂の上に細い影を落して歸る途中のことでした。向ふの岩陰に見なれない若者が立つてゐるのです。立派な甲斐々々しい身なりは、確に若者の人に違ひありません。

「迎ひの者かな。」

思つただけでも、俊寛は飛びついて行きたいやうに見ひました。けれども、疲れきつた弱い足はそこへ走つて行くこと

さへできないのでした。

「……………」

俊寛は口を動かしました。聲も出なかつたのです。若者は、つかつかと俊寛の方へ近づきました。そして言ふのでした。

「おいおい、お前は俊寛僧都と仰言る方を知つてはゐないか。」

「俊寛！」 思はず俊寛は自分の名を呼びました。

「さうだ、その方だ。」 さういふ若者の顔、俊寛には健かな覚えがありました。ちつと見つめてゐるうちに、やうやく思ひ當つたのです。

「おゝ、有王！」 俊寛は口走りしました。

「えつ。」 若者はびつくりしたやうに二三歩退りました。暫く俊寛の顔を見てゐるうちに、いきいきとした血の色を輝かせて、

「お師尚様。」

かう言つて、ぱつたりと砂の上へ兩手を突きまし

た。はらはらと落ちる涙が白い砂を染めました。

「よく御無事でおゐる下さいました。」

「有王よ。」俊寛は手に持つてゐた魚を放り出して、若者の前へ崩れるやうに坐りました。俊寛もやつぱり泣いてしまつたのです。

島の人たちは、呆れた顔で、二人のやうすを眺め、何か小聲で話合ひました。

俊寛をたづねて来た若者有王は、まだ俊寛が都にゐて法勝寺の執行だつた頃の弟子だつたのです。

「よく来てくれた。」

俊寛は心からお禮を言ひました。誰にも棄てられた世の中で、たつた一人だけの味方のやうに思はれたのです。

「こんな遠い島まで、たゞ一人でまゐつたのか、苦勞なことだつたらう。」

「はい。」有王は、やうやく顔を上げ、拳で目を拭

の人の噂に氣をとめて聞いてゐました。すると或る日、康頼や成經が赦されて歸るといふことを知つたのです。しかし俊寛だけが赦されないのわかりました。

「かうしてはゐられない。」

有王がこつそりと鬼界ヶ島へ渡る決心をしたのはその日だつたのです。役人の許しがなくて罪人に會ひに行くのが知ればいふまでもなく殺されてしまふのです。けれども有王は怖れません。一度心にきめると、まづ奈良に隠れてゐる俊寛の娘をたづねて、決心を打ち明けたのです。

「遠い島だといふことです。荒い波にかこまれた小島だといふことです。お師尙様は、そこでどんな苦勞をしていらつしやることでせう。それを思へば、私はせひ行かなければなりません。」

「では私も連れて行つて下さい、お父様に會はせて下さい。」

ひきました。

「苦しいとは思ひません。私は師尙様にお目にかゝりたい一心ばかりでした。その心が通つたのです。お目にかゝれてこんな嬉しいことはございません。」

俊寛は有王の兩手をとりました。

「有難う、有王、私にとつてお前の志は何よりだ。さあ、都の話をしてくれ。娘のことを聞かしてくれ。」

「はい。」有王は話し出すのです。俊寛は一言も聞き落すまいとして、身體中耳にして息をのみ込んだのです。

「都はすっかり變りました。」有王は言ひました。

俊寛が、康頼や成經と一緒に島流しにされてから、清盛の勢ひは、いよいよ大きくなつたのです。

それを憎むで、平家を倒さうとした者は何人かありました。けれどもみんな失敗してしまつたのです。

有王は師尙のことが心配になつたので、いつも都

「いゝえ。」有王は手を振つたのでした。

「あなたをお連れしては、またどんな難儀が起るかもしれません。私一人やつて下さい。きつとよいお便りをおきかせいたしますから。」

そして有王は、娘の願ひを思ひとまらせた代り、俊寛に宛てた手紙を預つたのでありました。子から父へ送る真心の手紙です。けれども役人に見つかれば取り上げられるのもとより、きつと怖ろしい罪にされるに違ひないのです。有王はいろいろ考へた末に、その手紙を髪を結ふ元結の中へ紐ち込んだのでありました。

小さい小さい一隻の舟。その中には飲水と食物とがありました。乗りては一人、それは有王です。小舟はかうして夜晝休みなく漕がれて、鬼界ヶ島へ着いたのでありました。

「これがお手紙でございます。」

さし出す手紙を、待ちきれないやうに俊寛は開いて見ました。優しい文字がいつばい書いてありました。心配してゐますと、書いてありました。早くお歸り下さるのを待つてをります、とも書いてありました。

俊寛には、可愛い娘の林檎のやうな頬や黒水晶のやうな瞳が見えてまゐりました。

『何といふ優しいことをいふ娘だらう。』

俊寛は呟いたのです。有王はちつとうなだれるばかりでした。

やがて有王は言ひました。

『私がお側へまゐりました上は、もう御苦勞はかけません。何なりと私がいたします。』

有王はほんとによく働きました。破れ小屋を修繕して雨風を避けました。硫黄をとつて食物に換へることもしました。けれどもそれが俊寛にとつて何になりませう。俊寛はたゞ一目娘に遇ひたいとばかり

思ひつゞけてゐたのです。娘の顔と都の様子とが頭の中に入り亂れてゐたのです。空を見れば空に、海を見れば海に、その二つのものがいづれも幻になつて見えるのでした。

『有王、お前にはすまない、けれども私はすこしも楽しいとは思へない、私はたとへ食へなくてもよい、都へ歸りたい、娘に會ひたい。』

俊寛は、ときどき涙を流して、詫びるやうに言ひました。

心の病ひはやがて身體をいためることが多いものです。俊寛もたうとう病氣になつてしまひました。薬瓶もない枕元に坐つたものは有王一人、弱つてゆく耳に、聞えるものは潮のうなりと空を走る風ばかりでありました。

病はだんだん悪くなりました。そして冷い秋雨の日に死んで行つたのです。

『お師向様。』

有王の悲しい涙が、青い血の氣を失つた俊寛の手の上にとめどもなく落ちて流れました。

やがて氣を取り直した有王は、間もなく鬼界ヶ島を後に、來た時の小舟で大海に乗り出したのでありました。都へ歸るために、俊寛の歸るのを指折り數へてゐるにちがひない娘のゐる奈良へ。

『どんなにお嘆きになるだらう。それを考へると、都へ戻るのも心がすまない氣がする。このまゝ海へ沈んでしまつたら……。』

しかし、有王は、すべてのことを知らせなければならぬと思ひました。それが自分のつとめだと考へました。その上は再び寺に入つて俊寛の魂を葬ひたいと決心したのです。

すゝりなく風の冷い海の中。有王は、力の抜けた兩腕に櫓を漕いで、だんだんと九州の方へ近づいて行くのでありました。

(をばり)





運動會の出來事

高松カン子

寺内萬治郎畫

七四

運動場の一隅に設けられた紅白のテントから、軽やかな軍艦マーチが流れてきます。パチパチと、小さな澤山の手が待ちかねた様に拍手を送ると、正面の幕がサッと開いて、五年の女組が囀々しく出てきました。やがてマーチが浮き立つた舞踏曲に変わると、澤山の靴に包まれた小さな足は、調子よくダンス、オブ、ジョイ、オクスンダンスをふみ始めました。吉田絹子は、運動場の北側に六年の白組として多勢の中に坐つて、五年

のダンスを見物してゐました。校庭の周囲を埋めた小さな見物は、紅白の小旗を手にして、今はおとなしく、上級生のオクスンダンスに見入つてゐます。屋内運動場には一杯生徒のお父さんやお母さん達が、ニコやかに來賓席に並んでゐらつていました。その日は珍らしく風もなく暖かで、絶好の運動會日和です。絹子はふと周囲の様子から目を放して、ふたたびダンスに目をやつた時、自分達の一番近所で一心にステツプ

をふんでゐる一人の少女がありました。海老茶色の服に茶色の靴下で、その恰好のよい足な赤い小さな靴に包んで踏んでゐました。少し赤いと思はれる髪の色も、白い顔や手と似合つて、午後の陽にキラキラと金髪のように美しく映えてゐます。『何んて可愛らしい。』絹子の視線は、じつとその少女にのみそ、がれたのでした。『何んて恰好の好い足でせう。』絹子は目を、さきもせず見つめてゐました。

『可愛らしい人ね！』かうした耳語が、絹子の耳に入つた時、ふと云ひ知れない或る心持が胸の中に浮んできました。『私の方が先に見つけてゐるわ。』と心で云ひかへしながら黙つてゐました。やがてダンスが終つて、皆が幕の中に入つて行く時迄、絹子の目には海老茶の服きた少女のみ眼前でダンスしてゐる様に見えるだけだ。

『さあこの次は私達の番よ。そろそろ用意しなくつちや。』絹子は夢の様な氣持で立上りました。

六年の女組、バスケットボール。『そう。』絹子は急いで控室に走つて行きました。

終つた人と初まる人として、また控室の中へ、絹子は一心にあの少女なさがしました。

『吉田さん。もうすぐ用意しないと駄目よ。いきなり幕から幕をかけられた時、絹子は

やつとあの少女なさがしだして、唇をなしてゐたのでした。『ちや、太田さん。又後でね……。』絹子はかう云つて、急いで運動場に消へて初めました。

『吉田さん、私それぢや席で一心に應援しますわ。』可愛いい目と美しい髪の色を、絹子の目先へちらつかせて、控室からかけ出して行きました。きつと膝

つて見えます。絹子は無暗にうれしくなつて心の中で勝利をちかひました。

パチパチ……。鎮いて行進曲に送られて三年の男子組が、體操をなへて威勢よく入つてきました。

『オイ。今度はバスケットかい。しつかりやつてくれ給へ。白勝つようにね。』



『馬鹿云へ……。紅勝つようにね……。』控室の中は蜂の巣の様ににぎやかです。『さあ皆、上級生なんだからしつかりやなくつちやいけなさい。』體操の先生は一生懸命に繰返して云はれ

ました。浮き立つ様なマーチ。絹子達は行進曲そのものの様な軽いなで取りで運動場を一躍りしました。パチパチ……。小さな手の鳴る中で、此の中に太田さんの可愛いい手も交つてゐる

んだな、と思ひながら、絹子は一寸太田さんの方を横目で見て見ました。
太田さんは顔を上氣させて、一心に手をたいてゐます。
絹子達は、それ／＼定めめの場所を守つてゐます。

ドン！ 合圖の發砲で、センターの伊藤さんは、氣持よくボールを味方の方へ打ちました。ソッ！ 皆は夢中で前後左右を駆け廻つてゐます。

「吉田さんしつかり……」

太田さんの聲がはつきり聞えてきます。

その拍子、絹子の持つたボールは、バスケット臺に強く當つてはね返りました。

アッ？ 駄目……素早く敵の一人がボールを受けると、勝敗は一變して味方はどん／＼不利になつて行きました。

ドン…… あ、敗れた。太田さんのがつかりた顔！

二回勝負……「しつかりよう。」白組の見物席から一心に応援がかゝつてきます。絹子

初まらうとしてゐます。
「太田さんしつかりよう。」絹子は夢中でした。

「ドーン……」タツ／＼。紅白の選手は終盤にスタートを切りました。

「紅勝つよう！」「白勝つよう！」紅白の小旗がバサ／＼と盛んに動きます。

これが最後の競技。紅白どちらも十四點を占めて此の競技で決勝されるのです。

ア！太田さんの番だ。（しつかりれ、と、絹子は心の中で念じてゐました。見物席から一心に応援の聲がかゝります。

「太田さんしつかりよう。」絹子は思はず大聲で叫びました。と、その時、今迄敵を二間以上も抜いてゐた太田さんは、どうしたはずみか、あつと云ふ間に膝をついてしまつたのです。

「アッ危い……」絹子は思はず立上りました。

太田さんは起上りません。絹子は、見物席から走出して、太田さんの所へかけつけ

はボールを受けると、カ／＼バスケット臺の下にゐた守備の平野さんに投げました。平野さんは直ぐにボールを投げ上げました。入った。……勝つた！ バチ／＼。
太田さんがニツコリ笑つた。絹子は夢中でした。

決勝戦——「伊藤さんしつかりれ。」

絹子はセンターの後から聲をかけました。「大丈夫！」

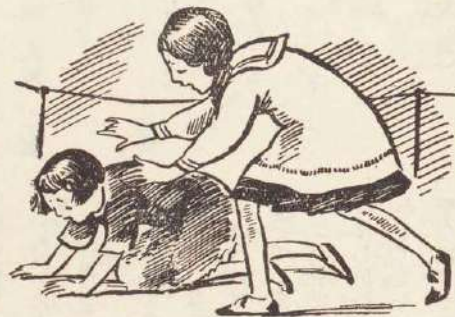
敗けたら大變……太田さんは？ 一心に見てる。

ドン！ ソラしつかり……白……白……しつかり紅しつかりよう。運動場の隅々から応援は降つてきました。

「ホラ吉田さん！」伊藤さんは、敵にかこまれた中から、かう叫んでボールを寄こしました。絹子は可成り離れてゐましたが、思切つてバスケット臺目にかけてカ／＼一杯ボールを投げました。

「フワッ。」
と云ふ白組の歓呼……

ました。そして、先生方がかけつけていらつしやるより先に、太田さんを抱き上げて、控室につれて行きました。



「どうしたの、どが痛いのか？ え膝……」
「……」黙つて太田さんはうなづきました。
萬一の爲來てゐた看護婦さんは、直ぐ應急

七六
バチ／＼。太田さんは夢中で拍子してゐます。「白勝つたい。」下級生の喜び。まあよかつた！ 「白組萬歳！」「バンザイ！」

選手達の心は、行進曲のそれよりもつと／＼輕やかでありました。

勝つた／＼。絹子は心の中で拍子を取りながら、多勢と共に控室に入りました。「お目出度う。」太田さんがうれしさに迎へてくれました。

「ありがとう。おかげで勝つたわ。」絹子はうれしくつて／＼なまりません。

「今度太田さん達の番れ。リレー？」

「え、そう！」

「しつかりやつてれ。」と、一生懸命にがんばりました。

「応援して下さい。」
「勿論よ！」 絹子は見物席に戻つて來ました。

「もう初まるわ。」隣りの友へせかれてあわて、席につくと早や、太田さん達のリレーが手當をしてくれました。

「どうしました。膝をくじいたの？」急いで入つてゐたしつた受持の加藤先生は、びつくりしてお尋ねになりました。

「先生大丈夫ですわ。」太田さんは痛いので顔をしかめて、でも元氣に云ひました。

勿論白は敗れました。たつた一點の差で……負けた白の落膽……勝つた赤の狂氣の喜び。白組の誰もは一樣に太田さんをうらみしました。（けれど……太田さんが悪いんぢやないのにそんな無理を云つたつて）絹子は心の中で一心に辯解してゐました。控室では右足の膝を直白に綁帶で巻いて、太田さんは淋しさに笑つてゐます。

「大丈夫よ。敗れたつて貴女が悪いんぢやないわ。又來年勝てばいい事よ。勝負は時の運よ。」だつて來年は吉田さんは卒業なさるんぢやありませんか！ 「卒業したつてきまよ。ホ、落第してゐるわ。」まあ。」

運動會は終りました。

（をばり）



夢見テタ

雁(賞)

東京 大木

實

七八
木ノハ

臺 安保ケイ子
(八才)

木ノハサラサラ

トンデユク

ドコヘユクカト

キイチミタラ

ヤツバリ

ダマツテ

トンデユク

お山の風

愛知 各務 貞八

お山の風は

寒い

竹藪小藪に

吹いてゐた

童謡

野口雨情選

(子供篇)

仔牛(賞)

千葉 小川

騨郎
(尊六)

ヨダレタラシノ

仔ノ牛ハ

今日モ枯草ニ

ネンネシテ

母サン牛ノ

仔犬(賞)

新潟 石川彌三次
(尊四)

ヨチ／＼かけて

とびつく仔犬

ワンと吠えれば

可愛いにな

うぐひす

東京 上田ふく子
(尊二)

おうちのうぐひす

かはいいな

ほうやほけきよと

ないてゐる

かごの中でないてゐる

わたしににんぎやう

みせても

やつぱりやつぱり

ないてゐる

おうちのうぐひす

かはいいな

小藪の雀も
寒かろな

かげ

兵庫 大西とし子
(尊四)

くろい／＼

かげんばし

からつこからつこ

げたのおと

くろい／＼

かげんばし

ひよこ

茨城 石川亮三郎
(十五)

ひよこが

なき／＼かけて来た

風におはれて

かけてきた

島の方から

かけて来た

土蔵

群馬 石田 武男
(十三)

白い土蔵に夕日が赤い

黒い鳥がなきながら歸る

いつもさびしい白い土蔵

にはごり

千葉 岩井 さく

枯草の中に

にはとりは

かげをながめて

たんぼ道

埼玉 小森谷筑吾
(尊二)

さむい朝

私がたんぼ道を通つたら

霜がたくさんふつてゐた

馬かたがさむそうに

馬をひいて通つた

雨あがり

山口 大谷 吉雄
(尊四)

雨あがり

ラヂオのせんが

ぬれてゐる

はとが三ばとんでゐる



ひよこ

遊んでた
草をわけては

ひよこ

またわけて

さむそにならんで

遊んでた



漂流二百三十日

久米 舷一

岩岡とも枝 畫

(前編までの梗概)

カザロンと云ふ人が、帆船に乗つて大西洋の真中に居ました。すると、船底の積荷の中から、火事が起つたのです。船長のカーチスは、降付いた人でしたから、なんとかして消しとめようとしたが、もう手遅れでどうする事も出来ません。とうとう火は、甲板まで燃え上りました。乗組員一同は、火に焼かれて死ぬか、水に溺れるか、どつちみち助かる見込みはありませんでした。

一、もう駄目です

私はその晩の恐ろしい光景を、どうしても、忘れる事は出来ません。チャンセラー號は火を吞みつたまゝ、波のまにゝ大海原を漂よつて行きました。風がないので、火は真直ぐに燃えあがつて、その先は殆んど橋の頂上まで達しやうとしてゐます。船の周囲何哩の海上は、あかゝ

と焰を照りかへして、真晝間のやうに明るく見渡されました。

『カザロンさん。もう駄目です。最後の時が来ました。』

と云ふ聲に、私は振りかへつて見ますと、其處には船長のカーチスが立つてゐました。カーチスの日にやけた顔には、悲痛な色が浮んでゐました。

私は、いよく最後の時が來たと覺悟しました。私は、オド／＼とする胸を押へながら、わざと平氣を粧はつて、何か戯談を云はうとしましたが、唇が硬ばつたやうになつて、聲が出ませんでした。丁度其時、船は急に何かに突當つたやうに、ズシンと烈しく前後に揺りかへされました。と同時に

に、船はビタリと進行を止めてしまつたので、私は轉み食つて、危く倒れさうになりました。

一體どうしたと云ふのでせう。チャンセラー號は、今、暗礁に乗りあげたのです。暗礁は、右舷の方にあつたと見えて、船は見る見る内に、左の方へ傾いてしまひました。

『挫礁！挫礁！』と叫ぶ水夫の聲が聞えました。

『船長！船長はゐないか？』と烈しく呼ぶ聲は、二等運轉士のスコットらしい。

『此處にゐるよ。スコット。何か用か？』

『船長！我々は助かりました。助かりました！』

と云ふスコットの聲は、いかに嬉しさうでした。

船が挫礁して、何が嬉しいと云ふのでせう。併し、私は直ぐに、その意味を悟る事が出来ました。暗礁にぶつかつた爲に、船腹に大きな穴があいて、そこからどんどん、海水が浸入しはじめたのです。

カーチスは、船縁からズット身を乗りだして、何かにちい／＼と耳を澄してゐるやうでした。やがて私の方を振りむいて、

『カーチスさん。我々は助かりました。なんと云ふ有難い事でせう。海水がエライ勢で船底へ這入つてゐます。あれ、あの音をお聞きなさい。ね、カーチスさん。火事はも

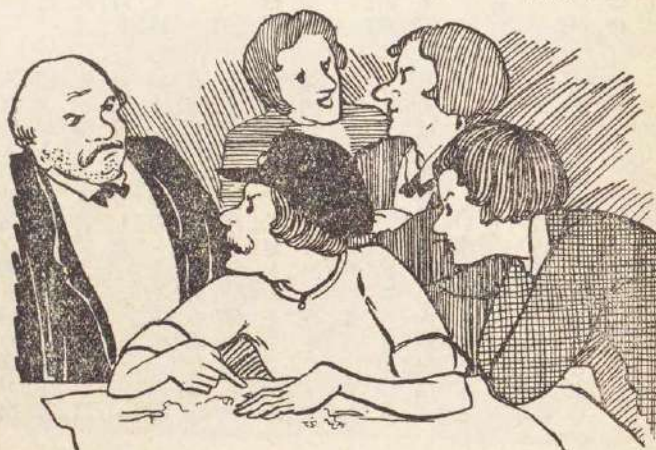
「此の所五六時間を出ない内に、残りなく消えてしまふでせう。」
私はそれらの言葉を、夢のやうな氣持で聞いてゐました。併し、何故だか少しも嬉しくありませんでした。恰度、永い間苦しめられて來たものが、急に何かの恵みを與へられたとき、それに向つて反抗してみたいやうな氣持になるのと同じでした。
『だが、船長。折角火が消えたところが、今度はその穴から這入る水のために沈没してしまふぢやないか。』
と、私は餘計な事を云ひました。それを聞いた船長は、一寸不愉快さうな顔をして私の顔を見詰めてゐましたが、やがて、

『カザロンさん、そんな事を仰しやるものぢやありません。現在苦しんでゐるこの恐ろしい火事を消して戴けたら、こんな結構な事はないぢやありませんか。』
と云つて、スコットとともに、船首の方へ驅けて行きました。私はその言葉に、始めて我に還りました。なるほど、カーチスの云ふ通りです。それに違ひありません。先の事はともかくとして、我々は現在この恐ろしい火事を消して戴いた事を、厚く感謝しなければなりませんでした。

二、船は今何處にあるのか
火は次第にその勢ひをゆるめてきました。

八二
焰は黒煙と變り、その黒煙も、だん／＼と白い湯氣のやうな色に變つてきました。天然の波濤は、我々が到底なし得なかつた素晴らしい消火の役目を、易々と果たしてくれたのでした。
兎角する内に、次第に夜が明け放れてきました。と同時に、だんだんと潮が引いて行くらしく、船の周囲のゴツ／＼とした暗礁の頂が、波の上に現はれてきました。
我々が先づ何よりも先に知りたかつたのは、チャンセラ一號の現在の位置でした。船は一體、大西洋のどのあたりをウロついてゐるのか、それが何よりも先に知りたかつたのです。
十時頃になると、幸ひ太陽が雲

間から顔をだしました。カーチスは、直ぐに太陽の高さを量りはじめました。大洋を航海する總ての船は、太陽の高さによつて、船の位置を知ることが出來たのです。
カーチスの廻りには、船客連中がグルリと取り巻いて、心配さうな顔をしてゐました。陸地に遠いか、近いか、それによつて吾々の運命は決まるのです。
やがてカーチスは計算を終つて、
『船は今、北緯十八度二十分西經五十二度三十分の所にあります。』
と、報告しました。



八三
『そんな事を云つたつて分らない一體、陸地へ近いのか、遠いのか？』
と云つたのは、キヤー氏と云つて、紐育の大金持でした。キヤー氏は、デブブリと肥つた、いかにも私は金持でございと云つたやうな、傲慢な顔つきをした男でした。
この時も、赫ら顔に栗鼠のやうな眼を光らせて、兩手をポケットに突込んだまゝ、
『カーチス君。もつと素人にも分るやうに云つて呉れたまへ。陸地へ近いのかそれとも遠いのか？』
その言葉が餘りに豪さうぶてゐるので、カーチスもムツとしたらしく、

「遠いですよ。」

と一言、素気なく答へました。

「遠いッて、どれほどあるんだ。」

キヤー氏は、蛙のやうに口をへんの字に結んで、胸を突出して訊ねました。

カーチスは暫くの間黙つて、一言も返事しませんでした。が、やがて思ひ返したやうに我々の方を向いて、

「此處から一番近い陸地は、南米のグアイアナです。それにしても、まだ八百哩ほどあります。」

と答へました。(南米の地圖参照)

「八百哩!」

皆は互ひに顔を見合はせて、一言も口をききませんでした。この破れ／＼になつた船で、どうして

八百哩もの波濤を乗り切る事が出来るませう。皆はカーチスの次の言葉を見守りました。

「まづ、私の考へとしては、引潮の時を利用して、船底の穴を修繕ふのです。それから積荷を残らず海へ棄て、船足を軽くし、次の満潮の時を狙つて海へ乗りだすやうにすればよいと思ひます。こんなボロ船でも、天候さへよかつたならば、八百哩ぐらゐの航海は、さして六ヶしい事ではありますまい。」

カーチスのこの言葉に、皆はホツと、安堵の胸をなでおろしました。やがて水夫達一同と、船客の中

の男連中は皆、船底へ降りて行きました。

船底の火は、もう全く消えはてて、その代り、約五尺ほどの深さに海水が溜つてゐました。

我々はカーチスの指圖の下に、或者は水浸りになつた荷物を海へ棄てたり、或者はポンプを働かせて船底の水を汲みだしたりしました。

又一方、船大工達は、丈夫な鐵の板を持つてきて、暗礁のために突破られた、船腹の穴を塞ぎました。

幸ひこの二三日は風もなく、海は極く穏やかでしたので、仕事は着々と進行しました。そして遂に三日目のお晝頃、チャンセラ一號

又水が這入つて來たぞ。」

叫んでゐるのは水夫のオレデイーでした。

私はがばと跳ね起きて、大急ぎで船底へ行つて見ました。

なるほど、船底には再びドス黒い水が、ヒタ／＼と押寄せてきてゐました。空樽や木片が浮びあがて、それが、船の動搖につれて、あちらこちらと、流れ歩るきました。カーチスはその中に、膝のあたりまで水に浸つて、眞青な顔をして立つてゐました。

「船長。どうしたんです。何處から水が這入つてくるんです? 元の穴からですか。」

私は言葉せわしく問ひかけました。

は満潮に乗せられて、やすやすと大海へ浮び出る事が出来ました。

人々は皆甲板に跳いて、感謝の祈りを捧げました。

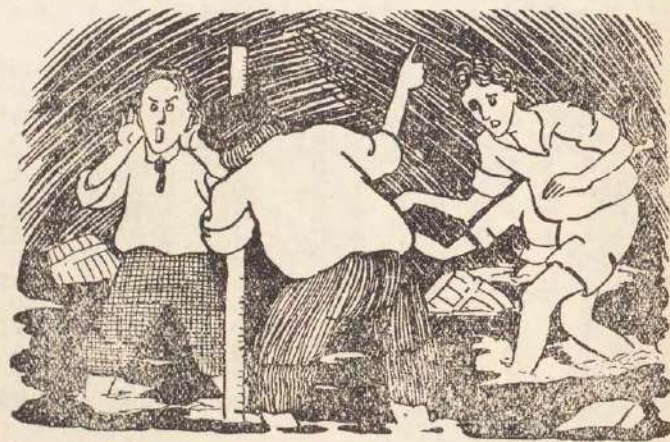
三、再び水が

漏りはじめた

ほどよい北東の風が、ソヨソヨと吹いてゐました。チャンセラ一號は穏やかな海の上を、滑るやうにグアイアナに向つて進んで行きました。

ところが、それから一週間の眞夜中の事です。私はふと、けた／＼ましい叫び聲に夢を破られました。

「大變だ。皆んな早く來い。」



「それがよく分らないんです。カザロンさん、穴が大分大きいと見えて、えらい勢ひで水が増えています。お聞きなさい、あの音を。」私は云はれる通り、耳を澄ませました。すると何處からともなくゴボク、ゴボク、と云ふ水が湧き出てくる音が、聞えてきました。

「ボンブに懸れ！」

カーチスの聲に、皆は一齊にボンブに取りつきました。私もシャツ一枚になつて、その仲間入りをしました。暫くの間、船底はヒツソリとして、たゞボンブの安全弁の音と、瀧のやうに吸ひあげられる水の音のみが聞えました。カーチスは、手に目量のついた

棒を持つて、船底の水の深さを量つてゐました。

一時間——二時間——私はもう疲れはて、腕が抜けるかと思はれるほどになりました。二等運轉士も、息をはずませながら、「どうだ、船長。いくら減つたか。」

と、訊ねました。

併し、カーチスは、黙つて首を振りしました。

「駄目だ。一臺では足りない。炊事場のボンブも持つて来い！」やがてボンブは二臺となつて、盛んに動き始めました。併し、それにも拘はらず、水はどんく／＼と増す一方です。たうとう夕方になつた頃には、水の深さ

は四尺と云はれるまでになつてしまひました。

私は、腰のあたりまで水に浸りながら、殆んど泣きたしいやうな氣持で、たゞもう機械的にボンブを動かしてゐました。

四、水夫の暴動

日が暮れました。

水は刻一刻とその量を増して、我々の乳のあたりまで浸すやうになりました。

その時、私の向ふ側に働いてゐた五人の水夫が、何か互ひに眼配せをし始めました。私が「變だな」と思つた途端、五人はいきなりボンブから手を離して、申し合はせように、サツサと甲板へ上つて

しまひました。

カーチスは驚いて五人の傍へ歩み寄り、

「どうしたんだ。何故ボンブから手を離れたんだ！」

と、言葉鋭く詰めよりました。

五人の水夫の一番前に立つたシンクストロップは、傲然と肩を聳やかしながら、
「船長。俺達はまだボンブなんか御免蒙ります。」

と、云ひ切りました。

カーチスは黙つて、ちい／＼と、相手の顔を睨みつけました。すると、シンクストロップも負けずに、カーチスの顔を睨みかへしました。



このシンクストロップと云ふ男は、普段から何か胸に工らんでゐるらしく、四人の水夫を自分の仲間に入れて、今、謀叛を起したのでした。

「シンクストロップ。もう一度云つて見ろ。」

「何度でも云ひますよ。俺達は今、もうボンブなんか御免蒙むるツて云ふんです。俺達五人は、今日限りお暇が貰ひたいのです。」シンクストロップは、胸を突出して云ひました。

見棄てられたボンブは、一方の取柄を高く空中にあげたまゝ、次第に増してくる水の中に浸つてゐました。

(つづく)



お稻荷さん

西川 喜平

寺内 萬治郎 畫

八八

江戸の横山町に、萬尾徳兵衛と云ふ、小間物を商賣とする男がゐました。

この徳兵衛は年頃、稻荷を信仰して、自分の住んでゐる町内の稻荷を始め、江戸町中の稻荷と云ふ稻荷は、參詣をせぬところもないくらいでした。

始めは稻荷を信心しては、商賣に精を出してゐたので、店もますます繁昌し、身代もよくなつて來ま

した。

そこで世間の人は、

「徳兵衛さんは、お稻荷さまを信心してゐる御利益で、福運が向いて來たのだ。」と噂をするので、徳兵衛はこれを聽いて獨りで喜んでゐました。

その中にだん／＼、稻荷の社へ參詣に廻るのが面白くなつて、毎日／＼稻荷詣りをしては、ソレ鳥居だ、ヤレ水鉢だと、奉納して歩行くので、商も少くなり折角繁昌した店も、さびれるやうになりました。

それでも、

「お稻荷さまの御利益で、今にウント仕合のいゝ事が向いて來るぞ。」と、口ぐせのやうに云つてゐました。

ところが中々いゝ事が向いて來ず、だん／＼お金に困つて來ました。

徳兵衛はある日の朝早く起きて、

「いよ／＼御利益で運がくる時節が來た。」と獨言を云ひながら、ニコ／＼して家を出かけました。

徳兵衛は、淺草の觀音の境内を通り抜け、待乳山の下から隅田川の岸へ出て、今戸橋の渡し場へ來ました。

朝早いので、渡舟へ乗る客も少ないので、舟の上でブカ／＼煙草を吸つてゐる船頭に向つて、
「船頭さん、今朝この渡しへ、六十ばかりのお婆さんは見えませんか。」と、訊ねました。

「エ、まだ、そんなお婆さんは見かけませんよ。」と云ふ船頭の言葉を聽いて徳兵衛は、

「有がたい／＼、まだおいでにならないと見える。」と云つてゐる所へ、山谷堀の方から、白毛交りの髪を小さい丸まげに結つた、デブブリと肥つたお婆さんが、風呂敷包を持つてスタ／＼渡し場の方へ來ました。

徳兵衛は見るなり、お婆さんの前へ出て、

「モシ／＼チヨットお伺ひいたします。」と、丁寧に頭を下げました。

お婆さんはへんな顔をして、

「へいなんでございます。」

「あなたさまは、モシヤお稻荷さまのお使ではございませんか。」

「へい／＼おになりさうでございます。」

「ア、有がたい。さつきからお待ち申上げてをりました。」

八九



九〇
お婆さんは不思議さうに、徳兵衛の顔を見て、
「モシヤ人違ひではありませんか、わたしは田町に
をります。」

「ア、袖すり稻荷さまで。」

「へい、あのそばに住んでをります、おこんと申す
婆で。」

「いよ／＼違ひない、サア／＼こちらへおいで下さ
い。」と徳兵衛は、お婆さんの手を取つて、連れて行
かうとしました。

お婆さんはビツクリして、

「旦那／＼、こんな婆さんをどうなさるのです。わ
たしはこれから急いで三圍のおやしきへ用があるの
で。」

「ナニ三圍のお社へ、どうかその御用はお後にして
……サア／＼私の宅まで、おいで下さいまし。」

お婆さんは、氣違ひかと思ひましたが、さうでも
ないらしいので、

「一體あなたはどちらの方で。」

「アッ申おくれて相すみません。私は横山町に居り
ます。萬屋徳兵衛と申す者で、定めてお仲間のお噂
にもなつてをりませうがお稻荷さまが大の信心で、
ゆうべお稻荷さまが夢枕にお立ちで、今日今午の渡
し場でお待ち申せ、お年の頭六十ぐらゐのお年寄り
がおいでになる、そのお方をおつれ申して、お願ひ
をすれば、望む事を叶へてやるとの有がたいお告げ
なので、お迎ひに参りました。」と云ひました。

このお婆さんは、田町の裏長屋に住む、獨り者の
おこんと云つて、稻荷すしを商賣にしてゐるので、
今日は彼岸なので、向島のとくみからの、詠の稻荷
すしを持つて行く途中でした。

お婆さんは徳兵衛の云ふことを聴いて、氣違ひで
はなかつたかと、ホツト安心すると一緒に、フラフ
ラと慾が出ました。

「この旦那はお稻荷さまの信心で、わたしをお稻荷

さまと間違へてゐるのだから、イッソこの人の云ふ
なりに、お稻荷さまのお使になつて、一緒に行つた
らわるい事もなからう。」と心の中で思つたので、
「エヘン、わたしは今迄お前さんの心をひくために
かくしてゐたが、實は稻荷大明神のお使ですよ。」

徳兵衛は喜んで、

「さつきからのお話しのやうすで、わかつてをりま
す。サア／＼お供をいたします。」と徳兵衛は駕籠を
雇つて、お婆さんを家へつれて歸りました。

徳兵衛はお婆さんを、お稻荷さまのお使と思ひ込
んでゐるので、家へ歸るなり／＼の御馳走をし
て、機嫌をとりました。

やがて徳兵衛は、お婆さんの前へ手をついて、町
亭にお辭儀をしました。

「エー今日は見苦しき宅へおいでを願ひましてまこ
とに恐れ入り奉ります。昨夜の夢のお告に従ひまし
て、お願ひを申上げ奉ります。」と云ひ出しました。

お婆さんは、お願ひをすると云ふからは、ウマク言葉（ことば）を合はせて、お金（かね）でも品物（しなぶつ）でも貰（もら）はうと、
「お願ひはなんなりとお聞き届けいたします。それにつきお初穂（はつと）なり、お賽銭（さいせん）なりをお納めなされませ。」

徳兵衛はまた頭（あたま）を下げまして、

「そのへんのことは萬事承知（ばんじしやうち）いたしてをりますが、實（じつ）はまことに申し上げにくいので、今朝（けさ）お供（とも）をいたして参（まゐ）りました駕籠賃（かごぢん）、また只今（ただいま）の御馳走（ごちそう）の料理代（れうりだい）になけなしの金（かね）を皆（みな）な出（だ）しましたので、何卒（なんぞ）、日頃（ひぐら）の御（ご）ひびきをもちまして、御勘辨（ごかんべん）を願（ねが）ひ上げ奉（たてまつ）ります。」と顔を真赤（ましか）にして云（い）ひました。

これを聞いたお婆（おば）さんは、思（おも）つてゐた當（あた）がはづれたので、目（め）を丸（まる）くして驚（おどろ）き、また眉（まゆ）を八（や）の字（じ）にしてガツカッした顔（かほ）になりましたが、頭（あたま）を疊（たた）に摺（す）りつけてゐる、徳兵衛（とくべゑ）には見えませんでした。

徳兵衛（とくべゑ）は懷（なつ）から出した手拭（てふき）で、額（ひたい）の汗（あせ）を拭（ぬ）きなが



ら、

「お願ひ申し上げ奉（たてまつ）りまするのは、今日（こんにち）お金（かね）が是非（ぜひ）非入用（ひによう）でございましてので何卒（なんぞ）お聞き届けの上（うへ）、お授（さづ）けを願（ねが）ひ上げ奉（たてまつ）ります。」

お婆（おば）さんは、こまつた顔色（かおいろ）で、

「この頃の不景氣（ふけいき）で、お稻荷（いなり）さまもお手元（てもと）がおさみしいので。」

「へへッ、恐れ入（おそ）り奉（たてまつ）ります。正直（しやうじき）に申（まう）しますと、先頃（さきごろ）から商賣（しょうばい）がだん／＼なくなり、店（みせ）がさびれて参（まゐ）りましたので、借金（かきん）をいたしましたのが、積（たか）りに積（たか）りまして、今日（こんにち）はどういたしても、返（かへ）さねばなりません、昨晚（さくばん）もア、金（かね）が欲しい、こういふ時（とき）こそ日頃（ひぐら）信心（しん）するお稻荷（いなり）さまにお助（たす）けをいたさうと、一生懸命（いっしやうけん）に願（ねが）つて眠（ねむ）りますと、有（あ）がたい夢（ゆめ）のお告（つ）告（こ）、どうかおかけ引き（かけひき）のないところで、お金（かね）をお授（さづ）け願（ねが）ひたいので、もしお手元（てもと）の御都合（ごごうごう）がおわるければ、おこんさまのお通力（とつりき）で、お金（かね）を一寸（いちゆん）でもお見（み）せ下（くだ）され

ば、先方（せんぽう）へ手渡（たてまつ）りの後（のち）、木の葉（は）になつても苦（くる）しう御座（ござ）いません。お慈悲（じ）をもちまして、お助（たす）けを願（ねが）ひ申（まう）上げ奉（たてまつ）ります。」と徳兵衛（とくべゑ）は涙（なみだ）をボロ／＼こぼしながら、頭（あたま）を上げて見（み）て、ハッ（と）と驚（おどろ）きました。
今まで前（まえ）にゐた、お婆（おば）さんはいつの間に、消（き）えたのか、逃げたのか姿（すがた）が見（み）えず、跡（あと）には風呂敷包（ふろしきづつみ）が一つ、残（のこ）つてゐるばかりでした。

徳兵衛（とくべゑ）は、顔色（かおいろ）を變（か）へて、

「お稻荷（いなり）さまのお使（つか）のお姿（すがた）が、消（き）えてしまつたところを見ると、願（ねが）ひが叶（かな）はないのか、しかし夢（ゆめ）のお告（つ）告（こ）に虚言（うそ）はないはず、この風呂敷包（ふろしきづつみ）を、置いておいでになつたところを見ると、この中（なか）からお金（かね）でも出（で）るのではないか。」

とまたニコ／＼しながら、風呂敷包（ふろしきづつみ）を開（ひ）けて見（み）ると、竹（たけ）の皮包（かわづつみ）みに、一杯（いっぱい）稻荷（いなり）ずしが入（はい）つてゐました。

（を は り）



白帆の唄

小城庄一

寺内萬治郎畫

〔前説までの梗概は一三四頁にあります〕

それから幾日経ったか、春之介はまるで知りませんでした。唯夢の様な氣持で小舟に揺られて浪の上を漂つてゐたのです。そして、ふと氣がついた時には、見知らぬ室に寝かされてゐて、枕許には神々しい白髪の老人が坐つてゐるのです。

「お、氣がついたか。」
老人はニッコリして言ひました。併し少年はまるで狐にでも化かされてゐる様です。

「此處は何處です。そして貴方はどなたですか。」

「此處は紀州の人里遠い海岸ぢや。わしはずつと昔から此處に住ひしてゐる陀羅尼仙人といふ者だが、

今朝お前が小舟に乗つて流されて來たので、救ひ上げて介抱してやつたのぢや。氣分は少しはよくなつたか。さあ此處に藥があるからお上り。」

老人は優しく言つて、小さな丸藥に湯を添へて差し出しました。ぐつとそれを飲みほすと、不思議に少年の頭は爽やかになつて、次第に身體の疼きも止んで來ました。

「有難う御座いました。御恩は忘れません。」

少年は丁寧に頭を下げたお禮を申しました。そして悉しく今までの身上を老人に話しますと、老人は大變哀れがつて、

「それは可哀想な事ぢや。よし／＼、暫く此處に居て又探しに行きなさい。けれ共お前見た様な子供が一人で旅をするといふのは危い事ぢや。今からわしがお前に劍術と忍びの術を一通り教へてやらう。それを學んでから行くがいい。」

と言つて呉れましたので、春之介も非常に喜んで、

身體がすつかりよくなると、毎日老人の爲に水を汲んだり、肩を揉んだりしてその側ら種々な武術を慣ひ覚えしました。併しその間、一刻として父の事、姉の事を忘れる暇はありません。

一年に近い月日を、淋しいその海岸でたつた二人暮してゐる中に、春之介はもう凡そ一通り劍術も出來、忍びの術も使へる様になりましたので、或日仙人の前に出て、

「お師匠様。長い間色々深い御情けを受けましたが、もう私も一人で旅をしても滅多な事もあるまいかと思ひます。つきましては、明日からお暇を下さいますんでせうか。」

と言ふと、陀羅尼仙人は意外にも額に青筋立てて怒りつけました。

「馬鹿者、貴様位の腕前で一人立ちが出來ると思ふか。俺の親切を無にして我儘を申すと承知せぬぞ。」

「いいえ、けつして左様な譯ではありませんが、一

刻も早く父や姉に遭り合ひたいと思ひますので。」
「つべこべ申すな。師匠の恩を忘れた憎い奴、その



分では置かぬぞ。」

といふより早く、老人は手許にあつた長い杖で春之介の頭を目掛けて撃ち下しました。この杖を真向に受けたら耐りません。頭は割れて息が絶えて了ふのです。ハツと思つた春之介は、身を躲す暇もなく右手を上げて、人差指と中指との間でビシリと受止めて了ひました。するとどうでせう。さしに強い老人が引いても押しても杖はびくとも動きません。『美事〜』老人は吾を忘れた様にうつとりと叫んで『よく上達した。その呼吸を覺えたら、どんなに真剣で不意撃ちを喰つても、立派に相手に勝つ事が出来るのちや。よし、お前の腕前に免じて明日から旅に出してやる。』

「ハツ、有難う御座います。」

春之介は兩手を仕へて歎びの聲をあげました。
いよ／＼翌日から春之介少年は、老人の許を離れて、一人大阪の方へ向つて旅立つ事になりました。

「これから熊野の浦に沿ふて陸地をすつと歩いてゆくと間違なく大阪に出るから、充分氣をつけて行きなさい。もう二度とは會へまいからな。」
老人は静かに言ひました。危い生命を助けて貰ひ、その上に長らく養はれて来た大恩ある老人に、今日限り別れて了ふかと思へば、春之介の胸は吾知らず熱くなつて来て、

「では御師匠様も、どうぞ御達者で……」

と言ふ聲も涙に曇るばかりでした。
浅みどりに澄んだ春の空に陽は高く輝いて、遙かの水平線に浮ぶ白雲の色も、蛙に碎け散る浪沫の音も、静かな愁をふくんで見えました。そして岩陰の小屋を見返り／＼歩み去る少年の心は何時か知らず哀しみにとざされて、とどなく涙が流れ落ちました。

熊野浦に沿ふて路を辿つて来た春之介少年は、幾日目に立派な神社の前に出ました。これは熊野神社といつて、源平の昔から名高い所で、よく此處に荒法師達が修道の爲に參詣するのです。
夕暮も近いし、兎に角今夜は此處の拜殿で過さうと少年は足を止めて、恭や／＼しく神威を伏し拜み、さて石段の所に腰を下ろして、四邊の景色に見とれてゐました。その中に日が暮れたので、拜殿に這入つて寝て居ますと、ふと怪しい足音がして誰か堂の近くに來た様子です。その中にひそ／＼と話す聲が聞えて來ました。

「もう間もなく來る時刻だ。此の社で手分けをして海へ押し出す手配りださうだからな。」

「ハハハ……馬鹿な奴等だ。こちらでちやんと待つてゐるとは知らないで……。そしてそいつ等は一體何人だ。」

「たつた五人だよ。もつとも海岸には澤山隠れてゐ

るらしいが。」

「よし、五人共此處で種ヶ島でやつつけてしまへ。」
何の事が判りませんが、大勢の足音で拜殿の周りに隠れた様子です。春之介は習ひ覺えた忍びの術で音のしない様に拜殿をぬけ出して、凝と四邊を見てゐました。

折から森の上にさし上つた月が清らかな光りを放つて、社の庭を照らし出しました。暫くはその蒼い月の光りと、ヂヂと鳴く蟲の聲ばかりで何の物音も聞えませんでした。やがてサク／＼と土を踏む音に續いて二人の武士が向ふから姿を現はしました。拜殿の前まで来ると立止つて、

「未だみんなやつて来ないな。」

「遅いね。」などと話をしておきます。

其中にまた反對の方角から三人の武士が急いで来ました。

「やあ。」「やあ。」挨拶を交して何か小さな聲で相

で待伏せしてゐたものと見えます。

役人達は一生懸命に戦つてゐますが、何しろ多勢に無勢です。次第に負色立つて、一人倒れ二人殺され、後の三人も手傷を負つて非常に苦しさうです。事情がわかると、春之介はもうじつと見てゐる事が出来なくなりました。いきなり物陰から飛出して、賊共の後ろから斬りかけました。

「それ邪魔者だ！」

「そ奴から先にやつて了へ！」

賊共は口々に叫んで、今度は春之介を目標して打つて掛りましたが、陀羅尼仙人に一年の間鍛えて貰つた武術の極意を表はすのは此時とばかり、少年はさながら猿の様に飛び廻つて斬つて廻るので、見る見る間に大の男十八ばかり傷を受けて逃腰になつて了ひました。少年は一層勇氣をふるつて戦ひます。

「手剛いぞ。」

「天狗の化物だ。」

談でも始めたのか、額を集めた時、ドーンといふ大きな響と共に四邊一杯白い煙りが立昇りました。そして煙りの中から大勢の變な様子をした荒くれ男共が手に／＼刀を引抜いて走り寄つて来ます。

すると、撃たれた様に見えた五人の武士達は一度地に倒れてゐたのが、俄かに起上つてこれも刀を抜いて身構へました。そして口々に、

「おのれ憎い海賊奴等、役人に及向ふと片端から斬り殺すぞ。」

と喚きますと、荒くれ男共も負けずに、

「何を木葉役人、貴様達の計略にかかる様な俺達ではないぞ。さあ、あべこべに殺してやるからさう思へ。」

と、叫んで打掛りました。

物陰から様子を見てゐた春之介には始めて、事の仔細が解りました。此近所を荒らす海賊を捕へる爲に來た役人達を、海賊がいち早くかぎつけて、此處

見かけの小さい割に餘り素早しくて強いので賊共はすつかりおじけついて、そんな事を言出して、とう／＼逃げ去つて了ひました。

「あゝ面白かつた。」

少年は血刀を提げた儘愉快さうに笑つて月を見上げました。僅かの間に吾れ乍ら素敵に強くなつたのだ。これもあの老人のお蔭だが、若しこれだけの腕前が一年前の自分にあつたなら、見す／＼姉を奪はれる様な事もなかつたらうに——と少年の胸には又しても、さうした考が浮んで來るのです。

「どなたかは知らぬが、危い所を助太刀して戴いて何とも御禮の申様が御座らぬ。」

ふと後から聲をかけられて振り向いて見ると、血潮を浴びた土の一人がそこに兩手をついてゐます。

「おお、これはお役人様、まづ御無事で何よりです。して外のお方は？」

「あの通りもう息も絶え／＼……」

士は後ろを指しました。成程松の根方に倒れた二人の武士は、数ヶ所の傷に身動きも出来なくなつてゐます。

「しつかりして下さい。」

春之介は抱き起して呼んで見ましたが、返事をする元氣もなく、唯口惜しげに齒を喰ひ縛つてゐるだけでした。

「とても駄目です。」

少年はがつかりした様に云ひました。士は暫く二人の名を呼んでゐましたが、やがてこれも諦めたと見えて、

「仕方がない。」と、ほつと思ひました。

兎角長居をしては又賊が引返して来るかも知れないといふので、四人の死骸はそこに打捨てて、役人の武士と春之介少年は、月光の中を海岸の方へ引上げてゆきました。

三



會つたのだした。」

役人の語を聞いてゐる中に、春之介少年の心にふ

一〇〇

春之介が役人に連れられて海岸のとある岩陰まで来ると、そこには二艘の舟が待つてゐて、中には大勢の役人の部下が乗つてゐました。

「どうしたのです？」

血潮にそまつてゐる士の姿を見ると、みんな口々に言ひました。

「残念乍ら海賊共の計略にかかつて、熊野神社の境内で急に襲はれ、外の者はやられてしまつた。わしもこのお方に助けられて、やつとここまで逃げのびて來たのだ。」

士は息をはづませて、今しがたの様子を話して聞かせ、春之介に改めてお禮を申しました。

「實は私は大阪港のお船手役人で、水澤文之丞といふ者ですが、今度「赤格子」といふ海賊の一隊が大阪から紀州の方に逃げて行つたので、外の役人と手分けして此處まで追駈けて來たのです。ところがどうしても何處へ行つたか判らぬので、今夜外の人達

と浮んで來たある考がありました。それは、若しかすると姉の峯枝がその海賊にさらはれたのではあるまいかといふことです。又いつぞや、臘懸兵衛から「あなたのお父様は海の上にある。」と言はれた事が、何となく海賊などの群と、關合がありさうに思はれてなりません。

思切つて春之介は、その水澤といふ役人に何もかも打明けて、一緒に海賊退治に連れて行つてくれる様に頼んで見ました。

「承知しました。お安い御用です。あなたの様な腕の立つ人がゐると、却つて幸かも知れません。」

役人は快く少年の願を聞き届けてやりました。間もなく舟は岸を離れて沖合に出ました。外の役人の舟も此の近所にある筈ですが、離れ々になつたので今から捜しに出かけるのです。

舟の中で春之介は水澤文之丞から、「赤格子」の話をして聞かされました。赤格子といふのは、

一〇一

九州の北から中國四國紀州にかけて、たくみな手段で商船や大名の船などを襲つて金銀財貨を掠め取る非常な強い海賊で、乾分も大勢あり舟も澤山持つてゐて、總大將の乗つてゐる大船の甲板には、朱で美しく彩つた真紅な格子が見えてゐるといふのです。それが近頃突然大阪の港に姿を現はしたので、御舟手役人といつて、重に海の上を守つてゐる役人達が、大騒ぎで捕へ様としましたが、いち早く紀州の方に逃去つて了つた爲め、かうして後を追駆けて來たものでした。

二人が色々船室で話をしてゐる時、けたたましい銅鑼の音が甲板の上で響きました。それに續いて「赤格子だ！ 赤格子だ！」と呼ぶ喧しい人聲に、水澤文之頭はさつと顔色變へて起上りました。

「それ、今の話の海賊奴が出て來たのだ。さてはいよ、此舟を襲つたものと見える！」

さう言ふと刀を揃んで、あはてふために甲板に出て行きます。春之介も遅れずに出て見ました。するとどうでせう。晝の様に明るい月光の海上に幾十艘とない小舟が、あちらの島影、こちらの島影から漕ぎ出して來て、此の唯一艘の舟を取巻いてゐるではありませんか。中に一きは目立つて大きな船の上には、炎々と篝火が燃立つてゐます。そしてその火の光りに、はつきりと浮き出てゐるのは、朱塗りの美しい格子です。格子の上には一人の男が立つてゐます。手に大きな赤旗を持つてゐるのは、大方何かの合圖に使ふのでせう。

と、果して男は高く手をあげました。ひら／＼と旗が翻ります。同時に、幾十艘の小舟は矢の様に速く四方から漕ぎ寄せて來ました。

「皆舟べりに立て。上つて來る奴を片端から斬り落して了へ。」

水澤文之頭は大聲で部下に命令しました。



魔女の鳥

山本 二郎
枝 画

（前編までの梗概）支那の王様の宮殿は陶器で出来た世界に稀らしい立派なものでした。ところが或夜、不意に地震が起つて陶器の宮殿に大きなひびが出來てしまひました。王様は大層お嘆きになつて、元通りに宮殿をなほした者は、王女の御簾の御のお姫さんにするといふお振れを出しました。誰一人なほせる者がありませんでした。

この物語の主人公達麻も、このお振

れか聞きつけて都の御殿の方へ駆けつけました。途中で不思議なお婆アさんに出遇ひました。お婆アさんは魔女だったのです。達麻は魔女のために捕はれて、不思議な家の中へ連れて行かれてしまひました。

一、桃色の眞珠

達麻は、まだ縛られたまゝであました。魔女のお婆あさんは、

「よし、縛は今解いてやる。」

と云つて、小人の方へ、目くばせをしました。すると小人は、達麻の體をいはへた繩をすつかり、解いて、自由にして呉れました。達麻は、ほつとして、手足を二三度さすつてさて、大きな樽の一つを、こちらがさうとしましたが、何しろその樽は、何十貫もあるもので、押しても突いても、動かうとしません。達麻は、息をはずませて、

「お婆あさん、お婆あさん、僕には、とても出來ません。」と云ひますと、お婆あさんは、

杖を振り上げて、

『意気者め、出来なことがあつたのか！』

と吐りつけました。そこで、達磨は、も一度、お婆さんの前へ頭を下げて、

『お婆さま、私は、決して意気は致しません。然し、これは私の力に及びません。私の力でも出来ることなら、私は何でもいたします。』

と云ひますと、お婆さんは、達磨の、この可憐な挨拶が気に入つたらしく、ニツコリ笑つて身か屈め、

『よし、お前の首飾りをお取り。』

と云ひました。そこで達磨は、云はれた通り、真珠の首飾りを自分の首からはずして、お婆さんに渡しました。

『さあ、私のすることな、よく見てゐるんだよ。』

首飾りを受取つたお婆さんは、指の先でぐる／＼と、つまぐつてゐましたが、結び目のところまで繰と、それを、後にくちがつてゐた木製の櫛の縁の上へちよつと横た

りました。すると、その結び目についてゐる金の珠は、磁石のやうに、ビタリツと櫛の縁の上へ、喰ひついてしまひました。お婆さんは、真珠の輪か握つて、そろ／＼と引つ張りますと、櫛は、ころ／＼と、自然にころがつて、お婆さんの方へ引き寄せられました。

『お婆さん、その首飾りは、不思議な力があるのです。』

呆氣に取られた達磨は、お婆さんに云ひました。お婆さんは、眞面目な顔付きで、

『これはみな、眞珠の力なのだ。』

と、嚴かに云ひました。

『さあ、お前の仕事を、早くやれ。』

とお婆さんは、首飾りを、再び達磨の手に渡したもので、達磨は、今お婆さんのした通りに、今度は、首飾りの結び目を、重たい大きな櫛に、ちよ／＼廻りました。と、結び目は、カチリ／＼と音を立てました。そこで、そろ／＼とそれを曳きまゝと、さすがの重い櫛も、ゴロ／＼と音を立て、轉がり始めました。

真珠の首飾りの力を借りてさへ、その櫛はやつと達磨に動かせる程の、重さだつたのです。

達磨は、一生懸命で、やがて九つの櫛を全部、並べ終りました。其の時には、二人の大男は、又大きな駝をかい、柱に寄りかゝつたまゝ、眠つてしまつてゐました。

達磨は、それを見ると、疲れ切つてゐましたので、

『早くお婆さんが、懸ませて呉れないかな』と、美しく思つたのでしたが、お婆さんは、直ぐに又、次の用事を命じました。

『さあ、それが済んだら、今度は、階下へ来るんだ。』

お婆さんは、先に立つて、部屋を出て行きました。達磨は、大男達の寝てゐる前を忍び足にすり抜けて、洞の一方の、戸口の方へと歩いて行きました。お婆さんが、トンと軽る／＼杖の先で押すと、戸は音もなく開きました。

お婆さんは、其處から、庫の中へ進入つ

て行きました。そこには、吃驚する程、澤山の眞珠があるのです。その庫の中の壁には、一面眞珠の飾りつけでありましたが、それがみな、美しい花模様になつてゐるのです。天井からも、房のやうになつた眞珠が、重たさうに垂れ下がつてゐました。

ふと、部屋の隅つこの方を見ますと、其處には、天井から下がつた、寶玉の光で、青白く、氣味悪い色に照らされてゐましたが、恰度その光の落ちてゐる下に、一つの大きな籠があつて、チロ／＼と赤い火が燃え、その籠の前には、黒い小さな小人が立つて忙がしうに働いてゐるのです。

『あの一寸法師は、何をやつてゐるのだらう』と、よく見ますと、それは、小人の脚の細長い管の中へ、釜の中で溶かした眞珠を、流し込むのでした。そして、小人の足元には、眞珠が溶かし込んだ管が、キチツと揺れてゐてゐました。



れた、釜の中へ放り込んで、大きな杓子でかき廻してゐるのです。その忙がしさうな動き方が、何とも云へない利道化であつて面白いのです。眞珠は、釜の中へ投げ込まれると、

『ジュン、ジュン！』

と音を立て、溶けて行くのです。

小人は、今、お婆さんと達磨が、この庫の中へ進入つて来たことなどには、少しも気がつかない様子で、大きな杓子で釜の中へ突込んで、眞珠のどろ／＼に溶けたのを酌ひ上げると、それを自分の口へ持つて行きました。

そして、舌の先で、味つてゐましたが、満足さうな顔をして、傍の管を取ると、また、せつせと、管に詰め始めました。

お婆さんは、小人の後方へ廻つて、ボンと軽く肩を叩きました。小人は、振りかへつて、赤い、ピカ／＼光つた眼で、お婆さんを見て、ちよつとお驚かしましたが、片手に杓子を持つたまゝ、きよ／＼と立つてゐました。

『眞珠の詰まつた管を五本ばかりおかし。』

『はい、かしこまりました。』

むつとりとした調子で、かう云つた小人は、五本の眞珠の詰まつてゐる管を取つて、おばあさんに渡しました。

おばあさんは、今度は眞珠に、

『この管を持つてお出で。』

と云ひました。それから、さつと庫を出て、もとの大きな部屋へ連れて來ました。

おばあさんが、どんな用事を云ひつけるのか知らず、眞珠が不安に思ひながらついて行きますと、おばあさんは、その部屋の、一番端の方へ連れて行つて、そこで眞珠の手から、管を受取りました。

其の時、先刻挑いろに光つてゐたこの部屋の中は、いつの間にか、銀の様な、白い光に覆つてゐました。それは多分、夜が明けて、晝になつたからに違ひありません。

おばあさんは、眞珠の手から、管を取ると、柱のひび割れの中へ、その管の中の眞珠を詰め込み、それから、眞珠の首から、又首

『えいッ！ 何をぼんやりしてゐるんだ。』と云ふ大聲がして、眞珠は、ひどく肩先をビシヤリツと打たれました。

『この怠け者が、早くせつせとやらないか』おばあさんは、恐ろしい眼をむき出して、眞珠を睨みてゐたのです。

吃驚して、眞珠は、大急ぎで仕事の手を早めました。

かういふ風に、おばあさんが來なければ、その代りにあの小人が、一日眞珠の傍を離れずついてゐて、少しでも怠けたり、仕事の手を休めたりすると、直ぐに杖でひどく撲りつけるのでした。

部屋の隅では、大男達が、ぐうぐうと大騒

を聞いて、寝てゐるのです。その眞珠の聲を聞くと、眞珠は

『あの男達のやうに、軟らかい着物にくるま

つて、充分腹入つたら、何んなにいい氣持だ

らう。』

と、羨しくつて堪らなくなつて來ました。

眞珠は、くつき相になる眼を、無理に見開

飾りを外して、それを柱へ巻きつけました。

すると、その割れ目に詰まつた眞珠が、いつか自然に落ちて、柱の傷を、すつかり跡形もなく、なほしてしまひました。

すつかり、傷跡の消えた柱はまた一段と美しく見えました。あまりの美しさに、まるで夢のやうに、ほうと、かすんでさへゐるやうです。

『さあ、判つたらうれ。お前は毎日、この柱の傷れを、全部なほすんだよ。それと、息子達の、玉ころがしの遊びのお手傳ひをするのが、此處でのお前の仕事なのだ。では、一生懸命働くんだよ。怠けると、直ぐ此の杖が飛ぶんだから、そのつもりでやり。』

おばあさんは、さう言つて、杖の先で、コツコツと床を叩き鳴らしました。

『え、判りました。』

眞珠はおばあさんの、意地の悪さうな顔を見ますと、

『本當に據られては堪らない。』

と思ひましたから、直ぐ仕事に取りかゝり

いて一生懸命、仕事をつづけましたが、もう何うにも、たまたまなくなつて來ました。管の眞珠をつめるのを忘れて、柱へ首飾りを巻いて見たり、柱の模様を眞珠と間違へたりしては、ハツとしたことも、幾たびあつたか知れませんが、たうとうしまひには、頭がぼんやりして、耳が遠くなり、パツパツ床の上へ倒れてしまひました。

おばあさんは、眞珠が倒れたのを、冷めた顔つきで見えてゐましたが、靜かに眞珠の體に手をかけると、輕々と抱き上げ、あの大男達兄弟の寝てゐる傍へ連れて來て、そつと寝かせました。そして、小人に見張り番をさせて置いて、おばあさんはまた、階下の眞珠庫の方へ、コソコソと降りて行きました。

二、眞黒な怪鳥

幾時か経ちました。

『おい起きろ、起きろ！』

しわがれたおばあさんの聲に、ふと眞珠は目を醒ました。見ると、通りは又、もとの

ました。おばあさんのやつた通りに、小人の溶かし込んだ管の眞珠を、柱の傷を見付けては詰め込み、首飾りを其の上へ巻きつけて、傷をなほし始めました。それはほんたうに、不思議なほど、綺麗になほるのでした。

と、そのとき眞珠は、その仕事をしながらあゝの王様の陶器造りの宮殿の、大きな裂け目のことを、ふいに思ひ出したのでありました。

『この不思議な、小人のこゝへた眞珠の溶けたのを、うまく持ち出して、何とかしてもう一度家へ逃げて歸ることが出来たらなあ。あの御殿の龜裂は直ぐに修繕が出来るとがなあ。さうすれば、王様は何んなにお喜びになるだらう。それよりも、僕はさうして、お母さんを悦ばせ度いものだなあ。お母さんは、今頃何をしてゐるだらうに……。』

さう考へると、眞珠は、胸が一杯になつて、思はず仕事の手を休め、その場にぼんやりとしてしまひました。

薄紅色に染つてゐましたので、眞珠は、

『あ、又日が暮れて、夜になつたのだな』と、思ひました。

『さあ起きるんだ、起きるんだ。起きてお前の仕事をやるんだ。早くするんだぞ。』

意地の悪い聲で、おばあさんは云ひました。目を醒すと直ぐに、又あゝの柱の傷をなほしにかゝらねばなりません。端から端から、すつかり其れをやり終つた頃には、桃色の眞珠の光が、また薔薇の様に、明るく紅くなつてゐました。もう、とつぷりと日が暮れてたのでせう。

すると、今までは、ぐうぐうと寝てゐた大男の兄弟が、むつくりと起き上りました。起き上るや否や、大男達は、小端の様に元氣に飛び廻り、

『玉ころがし、玉ころがしだッ！』

と大きな聲で、どなり立てました。

『さあ、玉ころがしの用意はしたか。』

と兄の方が、眞珠に云ひました。

『はい、すつかり致しました。』

『よしッ、さあ前、では、始めやう。』

『さあ、始めろ。』
と、大男達は、大きな鐵の丸を擲んで、あの達麻が標的に運んだ樽の列から、少し離れて並ぶと、恐ろしい力で鐵丸を投げ始めました。その轟々しいことつたありません。

ゴロ／＼、ツシン、ドシン、ゴロ／＼と、雷の様な音を立て、その大きな丸は、四方八方に轉り廻るので、うつかりしてゐては、達麻の命が危いのです。

丸の轉がるのを除けて、達麻は、部屋中を逃げ廻りました。鐵丸は、柱にツシン／＼とあたつて、その度に、柱には傷がつき、眞珠の破片がバツと散るのです。

そのとき、小人とおばあさんは、部屋の戸口に立つて見物して居ましたが、時々、加勢するやうに、拍手をして、聲を擧げて笑ひました。

眞珠座の黒い小さな、そして赤い眼をした小人も、いつの間にかやつてきて、相違らずとばけた顔をしたが、その遊戲を關の方



から眺めてゐました。

丸は投げ出される度に、柱や壁にきつと大きな穴をあけた、ひ／＼割れを作つたりして、邊々全體を、地震のやうに震動させました。達麻は、折角骨を折つてなほした柱が、見る／＼もとの通り、傷だらけにされて行くのを見て、

『これは堪らない、毎日、毎日、この跡始末をやらせられては、全く閉口だなあ。』
と、呆氣に取られてしまひました。

『おい、小僧、樽を立てるッ！』
と怒鳴り、二人の大男は、疲れはてたやうに、息をはすませて、ドツカリと床の上へ樽を投げ出しました。達麻は、首飾りをはづして、この間、やつたやうに、その結び目を樽の輪に喰付け、ゴロ／＼と曳つづつて、九つの樽をすつかり、圓の印の上へ並べました。そして、部屋中にころころつてゐる十二の鐵の丸を、コチ／＼と拾ひ集めました。

『さあ、もう一審だ、来いッ！』
と、用意が出来ると、大男達は、又跳ね起きて、騒がしく、亂暴な遊びを始めました。

ゴロ、ゴロ、ガタン、ビシン、ドシン。
再び、崩れ落ちるやうな地震がつかゞきました。しかし、今度は、見る／＼うちに、九つの樽は、片つ端から、ドシン、ドシンと倒されてしまひましたので、都合に早く勝負は決まりました。

『あい、疲れた！』
と、二人の大男は、又ドツカと床の上へ倒れるやうに轉がると、そのまゝ、ぐ／＼と大きな肝をかい、疲れてしまひました。

かうして、いつの間にか、一週間ばかりの日が過ぎましたが、達麻は、柱の傷なほしたり、毎晩二時間程は、大男達のために鐵丸を拾つてやつたり、樽を立て、やつたり、一生懸命に働かれました。

『いやだ／＼。こんな暗い穴の中で、いつまでこんなことをして暮すのかしら。早く何とかして、逃げ出し度いものだなあ。』

と達麻は、逃げ出す方法を色々考へましたが、何しろ、出口も何もない、地の下の穴の中です。それに、おばあさんと小人が、いつも目を放さず見張りをしてゐますので、何うすることも出来ませんでした。

ほんの一週間程の間に、達麻はすつかり瘦せ衰へて、まるで骨ばかりのやうになりました。そして、顔は青になつてしまひました。それもその筈で、毎日毎夜働きつづけて、やつと三時間も寝たかと思ふと、直ぐおばあさんに叩き起されるのです。又喰べ物も、時々、一と張りの、蛋の實を貰ふだけで、他には、何一つお腹には入らないのです。

けれども、こんな苦しい中にも、達麻が大變悦んだ二つのことがありました。と云ふのは、北京や東春の村で、毎夜の様に起つたあの地震は、此の洞窟の大男達の亂暴な丸ころがしの遊戲が原因に違ひないと、初めてわかつたことです。それともう一つは、小人が泣かした眞珠で、北京の王様の、壊れた

と達麻は、逃げ出す方法を色々考へましたが、何しろ、出口も何もない、地の下の穴の中です。それに、おばあさんと小人が、いつも目を放さず見張りをしてゐますので、何うすることも出来ませんでした。

御器の宮殿を、立派に修繕することが出来るに違ひないと思ひつたことでした。

達麻は或日、見張りをしてゐるおばあさんの、袖隠してある隙を見て、その背の中にある不思議な眞珠を、そつと滑物の縁目に、隠して置いたのです。

もう此の上は、一刻も早く、何とかして、此の洞窟を脱け出したいと、毎日々々、一心に工夫しました。

恰度、或る晩のことでした。大男達の兄弟は、又何時の隙に、あの驚かしい遊びを始めたのでしたが、其晩の二人の競技は、毎よりもすつと激しくて、まるで、耳が聲になる程、大きな聲や叫び聲がつかゞきました。

けれども、幾らやつても勝負がつかないで、たうとう二人とも、氣違ひの様になつて鐵丸を投げ合ひました。すると、何うした拍子か、一人の大男の力一杯投げた鐵丸が、ドシンと壁に當りますと、壁はスボツと突き抜かれて、大きな穴が開いてしまひました。さうして、その丸は、壁の外へ、ブーンと鳴り



童謡

野口雨情選

(大人篇)

鷹

石橋 宗雄 (顧問)

雀よ 早く
バツと散れ
あれあれ鷹が
矢のやうに
こちらをめぐけて

霜夜

賤機多味男 (静岡)

飛んで来る
雀よ 危い
そら逃げろ
雀よ 早く
バツと散れ
霜枯れ芒を
ゆるがせて
霜夜に淋しく
啼きました
枯野を通るは

小狐

森 はたる (愛知)

風ばかり
空には青い
三日月
雪の山
雪の山から
小狐が
こんこん呼んでる
行つてみな

日和の原

青柳 花明 (群馬)

お日和 日和
風もない

日暮れの簀

名方 和郎 (大阪)

原だ
親牛 仔牛
草に寝て
居たよ
草笛 吹いて
誰か来る
やうだ
親牛 仔牛
めをわいて
ききな
淋しい風が
吹く簀は
夕焼小焼の
日の暮れた

雀のお宿も
日が暮れて
晩餚のお仕度
忙がしい
時々百舌の
啼く簀は
竹簀小簀で
日が暮れた

花のお船

府金 勇三 (仙臺)

ひとりぼつちで
漕いでゆく
白いボートに
風ばかり
はるばる島へ
着いたのは

雪の牧場

小堀 義夫 (静岡)

誰れも知らない
夜明けごろ
椰子の葉かげで
黒んばが
拾つた真白い
蓮の花
こゆきちらほら
牧場にふれば
小屋の小山羊は
かれ草ひいて
お目々あけたり
つむつたり
小屋のひさしで
はなしてる

三日月さん

村山俊太郎 (山形)

すゞめのおしやべり
きながら
なかに
お乳をのみました
三日月さん
三日月さん
金の橋
しゆつ しゆつ はい
迷子を
さがして
しゆつ しゆつ はい
野を越え
山越え
三千里
迷子

夜ざくら

湊 一訓 (東京)

さがしの
金の橋
しゆつ しゆつ はい
しゆつ しゆつ はい
夜ざくら
咲いた そろうた
さくらのお花
月の からかさ
下から見てる
鈴が きこえる
繪日傘 日傘
晝間 通つた
可愛い 子供
咲いて そろうて
櫻のお花

晝の繪日傘
ゆめ見て ねてる

臺灣島

日高 紅椿 (臺灣)

稻がかられた
たんぼの中に
お家をわすれた
臺灣島
あちらへ行かうか
こちらへ行かうか
お水牛の背に
とびのり思案顔
遠くに灯りも
チーラリ チーラリ
お水牛はだるそに
尾っぽをふりました

兎のジャンプ

高橋 十成 (埼玉)

明るい／＼雪の夜に
スキーをはいた兎らは
ジャンプをならつて
居りました
父さん兎がとんだらば
お山がトーンと
いひました
兄さん兎がまねたらば
小さくトーンと
いひました
母さん兎がとんだらば
お山がカーンと
いひました
姉さん兎がまねたらば

小さくトーン

といひました

静かな／＼月の夜に

スキーをはいた兎らは

ジャンプをならつて

すくすくだ
この頃まいあさ
仔牛どん
丸いわらちで
町がよひ

春が来る

本多 鐵磨 (東京)

この頃まいあさ
仔牛どん
小供につれられ
町がよひ
地藏ヶ岳の
ねぼけがほ
かいどにや
草の芽

小林 重義 (東京)

あれさ聞いたか

かつこ鳥

川の向ふの

あの森で

黙りこくつた

あの森で

一聲二聲

カッコー カッコー
あれさ聞いたか

かつこ鳥

星はつかりの

あの森で

一聲二聲

あの森で

耳に残つた

かつこ鳥

みそさざい

澄田 郁 (和歌山)

みそつちよ／＼

みそさざい

あの簀の簀

しぐれ雨

みそつちよ／＼

みそさざい

向ふにしょんぼり

闇魔堂

みそつちよ／＼

みそさざい

雀のお宿は

何處だかな

みそつちよ／＼

みそさざい

案内頼むに

何故逃げた

よつちやん

神山 裕一 (埼玉)

かつこん／＼

下駄はいて

となりのよつちやん

赤いげた

かつこん／＼



音たてて
遊びに來ました
今日もまた

よつちやん

となりの母さん
聲たてて

冬の朝

藤野 福雄 (大阪)

からつころ／＼冬の朝

足駄の音が大きいな

お屋根にや

霜が降つてゐる

雀や寒くも霜の上

からつころ／＼寒い音

雀やお屋根で

見てないた

北海奇話

—— 高木船長の思出 ——



川崎春二
きいう画

恰度五年前の三月のことでした。
私たちの——二本橋 補助機関付の遠洋漁撈船——

三日ばかり過ぎると、また強い北風が吹き出しました。

私たちは、西別沖から床丹沖に船の位置を移さなければなりません。そこは、野付崎がすつと突出してゐて北風をよけるからです。

今度は一層、流水や潮流の危険が多くなつた譯です。夜は殊更、不寝番の者が油断なく見張らねばなりませんでした。

二

その夜の當直士官——即ち、不寝番の頭——は、宮崎新作といふ若い運轉士でありました。

月の光が皎々と冴え渡つて、非常に寒さの烈しい晩でした。

私は毛皮の外套の襟を立て、つめたい月光を浴びながら甲板を歩きまはつてゐました。——船が港灣に泊つてゐる時、さうした物凄くまで澄み切つた月

留萌丸は北海道の根室灣に、凍てついてしまつたやうに静かに碇泊してゐました。

その年は大そう暖かだったので、例年よりは半月も早く船を出し、大に大漁するつもりでしたが、それどころか、宗谷海峡からオホーツク海に船を乗り入れると同時に烈しい西北風に襲はれ、さんぐな目に逢つて、やつと根室灣に避難したやうな譯でした。

幸ひと、灣内に入つてからは天氣がよくなつたので、船員たちをゆつくり休養させることが出来ました。

しかし春三月とはいひ、北の海の港はまだ氷に閉ざされてゐました。従つて、完全な港に船をつけたといふではありませんから、まるつきり安心してはゐられません。——怖ろしい流水や、潮の流れの工合をば、何時も注意してゐなければなりませんでした。

夜の海を眺めながら、煙草を吹かすのが大好きな私なのです。それはまた、私にとつて尤ものんきな嬉しい時間でもありました。

「ひどく寒い晩だね。」

私は、かう宮崎運轉士に話しかけました。

「でも船長、この調子では當分天氣は快晴ですよ。」

この若い運轉士は相變らず元氣よく語りました。

「吾々には天氣のよいのが何よりだね。」

「本當にさうです。今度のやうな難儀な航海の後で、かうして無事な船泊りをしてゐると夢のやうな氣がします。」

「全く嬉しいことだね。」

「どうです。船長！ この北海の天にかゝつた冷めたい月の光は？ 僕は郷里の親たちや弟妹たちにも一度このやうな景色を見せたいと、つくづく思ひます——」

「實際、吾々のやうな船乗だけが味ふことの出来る



光景だね。」
しばらくは私も運轉士も、詩的な感興にそゝられてゐました。

「ところで君、潮流の工合はどうです？ 風向が少し東によれたやうだが——」

「そのせいでせう。晝間より大分激しくなつてゐます。」

「流水はあまり来ないやうだね。」

上りました。

「あれなんですよ、船長、さきからぼつ／＼流水が通りはじめましたが、どれも本船とは五百米以上の距離を保つて流れますから安心してゐましたら、その中の一つに、何だか黒いものが見えるのです。」

それが、どうやら動いてゐるのです——」

「熊か何かではないかね。」

「それがどうも人間らしいのです。船長、あれですよ。あの上をご覧下さい。」

運轉士の指す方を眺めると、なる程、皎々と月光を反射する氷塊の面に、二つの黒い點がくつきりと浮立つてゐました。

「望遠鏡を呉れたまへ。」

宮崎運轉士は、敏捷く望遠鏡を呉れました。風下の方に遠ざかつて行く氷塊に望遠鏡を向けた私は、たちまちに總てが明かになりました。

「動物ではない！」

「しかし、この潮流の工合では今にどん／＼流れて来ますよ。」

「でも、こゝはまづ安全な場所だからね。だが、十分注意はしてゐて呉れたまへ。」

「承知いたしました。」

この元氣のいゝ若い運轉士の勤務振りを見ると、私はいつも愉快になるのでした。

間もなく、私は自分の室に下りて眠りに就きました。

それから多分二時間近く経つてからでしたらう。私は熟睡を破られました。

「船長！ ご迷惑でもお起きになつて下さい！」

「どうした！ 何か危険が起つたかね？」

私は、かう言ひながら飛起きました。『いや、本船に危険はありません。が、甲板に出て見ていたゞきたいんです！』私ははつと安心はしましたが、急いで甲板に駆け

「人間でせう！」

「たしかに人間だ！ 子供だよ！」

「二人ですね！」

「さうだ！」

三

「乗り出させよう！」

「助けなけりやならん！」

二人は叫ぶやうに言ひ交はしました。

私は早速、短艇をおろしにかゝりました。

運轉士は、漕手の二人の水夫を呼んで來ました。

短艇は忽ち、する／＼とおろされ、續いて四人が

飛び乗りました。

水夫の横田と鈴木とが櫂をとり、私が舵の柄を握

り、運轉士は私の側に坐りました。

「——お前たちには、給料の外に一ヶ月分の骨折賃をやるぞ！」

「船長！ あなたも鈴木の本の櫂を漕いで下さい！」

「よし來た！」

私も急いで上着をとつて、鈴木に代つて漕ぎ出しました。

私たちは新しの勢にまかせて、櫂から火が出

るやうに激しく漕ぎなりました。

かうして十五分ぐらゐ漕ぐと、私達は幾時間も漕

ぎ續けたやうな氣がしました。

「宮崎君、もう大抵追ひついたかね？」

私は堪らなくなつて弱音を吐出しました。

「もう一息です。船長！ 止めてはいけません。故

郷にあるあなたの子供たちのことを考へて下さい！

可愛い子供達が死にかけてゐるのですよ！

「うん、さうだ！ 子供等を救ふのだ！」

私は再び勇氣を奮ひ起しました。——櫂はまた調

子よく、白刃が蹴るかのやうに月光にきら／＼輝

き出しました。

私は、二人の若者をかう言つて勵ました。

けれども水夫等は、オホーツク海の暴風と戦つた

疲労が、まだすっかり癒つてゐなかつたので、幾ら

全力を出して漕いでも、短艇の進みは潮の流れを僅

に追ひ越すに過ぎませんでした。

しかも、分一分と艇の速力は遅くなつて行くばか

り——宮崎運轉士はもどかしがつて、

「うんと漕いで呉れ！ 俺は船長の賞與を二倍にし

てやるぞ！」と叫び出しました。

櫂の調子が激しく亂れました。それは、水夫等の

心からの努力を示すものでした。

しかし、彼等の力は今や殆ど盡きようとしてゐま

した。鈴木は櫂を返すのに二度も水を私達に跳ねか

け横田はとう／＼力が盡きて倒れてしまひました。

「横田！ こつちで寝ろ！」

宮崎運轉士はかう言ひながら上着を脱ぎ捨て、横

田の放した櫂に飛びつきました。

四

突然、宮崎運轉士は漕ぐ手をびたりと止めてしま

ひました。

私は、はつとしました。——彼も亦、力が盡き果

てゝしまつたのかと思つて。

しかし直に安心しました。

「しづかに——船長、靜かに——漕、もう一漕、

それでいいです。」

と、舷側がじり／＼と何ものかに接觸したのでした。

運轉士は、忽ち氷塊の上に飛び移りました。私は

水夫達に、短艇をしつかり氷塊に着けるやうに言付

けて、運轉士の後を追つて行きました。——私たち

は、氷塊の中央の黒點を指して走りました。

近づいて見ると、小さい子は大いの方の胸懷に

頭を突込んで、ひしと抱き合つたまゝ眠り込んでゐ

ました——寒氣のために正氣を失つてゐたのです。



宮崎運轉士は一人の少年を抱へあげ、ナイフでその兒の靴や上着を切り破つて、すっかり裸體にし、自分の胸懷を廣げて凍えさうなその體を暖い肌

にびつたり抱きしめ、その上から毛皮の外套でくる

つと包みました。

私も、もう一人の子供をば運轉士がしたと同様に介抱しました。

さうして短艇に引きかへしたのでした。

歸りには水夫達も大分元氣になりました。それにもう急がせる必要もないので、勝手な速力で本船に漕ぎ戻らせました。

本船では、いろいろと用意をして待ち構へてゐて呉れましたから、子供たちは手厚く介抱され、間もなく元氣を回復しました。

この少年達は、根室海峡に面した標津といふところの大漁場主の息子で、山浦竹彦、同冬彦といふ十一と九つ、二つ違ひの兄弟でした。彼等は、北國の子供達がよくするやうに、夕方結氷の上で遊んでゐる中に、だん／＼遠くの塊園の上に載るやうな冒險をしたのです。それが、潮流が急に激しくなつて押流されたのでした。本當に危い生命だつたのです。

その翌る朝、私が宮崎運轉士に、

「——どんな氣持がするかね？」と聞くと、

「腕がすこし痛みますよ。船長——あなたは何うです？——だが、こゝは極めて安静でせう——あなたも——」と、彼はその俠勇に溢る、胸を拳で叩いて見せました。

私も快い涙をばろ／＼こぼしたのでした。

(をばり)

厩

中
島
九

からす

柿の木で

厩を見てた

仔馬

ひこりて

厩にねてる

厩

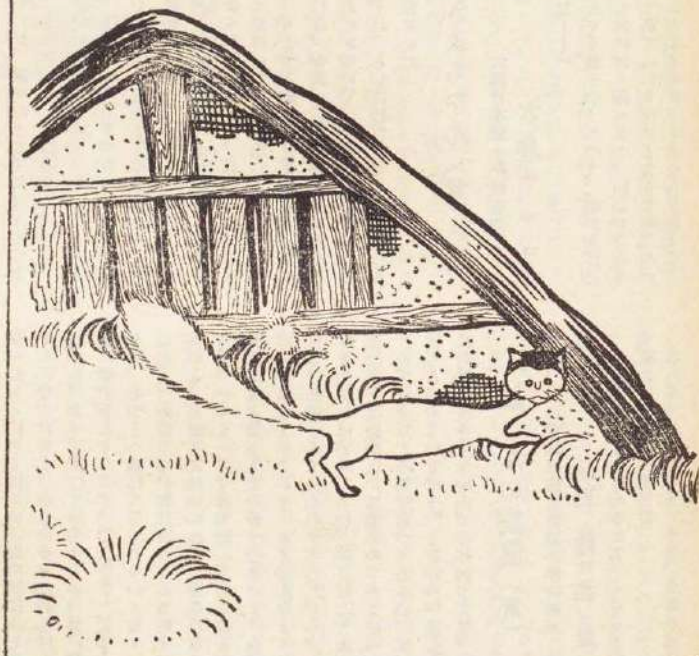
のぞいた

いたちの子

親馬

るすださ

言つて行つた





齋藤佐次郎選

繩とび(賞)

神奈川縣高座郡大野小學校等四

小川歌子

昨日が賽休みの時に、皆して面白く繩とびをした。あやになつたり、十字になつたり。とけたなり、重なつたり。ちやうど私の番になつた時、とばうとすると、六年の男生が繩を取らうとして、急にぐつと引いたので、私は其のはづみに、さうとさうとつて、どんだんころんだ。立たうとすると、繩が足にからまつて、する／＼と引きづられたまひやうしに、足をいたくした。がまん

さよちゃん(貴)

大連日本橋小學校尋四

大倉チエコ

「可愛な——」

いつもそう思うの。だつて、私がかばんをさげて學校から歸へると、向ふの方からはしつて來て『たゞ今』と大きな聲でへい氣で言ふのですもの。よその人が來ると、

姉さんの寫眞（賞）

三重縣員辨郡中里小學校尋六

三輪兆男

赤茶色のふうとうの中から、スウツと出て来た四角い小形の寫眞。

忘れもせぬ、今から六年前、但馬の或る

寺にもらはれていつた姉さんは、それから一歴も見なかつた。今其の姉さんの寫眞を見るのだと思ふと、むれがどきどきしだした。私はうづむけになつてある、姉さんの寫眞を取上げて見た。寫眞は、三人のお坊さん姿であつた。皆がころもを着て、胸にすたぶくろを掛けて、其れには『妙心寺派 罷業學林』と白字で麗々しくかゝれて足に拭白足袋にわらじばき。お坊さんの修業中の姿。

姉さんはどれだしらん。六年前にわかれた姉さんの姿を僕は、はつきりしなかつた。右にある一番小さいのが姉さんかしら姉さんは、うちにあるところから小さかつた、うす／＼ながおほへてゐる。そうして、どこなく僕にへてゐるやうだと思ひながら、うらなをかへて見ると、インクで左から三輪舞臺、永谷知康……とするされてあつた。僕はもう一度姉さんの寫眞を見入つた。うつくしくすつた頭、黒い衣、わらびきなのたくはつ姿、圓い顔、かすんでゐるやうな目、ほそい足、姉さんの姿がなつかしい。いつかへるかしら。かへつた

學校の歸り道

尋五

平山和

僕と小松君、里見君、武井君、半次君の五人で、光明寺の前の道をまがると、關口の前で酒屋の小僧らしい子が自轉車をわきにおいて、何かをひろつてゐる。行つて見

一六

私のたもとにかくれるの。此の頃は少し兄さんになったよ。小さい歩けないしげちゃんを、まりで遊ばすのでもの。せい材所がやかましくなるのと、「やかましいな」あれ、あつちへ連れて行つたらいない」などと、お母さんが御仕事してゐる前で言ふのよ。お母さんは手を休めてお笑ひなさるの。いつも一人で砂で遊んでゐるのよ。又洋服など着るといふ分うつるの。色は白い。目はまあいいキムビイさんのような目よ。此頃一人でねんねするのだから、お母さんはおほめになるの。昨日なんて大きなほうきで庭をはいてゐるの。ちよびつとためて大きなごみ取で取つてゐるの。私が行くくと「えらいでせう」と言ふの。ほんとに可愛いきよちゃん。今年四ツです。

と、ビールのにほひがふんと、にほつた。小僧は赤い顔をしてゐる。ビールのかげが一面にちらばつてゐる。小僧はそれからをひろつて、自轉車の後に乗せてあるかごに入れて居る。かごの中を見ると、中はびしよりとぬれて居る。誰もかけらをひろつてやらうとは思はない。小僧の右の足から血が出て居る。『誰がやつた』と僕が小僧にいふと、だまつてかけらをひろつてゐる。牛次君が、そばにゐた五郎ちゃんに、誰がやつたと聞くと、五郎ちゃんは、わきにふるしきづつみなかへて、青い顔をしないで、一口もいふとはしなかつた。五郎ちゃんがつたにちがいないと僕は思つた。見て居た大人の女の人が『五郎ちゃん、行つてあやまつてやりなさい』といつて立さつた。みんなが五郎ちゃん顔をながめた。それでも首をふつただけで、一口もいはない。

小松君が、ビールびんのふたを一つひろつて「僕にくんな」といふと、小僧は、だまつて小松君のもつてゐるふたをひつたくるやうにとつて、かごに入れた。とうりか

かつた大人の男の人が『どうしたのだ』といふと、小僧はなきそうな聲で『五郎ちゃんがこのかごをうごかしただから、自轉車がひっくりかえつた』と話した。その人は『ふん』といつて、いつてしまつた。僕はさつきの人とくらべて、ふしんせつだと思つた。小僧は、びんのかげらを拾つて、いたさうな足をひきづつて自轉車をひいて行つた。

まつおつさん

兵庫縣出石郡小野小學校尋五

山内里代

とうに松おつさんが、向ひの道の方で歌をうたつておんなつた。そしてうちに來なつたから、ごぜんをよんで上げようかと私がいつたら、『うきだんこつたからよい』といふつた。おばあちゃんが『ぼんだつてくいなあ』といふつた。そしてさらに入れて上げた。三ばいもくいなつた。そしてだれもごぜんを食つてしまつて、ゆりにあたつてゐると『ふまいつきかしておくれ』といふつたから、おとつちゃん

『ふまいつきなにすだいあ』といふつた。『ちやつ』とだいておくれ』といふつた。すぐにだいて上げたつた。そして見てゐたら、そこにあつた帯をくくりつけた。私が『はよいなあ』といつて上げた。『まあ、まつおくれ』といふつた。そして、『人はわしの事を、とほけておるとほけておるといふが、とほけておるとあきなひは出來れへまいが』といふつたから、おとつちゃんが『あ、そりやあたりまへだ』といつてあげなつた。松おつさんは、ふまいつきにこしかけて『大きなからだを車にのせて、えらいしんぼもしやうがない。あざり勝五郎、勝さんへ。もみぢの青葉に雪がちり、寒かつたでござんせう、でん』と二へんつゞけてうたつておんなつた。そして、『お茶を一つばいおくれ』といふつた。『うちの人は大わらいした。おばあちゃん、松おつあんのにおなごしうだ』といふながら、お茶を一つばいあげなると、ぢきんでしまつて『富田松造は子がない。わしやとほけておれへん』といふつた。そして急に『そう、あ』

はられた綴方

千葉縣長生郡茂原校尋五

吉野徳子

朝、例のやうに、おかうちやんや杉木さん等といふ／＼な話をしながら、學校の門をくゞつた。でれ／＼牛のやうに、やつとの事で下駄箱まで來た。ガラス戸を明けて、元氣な聲を出して、『おはよう』と言葉をかけて、ふとわきの壁を見たら、綴方がはつてあつた。順々に見てゆくと、『停車場まで』といふ題で、私のが河田さんの隣へはつてあつた。すると

美ひじようこのおかうちやんが『よう／＼官野さん。おめえのがはられてでん』と

さも喜ばしうに言つてくれた。其の時私は何だか胸が飛び上りさうにうれしくなつて來た。すぐに書物を入れて、批評を見に行くと、前のよりすつと良く、そして落着いて書いてあるといふ事を何だかむづかしい字をまぎて書いてあつた。丁度紙入を持つて來てあつたので、前に書いた『雨降りの遊び時間』といふのを見ると、これには注意が書いてあつた。其の悪いのと良いのを比べて、ぢいつと考へて居たら、誰だか『官野さん、表に行かない？』と言ふ聲がしたので、ちよつと廊下を見たら、千賀さんが居たので、表へ出た。それから二三日たつて、先生が理科の實驗の道具を、成家さんと私で取りに來いとおつしやつた。二人で歩いて行く途中、成家さんが『おめつば、綴方ははれてるつべえ、字が大きいからだつたがんと思つたば、おめだつただよ。いらい上手でんか。』と言つた時、うれしくなつて、どん／＼廊下をかけて先生の所へ行つた。後から成家さんはのこ／＼

やつて來た。

かはいいすずり

大連日本橋尋常小學校尋四

山中友江

姉さんの小すずりを見るたびに、うれしいような氣持がする。それは或日の事でした。私のお姉さんが、お習字をするのに、すずりが無いので、となりの内から借りて來ました。おとなりのすずりは、すいぶん大きなすずりだつた。五六日たつた。或日おとなりのみいちゃん、がたんとひどく戸をたたいた。お姉さんが二じようの室から出ていらつしやると、みいちゃんは、あはたとしく、『すずりをかへして下さい』といつて來た。お姉さんがすずりをさがしたがない。私も姉さんと一しよにさがしたが、どうしても見あたらない。お母さんは、お姉さんに向つて『ちえ子、お前のすずりをあげなさい』といはれた。お姉さんは、自分のすきな／＼小すずりとわかれるのはかなしいだらう。目にはつゆがこぼれてゐる。私も思つた。あんな、にくらしい大

きなすずりとあのかはいらしい小すずりと

かへるのはあんまりしやくにさはつてたまらない。姉さんが目につゆの玉まで、ながしていらつしやるのを見ると、たまらなくなるのだつた。その中にお姉さんは、小さなすずりを手に持つて、『はい』といつただけで、うつ向いてゐる。私はものが言へない。たゞあつげにとられて見るばかりだつた。すずりをかへしてもらつたみいちゃんは、にこ／＼しながらかへて行く。空には星がきら／＼と光つてゐた。とうふうやのりんがりん／＼とひびいてゐる。内の中はしんとした。すずりとわかれたお姉さんは、机にもたれてすずり泣き。外はだん／＼暗くなる。お姉さんは泣いてこはもたべない。私はこはんをたべても、しやくにさはつてのどに入らない。夜になつてもねられない。ふとんの中から顔を出して、目をはんぶんぶつてゐた。しかし夜が明けた時、すずりはかへつて來た。お姉さんのよるこびは、大したものだつた。

元ちゃんを思ふ

神奈川高座郡大野小学校高二

河本 福司

さきなどとは、いつしよに學校に來てゐた元ちゃん、死んでからむやみと思ひ出されてならない。

あの墓の、わきの道を通る時など、ひとり、さびしくなつて来る。そして、元ちゃんといけられた所を見ると、よくそのおとなしさな顔や姿が目の前に居るやうに、浮んでくる。私とけんくわをしたので、にくらしい事もあつたが、今はもうそんな事は忘れてしまつて、なんとなく、可哀さうな心が湧き上つてくる。

死ぬ前の日まで、家のえんがはで、ちいちゃん一つしよに遊んで居たあの元ちゃん。私は垣根の外から、其の姿を見ましたが、あの時の姿が目にしみついでゐて、今も忘れられません。あの姿でどうして、一夜ぐらゐで死ぬと思はれやう。死ぬ前にけんくわをしたなりで別れてしまつたが、あの時あやまつてをいたら、今になつても、

そんなに可哀さうがなくなつてもよいのに。あの時今一口きいたなら、今そんなに残念がなくなつても、どうにか出来るだらうにと思へば、何可哀さうで、その一口が氣にかゝる。

迷ひ犬

兵庫縣美濃郡別所村東道田

吉廣 常雄

向ふの家で風呂をもらつて歸へつて見ると、見なれない犬が一匹庭にちんとすわつて居た。白と黒とで、小がらのかわいらしい犬であつた。

『おとつたん、これ何處の犬だい』と父に尋ねて見た。父は『しらんぞ』と云つて奥へ行つてしまつた。

おかしいな。どの犬だらう？ 迷ひ犬だらうか？ 迷ひ犬だつたら可哀さうだな首輪もかん札もない。犬取りが來たら一べんに取られてしまふ。可哀さうだなと思ひながら、犬の方を見て居ると、犬も又僕の方をちいつと見つめて居た。今僕の母は病氣である。此の犬は神様の

使であつて、此の犬を可愛がつてやると、母の病氣がよくなる。ひどいめにあわすと、病氣が重くなる、……僕はふとこんなお伽話のやうな事を考へ出した。母が病氣である僕は、何かについで思ふのであつた。もしそうであつたら僕は一生懸命にかわいがつて、母の病氣をよくするんだけど……そんな事あるもんか。こんな犬居たらじやまになる。『しいッ』と追つてやつた。犬は尾をまいて外へ出て東へ逃げて行つてしまつた。僕も外へ出て後姿を見送つて居た。

浩ちゃん

神奈川高座郡大野専科尋常四

植田 滯子

私が學校から歸つて、かばんを下してから、母ちゃんの所へ行つて『母ちゃん、あかちゃんをだつこしませう』といひましたら、母ちゃんは、『さあだいておくれ』とおつしやつた。私が手を出して『浩ちゃんだつこ』といつたら、浩ちゃんは首をふつて、いやーとながら、前ふを向いてしま

ともおつしやらず笑つてしまつた。

志賀屋

福岡市春吉校尋六

元吉 進

ひました。私はかまつてやらうと思つて向ふへまはつて又だつこと言ふと、又いやなしました。私はくやしくなつて、『浩ちゃん、母ちゃんにだつこしてゐては、母ちゃんに何にも出来ないよ』と言つて、むりにだくと、泣き出してしまつた。私はこまつて『母ちゃん、浩ちゃんが、泣いてしまひましたよ。』と言つて母ちゃんにかへすと、もうだまつてしまつた。私が『浩ちゃんばあ』といひますと、浩ちゃんにはこにこして、お手を上げてばんざいしました。浩ちゃんは、何時も母ちゃんのおひざが一番好きなのです。

賢ちゃん

尋六

小野寺 長之助

隣の賢ちゃん、此四月に入學し、毎日大きな靴を履にして元氣よく學校に通ふ。『静夫はおとなしかつたが、賢坊はいたづらでどうもならん。』と賢ちゃんのお父さんは何時もおつしやる。けれども僕は太體氣に入つてゐる。それは、はき／＼して元氣

良く、正直で、すなはな性質だからだ。賢ちゃん、まだ七の時、兄さんの竹馬を持出して來て、遊んで居た。急に乘らふとしたがまだなれない。小さい賢ちゃんには、どうしても乗れるはずはない。そうして居る中に、どうしたはづみか、田の中におつこした。うつとりと見て居た僕は、走つて行つて賢ちゃんを田から上げてお隣へつれて行つた。幸ひけが、無くて良かったが、おとなりでは驚くやら、笑ふやら、大さわざでした。又賢ちゃんは腹方がうまいと云ふ評判です。此の間、新校落成式記念の展覽會に、賢ちゃんの作文が出た。それは此の夏休にお父様と鎌倉見物に行つた事が書いてあつた。そして、其のお土産に妹にはチョコレートにリボン、お兄様には繪葉書と運動靴を買つて來たと云ふ事まで書いてあつた。展覽會を觀にいらつしやつた賢ちゃんのお父さんが、『賢坊、お前の書いた字があまり大きすぎるではないか。』とおつしやると、賢ちゃんは『でもお父さん字を大きく書くと、近眼の人にも目鏡をかけずに見えますから』といつた。お父様は何ん

内の向ひの志賀屋は、大變によく賣れる魚屋である。おぢさんは朝七時頃から車を引いて、魚市場に魚を買ひに行かれる。おぢさんの歸りには、車の上に生魚と記した箱をのせ、『がらん／＼』と威勢のよい音を立て『魚は入りませんか？』とおらん／＼呼んで歸つてこられる。其の頃にはもう二三人のお得意さんが、ざるを持つて面白い世間話に花をさかせてゐる。おぢさんは酒がすきで、夕飯前にはきつと飲まれる。七時頃になると、おぢさんは獲りの魚をしまつたり、土間を掃除したりそれはそれは忙しさうである。時折おぢさんの酒がすぎた時は、酒にのまれてぐたぐたくなまかれることがある。するとおぢさんは、掃除しながら『ぐた／＼いはれるやうな酒なら、明日からさつぱり飲まないで下さい』と大聲でいはれることがある。



信 通

金の星童話の

更新について

野口雨情

月から金の星の童話を更新して、童話道のために盡すことに致しました。本月號は最初のことゆゑ手落ちもありますが、返読皆さま方の御期待に副ふやうに致してゆきます。従前とて金の星に童話の更新については責任は私にありましたが、今後は従前に増して全責任を私が負ふことに致しました。つまりは、作者の有名無名を問はず、純然として作品に重きをおいて、童話藝術に違ひものや、児童の童心教育上益なしと思ふ作品は絶対に登載せぬ方針であります。そのため金の星の童話がデチャナリズムな児童語より遠いものになつて、童話に無定見な諸君が金の星から去つたとしても、童話道のために止むを得ないのであります。私は、私の童話の故郷である金の星を中心

に、この信念をもつて、進むことに致しました。

なぜ、私にかうした考へを興へたかと云へば、大正十年來のくはだてであつた「童話脚行」が、ひとり臺灣をのぞくほか（尤も、臺灣へはこの四月にまゐる豫定になつてをります）殆んど豫定通りにすんだからであります。そして、皆さまの御厚愛によつて全國無なく童話の普及を見ることが出来たからであります。かく童話普及の上は、更に童話道のために盡したいと云ふのが、脚行當初に發表しておいた私の希望なのであります。

御承知の通り、私はこの數年間は、一路童話の普及にのみ心をかけて、自ら作品を顧みる道がなかつたのであります。そのため自分の作品が次第に粗雑になつてゆくことはよく知つてゐましたが、自分の作品より童話の普及に重きをおかねば、童話の萌芽の枯れることを恐れたからであります。しかし、今はさうした心配はありません。安心して皆さまと共に童話道のために一意専心盡さればならぬ時が來たのであります（一月二十八日記）

童話の選後に

齋藤佐次郎

○編輯室よりをお読みになつた方は御承知

一三三

と思ひますが『金の星』もこれから讀者の方々と協力して良い雑誌にしたいと思ひます。童話欄の方は野口雨情先生が全部を擔任されて、大に活動して下さることになりましたから、いよいよ面白くなつて來ると思ひます。それで、童話欄の方も、ともしれば眞の都合上、推薦作を擧げる事が出來ない場合がありました。今後は、い、作さへあれば一篇でなく、二三篇位までは掲げたい希望であります。投稿家の諸君も、その積りで、どうぞ大に努力していただきたく思ひます。

○今月集つた作からは、左の諸作を選用作に擧げました。

三べん目（稲垣宗一）神様がわるい（島田幸三郎）青空（阿部和子）水と硝子（中村連生）ふるさと（堀田信孝）石ころ（中澤千太郎）野原の冬（岩瀬耕一）可哀想な仔犬（川島秀夫）しんこやの小父さん（池澤鶴三郎）助太郎物語（山崎民士）

○この中から稲垣宗一さんの「三べん目」を「賞相寺のお化墓」と改題して、推薦して今月號に掲載しました。

○この作は讀まれたらすぐに解る通り、童話の題材としては、めづらしく風変わりなもので、従つて新鮮味のある面白いものです。子供のいたづらが、次第に大きな事になり、遂に一人の少年の生死の問題となり、一案を暗い運命におとし入れたばかりでな

く、儼、それに類した他の少年までが發狂して行かうといふのですから、作者は何氣なく、たゞ實際にあつた村の話として書いたものと想像しますが、考へやうによつては、非常に大きな人生の暗示ともなつた作であるといへます。

○作者は、希望によつては、尙此の話を續きを書く、終りに書き添へてあります。それで實話であらうといふ想像も生れる譯ですが、しかし、この話はこれだけで切つてもいいと思ひます。たゞ、文章は餘り感心しませんでした。組野過ぎて十分の感じを表してゐませんので、多少の加筆をしました。しかし組野なところが、また此の作にふさはしい點も認められました。

○今月は推薦作は以上の一つだけです。尙前月に推薦作として擧げた五つの作は、校正通ひで、集つた作中の優秀作といふだけの意味なので、こゝに訂正します。次月號にはスバラシイ諸君の作を拜見したいと思ひます。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

○今月は、皆さまが各休み中に書かれたものが、驚くほど澤山の作品が集まりました。従つて佳作も多く、入選作を決するの、大そう骨が折れました。

▽誌上に載つたのは、左の十二篇で、その内三篇だけ入賞しました。他の作も入賞作に劣らぬほどの出来栄です。例によつて、入選作の寸評をします。

▽小川歌子さんの「編とび」四年生の作としては驚くほど敘述が整つてゐます。字句に少しも無駄がなく、キビ／＼とした口調で、よくその場の氣分なり、光景なりを現はしてゐます。ただこの作品で強ひて難を云へば、最後の場面が、前半に比して、著しく力抜けがしてゐる點です。

▽大倉チネコさんの「さよちゃん」は、可憐な作です。チネコさんの姉さんぶつた顔で、よく眼の前に浮びます。この作を讀んで、思はずは、ふまぬ人はありますまい。

▽三輪兆男さんの「姉さんの寫眞」男の作品では、これが一番でした。近頃はどうかしたものが、男の方が非常に貧弱で、ともすれば女に耽溺されてしまひます。どうかしつかりして下さい。三輪さんは、上手に書いてゐますが、その上手さに任せて、あまり作り過ぎないやうになさい。

編輯室より

（記者）

○今月號で「童心旬」の募集を發表しました。野口雨情先生の選でありますし、非常に面白いものでありますから、大に投稿していただきたく思ひます。雨情先生も大に

力を入れてなられますから、きつと大きな勢力をつくるやうになることとせう。

▽これまで愛讀者の方々から「童話欄」をもつと擴張してくれといふ御希望が澤山に出てゐましたが、眞の都合上思ふやうになりませんでした。しかし、今度から野口先生が御自身で童話欄の全部を受持つて下さる事になりました。これから、童話欄の質も増し、推薦作や入選作を澤山に掲げて、新進作家諸君の爲めに大に活躍を費して童話を作る諸君に大に奮つていただきたくと思ひます。

▽尙、童話募集の方も、これまでには眞の都合で、澤山に就けることが出来ませんでした。が、これからは大人篇、小人篇共に出来るだけ多くを推薦する積りになつてゐます。殊に小人篇の方は、載せる事が少なかつたのですが、これからはせい／＼紹介したいと思ひます。

▽三月號は沖野先生の『和蘭燈籠』立石先生の『ちんば行列』横田先生の『二人善右衛門』等、苦心の讀切り傑作を掲げる事が出来ましたが、次號には水谷まさる先生はじめ大家の傑作を掲載いたします。

▽西條八十先生の『魔術奥義書』は先生の御病氣のために、残念ながら今月號一回だけ休まなければならなくなりました。お詫びします。

一三三

綴方掲載外佳作

中田 富江(兵庫) 中津 榮吉(福岡)
 須田 正幸(東京) 安藤 よし子(大連)
 打越 榮次(茨城) 池田 儀三郎(石川)
 井上 理(京都) 松浦 トミ子(山口)
 齊藤 邦一(和歌山) 河本 喜一(神奈川)
 河本 守正(神奈川) 柿島 駿一郎(神奈川)
 阿部 和子(宮城) 土井 久彌(千葉)
 古谷 みい(茨城) 門井 弘(茨城)
 飯島 守夫(長野) 高橋 まさ(千葉)
 高橋 彌子(千葉) 高橋 巖三(滋賀)
 清水 久山(山口) 久山 マキ(山口)
 齋藤 房(和歌山) 關原 壽子(東京)
 橋本 芳雄(兵庫) 藤井 照枝(東京)
 鶴田 敬一(福岡) 河本 喜一(神奈川)
 池澤 まさ(千葉) 増山 曠(東京)
 山口 吉三(滋賀) 中山 豊(北海道)
 高野 修次(東京) 木村 倭(山梨)
 茂呂 きく(茨城) 高村 忠典(茨城)
 原田 善郎(神奈川) 黒澤 茂一(埼玉)
 小川 貞雄(和歌山) 増山 幸次郎(東京)
 角田 邦太郎(滋賀) 大谷 定信(神奈川)
 鈴木 和作(神奈川) 八木 嘉一(神奈川)
 末弘 朝人(山口) 飯島 力夫(長野)
 松澤 治兵衛(茨城) 石田 武男(群馬)
 吉田 敬一(千葉) 安藤 旭章(北海道)
 三輪 誠房(静岡) 須田 正幸(神奈川)

文術(青森) 工藤 實(青森)
 童話掲載外佳作

森田 勝美(熊本) 野澤 鶴峰(新潟)
 福井 勝秋(愛知) 原 よしか(千葉)
 藤本 孝吉(北海道) 千春 命澄(朝鮮)
 高橋 和(不明) 櫻木 武夫(不明)
 瀧谷 正治(東京) 吉村 光雄(東京)
 長島 多津雄(山口) 且原 孝次(山口)
 吉田 徹一(千葉) 緒方 達(熊本)
 貫井 昌枝(東京) 角田 亮吉(愛知)
 伊藤 孝三(富山) 末延 誠(山口)
 伊藤 克良(兵庫) 藤野 福雄(大阪)
 石村 力(愛媛) 早川 よし子(東京)

童話掲載外佳作

柳澤 眞砂路(和歌山) 嶺州 光太郎(東京)
 大島 秀夫(静岡) 神原 一郎(愛知)
 川島 日夫(東京) 張 命 澄(朝鮮)
 林 俊夫(東京) 村田 正四(東京)
 島田 幸三郎(神奈川) 大竹 一三(愛知)
 松本 秀穂(東京) 根岸 敵(茨城)
 やなぎ ひさ(岩手) 大塚 一仁(大分)
 岡本 清一郎(不明) 岡田 秋太郎(埼玉)
 畦 露美(山梨) 神村 悦次(長野)
 河津 千み子(神奈川) 笠井 正巳(大阪)

『前回の梗概』

『大石主税』元禄十四年三月十四日、淺野内匠頭は、江戸の芝、慶安下、田村右京太夫の邸で切腹をさせられた。
 しかし、その領地、赤穂の方では夢にも、その事を知りませんでした。そして、十六日になっても、十七日になっても、赤穂へは、その『知らせ』が来ませんでした。赤穂の春は静かでした。大石主税は、その弟たちと、のんきに、快活に、わなを作った小鳥を捕少たりして、遊んでいました。たゞ、お城の門で『蜂合戦』といふやうな嫌な『前じら』が、あつたにしても、赤穂の家では、豊かな春を味わっていました。すると、十八日の深夜中頃、二挺の早駕籠が、大石内蔵助の、こゝろへやってきました。早見藤左衛門と茅野三平といふ、死んだやうになつて、江戸表の恐ろしい『知らせ』を持つて来ました。主税は、氣も魂も、グシャリとなりました。
 『白帆の囀』伊豫國の片邊り、淋しい海邊の村に住む峰枝と春之介兄弟は、行衛知の父を尋ね、母と三人で巡禮の旅に出た。旅は悲しく辛かつた。途中、盗賊の爲に、金を取られたり、悪武士に會つて危い目を見たりして、やつと大阪まで通りつくと、母は病に罹つて、死んで了つた。遠方に暮れてゐると突然患者が峰枝をさらつて逃出したので春之介は小舟で追駈けた。其時恐ろしい嵐が来て、少年は押流された。

○日本童話選集 (第一輯)

現代童話作家三十四人の代表的傑作集である。我々はこの選集によつて、新興童話とは果してどんなものであるかと云ふ事を、明らかに知る事が出来る。混沌としてゐるところを知らぬ日本童話界に、一道の光明を與ふるものとて、恰く童話愛好家の一讀を喜む。各章毎に現代童話巨匠の編纂たる挿話を挿入し、装幀紙質とも申分當三十四枚、定價參圓七十五錢、日本橋區通三丁目 丸善株式會社發行

○全人 (ベスタロツチ記念號)

イデヤ書院の月刊雑誌『全人』の一月號は、ベスタロツチ記念號として發行された。開卷劈頭、小四重直博士の『全人としてのベスタロツチ』を初めとして、我國ベスタロツチ『研究家の所論を以て掲載されてゐる。ベスタロツチの思想は、實に現代教育道の燈臺である。彼を知らずして教育愛を語るべからず。(第判二〇〇頁、定價六拾錢、牛込區山伏町一四 イデヤ書院發行)

新誌友名簿

名方 和郎(大阪) 堀川 秀雄(茨城)
 石井 賢子(東京) 渡部 淺次(茨城)
 岡田 徳治(埼玉) 小西 勇(香川)
 佐藤 幸信(大分) 橋本 白樹(栃木)
 江夏 清弘(東京) 松本 秀穂(東京)
 江原 又七(新潟) 林 芳男(千葉)
 船橋 かむ(東京) (以下次號)

石井 敏子(神奈川) 小堀 義美(神奈川)
 小川 義典(香川) 草二(埼玉)
 藤原 正司(兵庫) 關口 旭峯(不明)
 森田 貞治(東京) 金子 虹詩(東京)
 高橋 清右衛門(岩手) 石原 孝(東京)
 木田 鐵太郎(不明) 中村 里郎(兵庫)
 中村 達生(大阪) 鈴木 英夫(神奈川)
 竹下 晴月(島根) 河野 牧草(朝鮮)
 志村 治之助(東京) 松本 嗣輝(東京)
 内田 好雄(神奈川) 山村 義美(千葉)

子供(篇)

武藤 良三(滋賀) 中川 吉夫(石川)
 牟田口 實朝(朝鮮) 宮良 高夫(神奈川)
 中村 達生(大阪) 朝倉 榮一(群馬)
 鈴木 英夫(神奈川) 大木 ひで緒(茨城)
 各務 貞八(愛知) 堀川 ひで緒(茨城)
 淺利 文樹(青森) 大岡 秀吉(和歌山)
 高野 道太(埼玉) 吉田 敬一郎(千葉)
 青木 玉吉(埼玉) 長谷川 とさ(兵庫)
 土肥 實(兵庫) 柴崎 龍夫(兵庫)
 原田 善郎(神奈川) 和氣 伊勢雄(東京)
 近藤 巳太郎(東京) 濱谷 信治(埼玉)
 石川 ツネ(埼玉) 瀧谷 正治(東京)
 石田 武男(群馬) 原島 きよ(埼玉)
 小川 ナヲ(埼玉) 金子 あと(埼玉)
 宮良 高夫(神奈川) 谷野 たけ(埼玉)



讀者だより

▼私達の主義主張が有利のために左右される事の多いのを、しみじみ情なく思ふ事が度々あります。

金の星二月號の最後に書かれた「編輯室より」の記事を、ほんとうにうれしく有難く拝見いたしました。

ほんとうに児童讀物の趣味の退歩です。深く考へると恐ろしい様な氣になる事もあります。

▼小生は一月號からお仲間に入れたてでした。『金の星』を長く愛讀いたします。

▼金の星二月號、本日拜見致しました。表紙がだん／＼美しくなるのは喜ばしい事です。

御健筆をお祈りして筆をおきます(長崎市城山町南四條十二 原まさる)

▼二月號、素直に佳いでした。立石美和先生、西條八十先生の童話。

童話壇では矢張り漢一朗、青柳花明、坂野潤の諸氏がふるつて、おい／＼すれ。終りに、いつか金の星社の前を通つたとき、チラと見たのは給仕道哉君だつたかしら(東京 川島日出夫)

▼え、確かに私でした。私もチラリと見た時に『あ、川島さんだな』と氣がつきました。

▼寄藤先生、今度も童話を一篇御送り致します。どうぞ私ごととき善二才の書くものに何程の値打がある

新しく出た本

○宮本武蔵

本書は二刀流の始祖、宮本武蔵の生立ちから筆を起して最後の岸邊島の仇討ちに至るまでの勇壯極まりなき一大武勇傳である。

〜(記者)〜

▼夜更け、丑滿時! 創作の都合上草木も寝ると云ふ時に就寝する私です。

▼諸先生様ありがたう。金の星を手にして岡本先生の表紙の繪を見るやいなや、私は清らかな小供の世界に誘はれます。

▼新年號の『金の星』全く素直で、最初の魔術與義書から終り迄、ほんとに一呼吸に讀んでしまはなければおけません。

▼新しい私の童話のせて下され、又美麗な賞品をお送り下さい。誠に有難う御座居ました。

▼あ、『金の星』二月號は、歡喜の全頂だ。童話壇の金星揃ひなんだ。

▼先生、私は誰友になりたいのですが、東京、上杉守久(一)



金の星社 三月號

出版だより

近刊書のお知らせ

一月中に発行の豫定であつた五冊の内、一月はお正月でもあり、いろいろ準備が遅れて「ブランド」の少年」と「ビーター大帝」の二冊だけしか發行になりませんでした。

『大勇士』『魔法の小人』『海を越えて』の三冊は全部二月發行に廻りました。尚、以上の三冊の外に、左の三冊の近刊書が發行の豫定になつてをります。

○源義經 (三島精川著) (日本歴史賞傳物語叢書ノ一)

○ドイツジグフリッド王子物語 (名著大系ノ三十五)

○ビーター・パン物語 (立石美和編) (世界名作童話ノ九)

『源義經』—この本は三島精川先生が例の通り非常な苦心と努力とで書き上げた大作ですが、必ず皆さんから大歓迎を受ける事と思ひます。これは『日本歴史賞傳物語叢書』の第一篇でありまして、第二編には『蘇我兄弟』第三編には『赤穂義士』と何れも三島先生の作が出版になるのです。この叢書は、日本歴史の中で有名であつて面白い物語を、世間に傳へられてゐない、かげんなお話として書くものであります。『日本歴史賞傳物語』といふのはその意味なのです。

意味なのです。ですから、この叢書を讀めば日本歴史の有名な話が、本當にあつたそのまゝ、な知る事が出来て限りなく興味のあるものです。三島精川先生の獨特の深い研究と苦心とが、此の本を讀んだ方に直ぐに知られる事です。

第一編の『源義經』は皆さんにおなじみの深い武人ですから、今更に説明するまでもなく實に面白い物語です。しかも、その實傳でありますから、外の本では讀めないものです。

装幀と挿畫とは羽島古山畫伯が例によつて苦心されたもので、日本本としては稀れに見る高麗な美本です。書店に立つて是非一度見ていただきたいと思ひます。

(定價金部圓、送料十二錢)

『ジグフリッド王子物語』—この本は『金の星』誌上で讀物として紹介したことがありまして、大體の筋は御承知の方もありませう。ドイツ第一の偉大な傳説であるが、ドイツ、世界にも幾つと数へる程の立派な實に偉大な物語です。

讀んでゐながら、思はず力が入つて、自分までが勇士になるやうな氣持を興へられる程勇壯な話です。なるほどドイツ民族の第一の傳説となつてゐるわけだ、と思はすにはあはれないものです。

此の物語は去年の頃ドイツから活動寫眞になつて來てゐる方々から評判でして、活動寫眞で見た方は、この本を讀んだら、一層面白く思はれるでせう。

この本は、是非お読みしたい本です。装幀と挿畫は、平賀輝彦畫伯の美しい畫で飾られてゐます (定價九十錢、送料六錢)

『ビーター・パン物語』

—この本も活動寫眞になつて來ましたので、ずいぶん有名になつてゐますが、しかし、活動寫眞のは本當の『ビーター・パン』のお話ではなくて、この話の中の一部をとつて、それに後から作つたお話をそへたものです。

英國では非常に有名な話で、誰一人知らないものもない程で、この物語を本にしたものが何百種あるか知れないほどださうです。さういふ有名な話でありますから、早く日本に紹介される管でしたのに、これまで割合に知られてゐませんでした。

おなじみの立石美和先生がお得意の筆で、書いて下さいましたので、はじめて日本の少年少女たちに此の世界的物語を御紹介することが出来ました。

装幀と挿畫は羽島古山畫伯が非常な努力をされたので、讀物語のやうに澤山の繪で面白く面白く讀む事が出来ます。少し心ある人は、主人公ビーター・パンの面影が忘れられずに心に殘る事と思ひます。それだけに童話を研究する方には是非讀んでい

たきたいものです。『ビーター・パン』は、即ち人間の永遠の美心を象徵したものでありますから。

(定價六十錢、送料六錢)

本社の出版圖書若漢會推薦書の三分の二を占む

本社の出版になる本が、何れも児童圖書として模範的なものであつて、新界の權威となつてゐる事は、廣く認められてゐるところであります。

東京高等師範學校が、普通教育振興事業として讀物調査部を設け、『著書會』といふのを組織して毎月模範圖書の推薦をやつてをりますが、本日も小學程度の部として九冊の本が推薦になりました。その内、六冊までは本社の出版圖書でありました。推薦書と、會の審査評とを左に掲げます。

審査評

(小學程度の部)

◇ワシントン (三井信衛著 本郷國助坂町三五金の星社發行 四六判一七

一頁 定價九十錢) (譯) 世界少年少女偉人傳大系の第七巻でワシントンの生ひ立ち、事業終焉まで通俗な物語體にして叙述したものの。推薦したい。

リンコルン

(久米統一著 同前)

(譯) 同前第四巻、前者の姉妹篇として好箇の少年少女讀物である。

ナイチンゲール

(久米統一著 同前)

(譯) 同じく第六編で、平易にナイチンゲール女史の傳記を書いたものである。餘程事實に即して、正確な期さうとしたために、叙述が子供には稍々煩雜に過ぎると思はれる所もあるが、兎に角小學校上級にはよるこびよまれるよいものであらう。

魔法の薔薇

(三井信衛著 發行所同前 四六判一七頁 定價六十錢)

◇ほら博士 (同前 四六判一七頁)

ロミオとジュリエット

(大本雄三著 發行所同前 四六判一六五頁 定價九十錢)

(譯) 前二者は世界名作童話大系の一、二、後者は世界少年少女名著大系の第二十九編。何れも少年少女の讀物として適當と思はれる。

出版部より—讀後感が書さんから澤山に集つてをりますが、頁の都合上今月は出せませんでした。しかし次號から此の欄を擴張して澤山に出します。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。

金の星社

出版目録を

お送りいたします。出版目録の御入用の方は、ハガキで本社宛にお申込み下さい。早速お送り申上ります。

懸賞創作募集

【注意】 童 童 童 綴 童

（少年少女の創作）

方 謡……………野口雨情先生選
心 句……………野口雨情先生選

課題は何でもかまいません。諸君の目に見えたり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに句なり、文なりにして書いてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年（または住所と年齢）とおとさないやうにして下さい。（または住所と年齢）とおとさないやうにして下さい。用紙は童心句はハガキ、童謡や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は二月廿八日（その以後は次號へ廻る）発表は五月號、宛名は東京市本郷區板町三五九番地金の星社。

（一般讀者の創作）

話 謡……………野口雨情先生選
話……………齋藤佐次郎先生選
童謡は十五行以内、童謡は二十字語二百行以内、優秀な作品は『推薦』または『特選』として発表いたします。推薦の場合は童謡には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童謡には拾圓、童謡には五圓づつ、賞金として早します。但し少年少女の創作童謡にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、発表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價 寄冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の時はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

【注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（送金切手）一割増しです
▽第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください
廣告料は御覽會次第お貸へ致します

昭和二年二月五日印刷納本（毎月一回）
昭和二年三月一日發行（一日發行）
編輯兼發行人 齋藤 保
印刷人 小 端 安 之 助
印刷所 東京市本郷區板町三五九番地 金の星社
發行所 東京市本郷區板町三五九番地 金の星社
電話 小石川五三九七番

世界名作童話大系

錢六料送・錢十六價定・本美入箱判六四

編五第 編四第 編三第 編二第 編一第

魔法のバラ
ほら博士
盗まれた王女
親指トム
利口な驢馬

王子の爲めに國を追はれた優しい王子が女
神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのお
かけで、あらゆる困難から救はれるといふ面白
いお話です。
ほら博士といふほど大はら吹きのお話です。
です。實になんともかんとお腹をなへて笑
はすにはあられない面白いお話です。まア一度
読んでごらん下さい。
ベルシャの不思議なお話です。リンダガルと
いふ王女様が悪い魔法使にさらはれたので、
それを王子があらゆる困難をおかして助けに行
くお話です。
西洋の著名な法師のお話です。親指の大き
さがない親指トムがありとあらゆる困難を
行ふ愉快な物語です。お腹をなへて笑
事幾度か知れません。
驢馬が自分の一生を皆さんにお話したので此
の本です。利口な驢馬だけにそのお話もほか
では聞かれない愉快なものです。見世物に出
りしてながく面白いです。

磨齒ンオイラ

入ブーチ製煉

ライオンねりはみがきで

齒をきれいにし、

お節句をむかへませう。

